日印文化

インド共和国第75回独立記念 特集号-2021

日印文化 インド共和国第75回独立記念特集号 関西日印文化協会

関西日印文化協会
KANSAI JAPAN INDIA CULTURAL SOCIETY
कान्साई जापान - भारत सांस्कृतिक सभा

A Bridge Between India -Japan Business Relationship with 90 Years of Trading Business Excellence

SAS·SANWA Co. Ltd.

High Pressure gas , Welding materials / Ceramics , Thermal Insulation materials / Electronic Products / Castings / Overseas Business

President / CEO　Tetsuzo Hirose

◆SAS-SANWA Co., Ltd.◆
Main Office
1-4-12 Itachibori, Nishi-ku, Osaka, Japan　550-012
TEL： +81-6-6533-1152　FAX： +81-6-6533-1157
E-mail:sanwa.kokusai@sassanwa.co.jp

Tokyo Branch
5F Shiba-Taga Bldg., 5-9-10 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014, Japan

◆SAS SANWA India Private Limited◆
H No.440/11, GF, Ratan Garden Old Railway Road, Gurgaon-122001, Haryana, India

https://www.sassanwa.co.jp/

兵庫県立芸術文化センター
Hyogo Performing Arts Center

自ら創造し、県民とともに想像するパブリックシアター

KOBELCO 大ホール
コンサート、オペラ、バレエなど　2001席

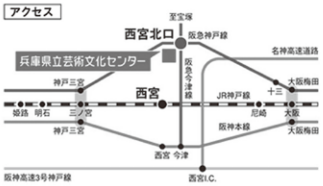
阪急 中ホール
演劇、古典芸能など　800席

神戸女学院小ホール
室内楽など　417席

ホールでは、コンサート、オペラ、バレエ、演劇など芸術文化の発信拠点として、様々な舞台芸術を展開しています。
地元・西宮をはじめ多くの県民・ファンの皆様のご支援のもと、年間、主催・貸館事業あわせて600公演を実施し、毎年約50万人の方々にご来館いただいております。
これからも佐渡裕芸術監督の「劇場はみんなの広場」という言葉を実現し続けるよう、芸術性豊かなものから親近感に富むものまで、『幅広いニーズ』に応える公演を継続し、皆さまに愛され、まちの賑わいの原動力となる劇場として頑張ってまいります。
また、芸術文化センターと共に創設された兵庫芸術文化センター管弦楽団は、佐渡芸術監督のもと、世界各地で行ったオーディションにより選ばれた若き精鋭達で構成されており、「世界一フレッシュでインターナショナルなオーケストラ」をめざします。
芸術文化センターは幅広い芸術文化活動を通じて、人々の交流と創造の輪が国内外に広がっていくことを願っています。

便利なアクセス!!
大阪梅田からも神戸三宮からも
ホールまで15分
(阪急電車特急乗車の場合)

◎阪急 西宮北口駅 南改札口 スグ(連絡デッキで直結)
◎JR 西宮駅より徒歩15分(阪急バス7分)
※ご来場は、電車・バスなどの公共交通機関をご利用ください。



先行予約会員募集中！

http://www.gcenter-hyogo.jp

〒663-8204
兵庫県西宮市高松町2－22
TEL:0798-68-0223(代表)

2 **ご挨拶** 溝上富夫
4 **祝　辞** Nikhilesh Giri（在大阪・神戸インド総領事）
5 斎藤元彦（兵庫県知事）
6 久元喜造（神戸市長）
7 Bhaven Jhaveri（インドクラブ会長）Ram Kalani（在日本印度商業会議所会頭）
9 Johnny Lalwani（インディアン・ソーシャル・ソサエティー会長）
10 **寄稿（論文・エッセー等）**
10 コロナ激禍のインドを生き延びる！やはり、日本の将来はインドしかない（磯貝富夫）
28 日本における英連邦進駐軍　インド部隊の素描：1945―1947 年（奥埜梨恵）
50 今こそ！文化芸術の発展と繁栄（モガリ真奈美）
60 インドフォークアートワークショップの記録（川瀬陽子）
76 「令和印度滞在記」（宮島菜実）
86 日本とインドを繋ぐ YouTuber という自分らしい生き方（人見眞代）
92 私とヒンディー語（安藤康司）
104 Beating Retreat Ceremony（フルドレスリハーサル）2019 の鑑賞（山本和美）
112 インド総領事館での勤務を経験して（武笠千春）
120 Yoga :My way of life（プールヴィー・ジャヴェリー）
122 福岡インド友好協会とは（クマール・ダルメンドラ）
126 タミルナードゥ州の地方都市での日本語教育の発展（アショーク・シャンカル）
132 インドの新教育政策 2020―特にその言語教育を巡って―　（溝上富夫）
152 **追　悼** 三上敦史さんを悼む
156 **資　料** インドの歴代大統領
157 インドの歴代首相
158 関西日印文化協会　役員名簿
158 公的機関　役員・所在地等
159 関西日印文化協会　会則

ご　挨　拶

関西日印文化協会会長
大阪外国語大学名誉教授
溝上 富夫

インド共和国第 75 回独立記念日を心からお祝い申し上げます。「75」という数字は、インドでは特別の意味をもつめでたい数です。この年に「日印文化特集号」をお届けすることができたことを嬉しく思います。今回の特集号にも、様々な人々による、様々な記事を掲載しました。今更ながら、インド文化とその人脈の広がりを知る事ができます。今回は、日印文化交流に尽くしておられる 3 名のインド人にも執筆を頂いております。

2020 年からは、コロナ禍のため、インドとの直接的交流が事実上遮断されるという異常事態に直面しております。インドとの往き来ができなくなったことほど、インドファンにとっては悲しいことはありません。インドはコロナ禍の最大の被害国の一つです。完全に報道の自由が保証された民主主義国ですから、その被害の悲惨さは TV を通してひしひしと迫って参ります。しかし、それにも関わらず、インドの人たちの、忍耐強く楽観的で、決して勇気を失わないその国民性には大いに学ぶところがあります。やがて、いつかはコロナ禍も収束します。会いたくとも会えなかった人達と会い、行くことのできなかった場所へ行ける日が早く戻ってくることを皆様方と祈っております。

なお、私はさる 5 月 3 日に、兵庫県知事から「国際協力功労賞」を受賞いたしました。しかしながら、これは私個人に与えられたものでなく、会員の皆様全員に与えられたものと信じています。コロナ禍の最中にあっても、私達は活動をやめなかったわけですから。

最後に、メッセージを頂いて本誌の価値を高めてくださった両国の各界の要人の皆様方に深く感謝いたします。

दो शब्द

भारत की ७५ वीं स्वतंत्रता दिवस की हार्दिक शुभ कामनाएँ देता हूँ। भारत में 「75」 विशेष मायने रखनेवाली शुभ संख्या है। इसलिए इस बात की विशेष प्रसन्नता है कि हम ७५ वें स्वतंत्रता दिवस के अवसर पर इस विशेषांक को आप के सामने प्रस्तुत कर सके। इस विशेषांक में भी विभिन्न प्रकार के लोगों द्वारा लिखित विभिन्न प्रकार के लेखों को प्रकाशित किया गया है। ये लेख भारतीय संस्कृति और उससे सम्बंधित मानव संसाधन के विकास के प्रमाण हैं। इसमें कुछ भारतीय मित्रों ने भी योगदान दिया है।

आपको पता ही है कि सन् २०२० से कोरोना की महामारी के कारण भारत के साथ प्रत्यक्ष संपर्क में रुकावट आई है। हम बहुत असाधारण स्थिति का सामना कर रहे हैं। भारत के साथ आवाजाही पूरी तरह बंद है। भारत प्रेमियों के लिए इससे बढ़कर दुःख की बात क्या हो सकती है !

भारत सब से अधिक कोरोना से पीड़ित देशों में से एक है। पूरी तरह लोकतांत्रिक देश होने के कारण समाचार पत्रों को पूरी स्वतंत्रता है, इसलिए टीवी के माध्यम से महामारी के कहर की असह्य विभीषिका देखने को मिलती रहती है। लेकिन उसके भी बावजूद भारत के लोग बहुत धैर्यशील, आशावादी और कभी हिम्मत न हारनेवाले हैं। उनके इस राष्ट्रीय स्वभाव से हमें सीखना चाहिए, कोरोना किसी दिन अवश्य ख़त्म होगा। ऐसा दिन जरूर आएगा जब जिनसे नहीं मिल पा रहे हैं, वे मिलेंगे और जहाँ नहीं जा सके वहाँ जा सकेंगे।

हाँ, मुझे गत १४ जुलाई को ह्योगो प्रिफेक्चर के राज्यपाल से "अंतर्राष्ट्रीय सहयोग योगदान पुरस्कार" प्रदान किया गया है। किन्तु मेरा विनम्र मत है कि यह पुरस्कार केवल मुझे नहीं, कान्साई जापान-भारत सांस्कृतिक सभा के सभी सदस्यों को मिला है। क्योंकि कोरोना महाकारी के बीच में भी हम लोग मिलकर दो देशों की सांस्कृतिक विनिमय की गतिविधियाँ करते रहे हैं।

अंत में दोनों देशों के ऐसे दिग्गजों के प्रति हार्दिक आभार प्रकट करना चाहता हूँ जिन्होंने अपना संदेश लिखकर इस पत्रिका की शोभा बढ़ाई है।

तोमिओ मिज़ोकामि

अध्यक्ष, कान्साई जापान-भारत सांस्कृतिक सभा, कोबे

अगस्त १५, २०२१

भारत का प्रधान कोंसलावास, ओसाका-कोबे
在大阪・神戸インド総領事館
Consulate General of India, Osaka-Kobe
सत्यमेव जयते

It is a pleasure to know that the Kansai Japan-India Cultural Society is bringing out a special issue on "Indo- Japanese Culture" commemorating 75 years of Indian Independence. The timing is more opportune, considering that India and Japan will soon be celebrating 70 years of establishment of diplomatic relations.

The Kansai Japan-India Cultural Society established in 1958, has a long and fruitful history and tradition. It has been working assiduously at promoting cultural exchange between Japan and India over the years holding movie shows, concerts, dance programmes, etc.

It is heartening to note that the impact of COVID-19 pandemic on normal life has not dampened spirits of the Society as they work at bringing out yet another special edition after the 70th year of India's Independence. I am told that this issue contains unique papers and articles by the new-generation contributors. It is my hope that the endeavour of the Society will contribute further to promotion of cultural exchange between Japan and India.

I take this opportunity to wish the Society success and further many productive years promoting cultural exchanges and strengthening India-Japan relations and understanding at people-to-people level.

(Nikhilesh Giri)
Consul General
15.08.2021

Tel: +81 6 6261 7299/9299 | Fax. +81 6 6261 7799 | Email: cons.osakakobe@mea.gov.in (Passport/Visa) ; admn.osakakobe@mea.gov.in (General)
〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-9-26 ルーシッドスクエア船場 10 階
10th floor, Lucid Square Semba, 1-9-26 Kyutaromachi, Chuo Ward, Osaka 541-0056

日印新時代 深まる友好の絆

兵庫県知事

齋藤 元彦

インド共和国の独立 75 周年を記念し、「日印文化」特集号が刊行されます。心よりお喜びします。

世界第 2 位の人口を誇り、IT 産業の躍進等によって世界経済の重要な一翼を担 っているインド。日印両政府の間では、経済分野にとどまらず、鉄道、海底ケーブル、デジタル、ヘルスケアなど多彩な分野で連携を強化していくことが確認されており、両国の関係がより一層緊密になると予測されています。

兵庫県では、2016 年 11 月に安倍晋三首相 (当時) とモディ首相の立ち会いにより、グジャラート州と相互協力の覚書を締結して以来、同州との友好関係を深めてきました。今年 6 月、グジャラート印日友好協会の皆様が、アーメダバード経営者協会の敷地に見事な日本庭園を完成されましたが、本県からも「ひょうご海外研修員制度」を活用した研修員の受入、造園に関する技術指導、県特産品である淡路瓦の寄贈など様々な協力をさせていただきました。この日本庭園が、両州県の新たな友好のシンボルとして、現地の方々に末永く親しまれることを願っています。

これまで兵庫県を中心として、インド文化の紹介・伝承など幅広い取組を展開してこられたのが、関西日印文化協会の皆様です。なかでも、毎年神戸で開催されている「インディア・メーラー」は、伝統的な踊り、音楽、料理などを身近に体験できるイベントとして大変好評を博しています。皆様のこれまでのご活躍に心からの敬意と感謝の意を表します。

来年、日本とインドは国交樹立 70 周年の節目を迎えます。兵庫県では、日印両国のさらなる発展に向け、グジャラート州を中心とする相互交流に、これまで以上に力を注いでいきたいと考えています。皆様には変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、コロナ禍が一日も早く収束し、世界各国の交流が再び活発 になることを、そして関西日印文化協会をはじめ、関係の皆様がご健勝でますますご活躍されますことを心からお祈りします。

祝　　辞

神戸市長

久元 喜造

インド共和国第 75 回独立記念日ならびに記念誌『日印文化』の発刊を心よりお慶び申し上げます。

神戸とインドの交流の歴史は古く、1868 年の神戸港開港以来、多くのインドの方々が神戸にお越しになり、各界で活躍してこられました。現在でも、市内には約 900 人のインドの方々がお住まいです。ジャイナ教・シーク教の寺院や多数のインド料理店などもあり、神戸の国際性を彩り豊かなものにしています。

関西日印文化協会は、1958 年 4 月の設立以来、神戸を中心に日印両国の文化・経済交流に尽くしてこられました。貴協会が参加・協力されている、神戸国際交流フェアやインディア・メーラーなどは、神戸市民にとって、インド文化に親しむまたとない機会となっています。

70 周年をお祝いした際には想像もできなかったことですが、この 5 年間で世界は大きく変わりました。特に 2020 年以降、新型コロナウイルス感染症の影響で、海外との往来や交流イベントが大きく制限されることとなりました。困難な状況下でも貴協会ではオンラインを活用し、「I LOVE INDIA 2020」イベントを開催されるなど、従来の交流事業に新たな工夫を加えながら、インドと日本の架け橋であり続けてこられました。このような、草の根レベルで展開いただく活発な交流こそ、with コロナ、ポスト・コロナ時代の日印交流にとって大切な礎になることでしょう。

神戸市でも、2019 年 6 月にインド・グジャラート州アーメダバード市との経済交流促進に関する意思確認書を締結し、2020 年 1 月には地元企業・市会議員団とともにアーメダバード市を訪問し、現地経済界や大学との交流を行うなど、交流を進めているところです。

貴協会には、今後とも両国市民の理解と友好の促進にお力添えをいただきますようお願い申し上げますとともに、貴協会の一層のご発展と会員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

THE INDIA CLUB
1-7-25, Yamamoto dori, Chuo-ku
KOBE 650-0003, JAPAN
078-221-8525

MESSSAGE

It is a great pleasure and feeling of utmost pride on behalf of our members at INDIA CLUB that The Kansai Japan-India Cultural Society is commemorating Indias 75 years of Independence by publishing the special isssue of the Nich-In Bunka.

Our relation goes back over 60 years with KJICS and we extend our gratitude and salute their efforts to promote and strengthen the cultural bond between these two great countries. Whenever India-Japan relationship is discussed, one person that comes to everyones mind is no other than Parma Shree Awardee Professor Mr. Tomio Mizokami.
Truly a well deserved recepient. His relentless effort and devotion in bringing every field of Indian culture, whether it is literature, music, dance, arts and etc. Is unmatched and commendable.

He and his organization have been the force behind in making Indian culture into something that the people of Japan look at with high respect and awe. Once again, I would like to congratulate Professor Tomio Mizokami and the KJICS as being pillars of this friendship between India and Japan and wish them great success on their special publication and hope that they continue with many more events and activities in strengthening this friendship.

Bhaven Jhaveri
President , The India Club.

ESTD. 1937

THE INDIAN CHAMBER OF COMMERCE - JAPAN

702, AUTHENTIC HIGASHI SEMBA BLDG
2-1, KITAKYUHOUJI-MACHI, 1-CHOME,
CHUO-KU, OSAKA 541-0057, JAPAN
P.O. BOX HIGASHI 433,
OSAKA 540-8694, JAPAN

Tel: (06) 6261-1741
Fax: (06) 6264-1605
Cable: "INCOC"
Home page: http://icc-japan.org/
E-mail: info@icc-japan.org

Message from the Hon. President of ICCJ
For Special Issue by Kansai Japan-India Cultural Society

We are very pleased to know that Kansai Japan-India Cultural Society is going to publish Commemorative issue on the occasion of India's 75th Independence Day on 15th August 2021.

Nichi-In Bunka (Indo-Japanese Culture) is in existence over thousands of years since the days of Buddhism propagating from India to Japan.

Both India and Japan have many commonalities in culture, religious system. Corner stone of the relation is bilateral exchange of trade and common stand in international affairs especially for the well being of people around the world.

The countries irrespective of ruling contingencies, have stood rock solid to help each other over decades, more prominently after the World Wars that affected the countries all over.

In this backdrop the role played by Indo-Japan Cultural Society to improve the bonding between the two countries is not only commendable but also inspiring to the people of both the nations.

Our sincere thanks and gratitude to Indo-Japan Cultural Society and its President Tomio Mizukami san. He has been felicitated by the Government of India by awarding him with "Padmashree" which he richly deserve for the role played by him for decades.

The cultural events in Japan arranged and hosted by Indo-Japan Cultural Society strengthen the friendship of the people of both the countries, under the able leadership of Professor Mizokami.

I, on behalf of ICCJ and the Indian diaspora extend warm greetings to the Society and look forward more successful interactions in days to come.

Ram Kalani
Hon. President

ESTD. 1954

THE INDIAN SOCIAL SOCIETY

1-3, KUMOCHI 5-CHOME, CHUO-KU,
KOBE 651-0056, (JAPAN)

TEL: (078) 242-4092 **FAX: (078) 242-0135**

email: iss.kobe@gmail.com

MESSAGE

I am delighted to learn that the Kansai Japan-India Cultural Society is publishing the special issue of its journal ***Nichi-In Bunka***, in commemoration of India's 75th Independence.

We extend our heartiest congratulations and gratitude to Professor Tomio Mizokami and the Kansai Japan- India Cultural Society on the issuance of this special issue. The continuous role in strengthening cultural relations between Japan and India for over half a century is applaudable. Under the leadership of the third and current President Professor Tomio Mizokami, the Society has vigorously continued its mission by implementing his practical interests of training young Japanese students and arranging several events on India in Japan and in India including traditional dances, music programs, plays and lectures, all focused on Indian culture. This is impressive, amongst all other achievements of the Society.

Professor Mizokami is the Pride of Japan, India and our Community for his achievement of being honored with the prestigious Padmashri Award in 2018. It is well deserved and we are honored to have him within our community.

Since 2020, the COVID-19 Pandemic has limited the normal lives we all enjoyed. The Pandemic, however, did not limit the Kansai Japan-India Cultural Society from their activities to promote Japan-India Cultural Interactions and they remain to be the key players to further improve the bond even at such times.

It is also a noteworthy achievement to learn that keeping up with the digital age, all previous publications since 1958 till the present are now completely digitalized and can be easily accessed through their website.

Once again, I congratulate Professor Tomio Mizokami and the Kansai Japan-India Cultural Society for continuing to maintain the strong foundation of healthy bilateral relations, and on the publishing of the special issue of the ***Nichi-In Bunka***. My best wishes always for all the best in its future endeavors.

THE INDIAN SOCIAL SOCIETY

Johnny Lalwani
(Hon. President)

August 15, 2021

コロナ激禍のインドを生き延びる！
やはり、日本の将来はインドしかない

日印関係アドバイザー　本会理事
MIT World Peace University 非常勤講師
磯貝 富夫

いきなり「生き延びる」とは大袈裟に聞こえるかも知れないが、未曽有のコロナ禍はインドをその第二波が襲っており、約二ヶ月前の 5 月上旬には一日の新規感染者数が 40 万人、死亡者は 4 千人を超えるという異常事態に陥り、罹患しても医者に診てもらえないという医療崩壊が報じられ、本来救えるはずの尊い生命が酸素不足によって失われるという、正に死と向かい合う人達が急激に増えていた。5 月の一ヶ月間に MH 州のコロナによる死亡者は 25 千人を数え、その最悪の都市が私の住むプネ市であったとの報道にも接している。プネ市の人口は 700 万人とされるが、既にコロナ罹患者の累計は 105 万人を超えている。計算上は 7 人に 1 人が既に罹患しているということだが、人口の半分がコロナに罹りにくい 25 歳以下の若者であることを考慮すれば、この計算は「3 人に 1 人」ともなるのではないか。つい最近まで、周囲の友人や仕事仲間が罹患したり、ほぼ毎日のように友人や知人から家族の訃報が届いていたりしたのだから、「コロナ激禍を生き延びる」と言っても決して大袈裟な話ではないだろう。幸い、5 月の中旬から第二波はピークアウトしており、新規感染者数は減少に転じ、進行中のアクティブ感染者数が減少し始めたところである。因みにこの小文の最終原稿を執筆している 2021 年 6 月 30 日現在の、インドのコロナ感染者累計は 3,041 万人、死亡者数は 399,475 人と明日にも確実に 40 万人に到達する見込みである。(インド厚生省データに基づく「COVID-19 Tracker」による、以下同じ)

およそ一年前の昨年 6 月 25 日に、関西日印文化協会の溝上会長 (私は溝上先生と呼ばせて頂いている) から「インドのロックダウンの実態をオンラインで協会メンバーに話して欲しい」との要請を受け、当時のコロナ禍の状況をまとめて「インドのコロナ禍を経験して思うこと」と題して報告をさせて頂いた。その時点ではインドの累計感染者数は 47 万人、

死亡者数は15千人弱であったのだから、その後の一年間でどれだけ状況が悪化したか想像してもらえると思う。昨年の3月に始まったロックダウンの衝撃から、徐々に規制が解除されていく中で、自分の身の回りに起こった出来事が余りにも多く、限られた字数では収まり切れないこと、インドとインド人について日頃から思うことや、日印関係の将来の展望についても言いたいことが山ほどある。ともあれ、駄文に加えて冗長になることをお許しいただきたい。

1．インドとのご縁

2011年の1月、シャープ(株)の社員としては最後の駐在地となるインドに赴任して以来、今年の1月で丸10年が経過した。過去に4ヶ国の駐在経験があり、世界60ヶ国以上を巡ってきて、「インドだけは駐在したくない」と言っていた自分であるが、「住めば都」はどこにでも当て嵌まるようだ。さすがに10年の節目を迎えたのは感慨深いものがある。当初の2年間はニューデリーに住みながら、インドの各地を巡っては、現地法人のCOO(副社長)としてインド人社長を補佐し、主に営業活動をしていたのだが、その約2年後、西インドのプネ市に拠点があり、約30年前にインド企業との合弁会社として設立された歴史を持つ製造工場であるSharp India Ltd.の当時の工場長(社長)に指名されたのが2012年12月のことであった。運命の悪戯なのか、それとも天命として決まっていたことなのか、2012年12月以来、ずっとこのプネ市に住み、インド企業数社と親日団体のアドバイザーを務め、私立大学の経営学部と大学院で非常勤講師として教鞭を執るなど、好きなことだけをしながら、お蔭様で毎日を楽しく過ごしている。2016年3月に定年を迎えたが、当時の会社の事情もあって嘱託の立場で現職を半年間だけ延長することとなった。その時点で既に私は、定年退職後も当地プネに戻ってくることを決めていた。それは、当地の友人達との固い信頼関係ができたことで、自分の居場所をここに見出したからである。日本とインドとの関係はまだまだ成熟段階にあるとは言い難く、相互理解からして全く不足しているのが実態であることを知ったからでもある。自分ができること、好きなこと、社会が求めていること、それは日本とインドの両国関係の発展に貢献できる、新たなミッションとなることに気付いたからに他ならない。

プネというこの土地は、正にその新しいミッションを担う拠点としても絶好の場所であった。プネと聞いてもピンと来ないかも知れないが、プネこそ日印関係の中心的なハブ都市であると言っても良いと思う。特に当地は日本語教育が盛んで、インドのフリーダムファイター

（独立運動家）として名高い Lokamanya Tilak 氏が設立した私立大学 Tilak Maharashtra Vidyapeeth(ティラック・マハラシュトラ大学、略称 TMV 大学) には日本語学科があり、日本語専攻の学士や修士の資格が取れる、インドでは稀有の存在である。その関係で同学には国際交流基金の西インド支部が学内に設置されている。同学と大阪外国語大学 (現大阪大学) は古くから提携関係にあり、毎年学生交流がある。また、毎年 TMV 大学から、インド国内で最多の国費留学生 (日本語及び日本文化専攻) を日本に送り出していて、日本側の受け入れ大学も大阪大学を始めとして 10 大学を数える。

当地の親日家が設立した「プネ印日協会」は、インドの中でも最も古い親日団体の一つであり、日本語教室も併設されている。私は当地に赴いて最初に知り合うことになったインド人 (マハラシュトラ人と呼ぶべきだろう) が、このプネ印日協会の創設者の一人、故ラメッシュ・ディベカール氏である。同氏が主幹となりプネで初めての「Japan Week」という、日本文化紹介イベントを 2013 年 3 月に開催された際には、シャープの大画面テレビやオーディオ機材を貸し出して応援させてもらった。

私が退職後にもプネに戻ってくることを決めたのは、同氏との友情の賜物であったのだが、運命とは時に残酷なものである。私がシャープ (株) を定年退職して日本に帰国していた半年間のある日、この私の最愛の親友は病に倒れ生涯を閉じたのである。今日、自分が担っている日印関係の発展のためのミッションの全ては、彼の遺志を継ぐことでもある。

このプネというインドでは第 8 番目の大都市 (人口約 7 百万人超) と、日本とのこのような繋がりについては全く知らなかったのだが、Oxford of the East(東洋のオックスフォード) の異名を持つ学園都市で、デカン高原の入口にあるこの温暖な気候と、愛国心に満ちた土地の人々との出会いの中で、この都市の多くの親日家と知り合うに従い、この街と人々との絆が深まっていくことになるが、まさかコロナ禍とロックダウン (都市封鎖) という憂き目に遭うとは全く想定しなかった。

2. いきなりロックダウン

2020 年 3 月 22 日、インド政府はコロナ禍が徐々に浸透していく中で、欧米に習い外出禁止令 (午前 7 時から午後 9 時) を発令した。そしてその日の午後 5 時になると、何か外から物音がするのでベランダに出てみると、周りの住民が皆ベランダに出て、鍋や釜などの食器を手にカンカンと音を立て始めていた。何が起こったのかと、インド人の友人にスマホで問い合わせると、欧州での事例に習いモディ首相が提唱したらしく、コロ

ナ対策に従事している医者や医療従事者に対する感謝と敬意を表するために、国民全員で一斉に物音を立てるという行事であった。こういう時のインド人の団結力はたいしたものだが、音を立てるという感覚は日本では全く考えられないことだ。その大音響は 5 分ほどで収まった。その翌日、インド政府は 25 日から全国でロックダウン (都市封鎖) を実施することを発表した。当初は 3 週間の予定であったが、その後数度延長されて最終的には 5 月末までとなった。ロックダウンとは一体何なのか、さっぱり想像できなかったのだが、周りの友人達によると、どうやら時間限定で外出は許されるが、近所で買い物をすることだけで、仕事に出かけたり友人と会うことはできないとのこと。日常生活必需品、つまり野菜や果物、飲料水などはキラナショップ (インドではどこにもある街中の何でも屋) やスーパーでも買えるが、薬局以外のその他のお店は全て閉店となった。市内の移動も制限され、タクシーのサービスも鉄道やバスなどの公共交通機関も運行が中止された。また、ロックダウンの当初は、街中をバイクや車で移動する人達を取り締まる警官の姿や、お店にマスクもしないで入店する客への指導や、入店前のソーシャル・ディスタンシング、一度に入店する人数を制限するための監視なども、実際には見たことはないが、YouTube では目についたものだ。行きつけのスーパーはショッピングモール内に併設されていたが、モールは閉鎖され、スーパーには地下駐車場からのみ入店できる。入口にはセキュリティチェックがあり、体温を瞬時に計るデジタル体温計で係員が一人ひとりの体温をチェック、足でペダルを踏むとちょうど手の高さに設置してあるサニタイザーのスプレイを手で受けて消毒してから入店するという、いかにもインドらしいお金をかけずに効果が出る道具が設置されていた。

2020 年 4 月 16 日、ヨガの指導をうけていた先生から連絡があり、この日からオンラインでレッスンを受けることになった。以前は先生宅に日曜日の朝に通っていたのだが、コロナ禍になって中止していたもの。オンラインでもヨガのレッスンが受けられることが確認できたので、その後、週二回に増やすことになった。今から思えば、こうして一度も陽性反応になることも無く、コロナにも罹っていないのは、自炊による野菜中心の食事とホームメイドのヨーグルト、そしてヨガが健康維持に大いに貢献したことを実感している。

ロックダウンは自分で自炊することを余儀なくされたので、最初はインスタント食品を中心に、少しずつ料理をネットのビデオ情報を見ながら習い始め、慣れてくると自炊も楽しいものになっていった。油を使う揚げ物は火傷の心配があったので、当初は敬遠していたのだが、

ロックダウンが長期化するに従い、自炊のレパートリーも増やさねばと奮起して、あらゆる料理に挑戦していった。魚釣りをしない自分が、鮮魚を丸ごと買ってきて三枚に下すなんてことは、生まれて初めての経験であったが、失敗を重ねながらも大いに楽しんだ。ともかく外食産業は最初のロックダウンから今まで、一時期を除いて開店しておらず、デリバリーサービスのみ可能となったのだが、一人で生活する者としては、これらのサービスでは量が多すぎるし、味付けもインド風で濃く、脂っこく、辛く、しょっぱいので、やはり自分で料理するしかないと悟ったのである。実は最も辛かったのは、ロックダウンでは酒屋も全て閉店となり、予期していなかったせいで、ビールやワイン、ウイスキーなどの酒類を買い置きしていなかったために３月末には切れてしまい、６月にロックダウンが解除されるまでの約 10 週間は完全な禁酒生活を強いられたことである。その後もロックダウンが ON/OFF を繰り返す度に、ビールなどの酒類を買い溜めするようになり、何とか凌いでいる。

2020 年５月７日、なんと、体重が 65kg を切った！何年も目標としていたのだが、こんなに簡単に僅か２ヶ月足らずで減量できたことに驚いた。自炊とヨガと禁酒のお蔭である。（禁酒が解けてから、現在はまた少し増えてきているのが悩ましいところではあるが。）

３．アンロックと『自立したインド』そしてインドらしい災難

2020 年５月 31 日、最初のロックダウンが一旦数日間のみ解除された。それに先立つ５月 12 日、モディ首相は国民への４回目の演説の中で、Atmanirbhar Bharat『自立したインド』政策と経済政策第二弾 (約 28 兆円規模) を発表した。この『自立したインド』こそが、モディ首相のポストコロナを見据えた新たな国家成長戦略と言える。それは「経済・インフラ・テクノロジー主導・人口・需要」を５つの柱として捉え、それらを基軸として他国に頼らない自立したインドを目指すというものである。モディ首相らしいお題目としては聞こえの良い政策だが、スローガンは立派だが具体性に欠ける点もいつものことではある。これはインドの政治の特徴とも言えると私は考えているもので、首相はまず誰にでも解りやすいスローガンを掲げて、方向性とゴール (到達目標) を明確に示すのであるが、それらをどのようにして実行し、達成するのかという点は後から付いてくるものなのである。これまでにもモディ首相は「Make in India」や「Digital India」、「Skill India」とか「Swacch Bharat」(クリーン・インディア) などのスローガンを掲げて、国民に対して自らが目指す方向性と目標を明確に示して

きた。コロナ禍という未曽有の予期せぬ事態に見舞われて、必ずしもその目的は達成されていないのが実態であるが止むをえまい。

2020年6月1日からUnlock1.0(ロックダウン解除)が始まった。1週間後の8日からは、レストランやショッピングモールも営業を再開した。これは必ずしも感染状況が好転したからではなく、経済へのダメージと失業者の増大に対する経済対策としての狙いがあったと見られる。この頃には自分はロックダウンの引き篭もり生活にも慣れてきていたので、苦痛はなかったが、やはりショッピングモールが再開したことは解放感があった。何よりも酒屋が再開したことは有難かった。再開初日、買ってきたばかりの冷えていないビールを一気飲みしてしまった。

2020年6月3日、昨晩は大変なことに！

サイクロンという日本の台風のような暴風雨が襲ってきた。運よくその予報を知人からのメッセージで知らされていたから、ベランダにある、風で飛びそうな小物を片付けたり、ゴミで詰まり易い排水口を掃除したりして万全の構えをしていた。ところが、である。夕方、予報通り暴風雨が近付いて来た。雨は降り続いていたが、大雨でもなかったので安堵していたら、な、な、なんと、夜寝る前になってふとリビングのソファに座ったら、「つめた！」水で濡れている！見上げると天井から漏っているではないか！みるみるうちに雨漏りを受ける容器の数が増えていく。ちょっと待て、ここは11階建てのマンションの10階なのに何で雨漏りすんねん？上の階で大変なことが起きているに違いない。念のために他の部屋も確認すると、ベランダのあるメインベッドルームも天井に水が染み込んできているのを発見。上の階の様子が気になるが、こっちの雨漏り対策が先決。程なくベッドルームも雨漏りが始まり、鍋や釜やタッパーの容器で受けて、深夜まで様子を見てから床についた。その頃には雨は止んでいた。幸いにもベッドはほとんど雨漏りの被害に遭わずに済んだ、と思ったら、翌朝起きてベッドにも天井からポタリポタリ！リビングの雨漏りは止まっていた。これはどうやら上の階の住人が不在で、ベランダから雨水が室内に侵入し、リビングとマスターベッドルームが水浸しになっているに違いないと断定。リビングの雨漏りは外の廊下に面した天井に集中していたので、上の階のリビングにある玄関ドア下から雨水が外に染み出したのであろうと推測、雨が止んだ時点でリビングの雨漏りも止まったと断定。問題はメインベッドルームで、雨漏りは止まるどころか、ますます広がっていく。シンガポールに住む家主にメッセージと写メを送ったら、しばらくして家主から携帯に電話が掛かって

きて、事情を説明して指示を仰いだ。何とかしてくれそう。しかし、上の階の住人が不在なら、直ぐの解決は全く期待できない。マンションの管理人が昼過ぎに様子を見に来たがその後は何も連絡がない。今晩も暴風雨の危険性があるという予報。落ち着いてはいられないが、ジタバタしても仕方がない。できることをやったら、後は成り行きに任せるしかない。インドとはそういうところである。結果として、管理人が上の階の住民に連絡が取れて、翌日再度こちらの様子を見にきてくれたが、推測通り上の階の家屋が水浸しになっていたらしく、先ずはそちらの手当が先ということになり、いつかこちらの天井の修理もするということで納得したが、実は本日 2021 年 6 月 30 日まで既に一年が経過しているが、修理はされていないままである。大家さんもどうしたのか、実際の被害状況を見ていないこともあり、沈黙している。こちらとしては生活に特段の支障は無いので、様子見することにした。自分も相当インド人化していることを感じる。

4．コロナで得たこと

ロックダウンが実施された 3 月下旬以降、教鞭を執っていた当地の MIT 大学の講義は全てオンライン化されていたし、外部講演も既に数回に亘りオンラインで実現していた。コロナは全ての仕事のやり方を変えている。その変化はある意味では進化していると言えるかも知れない。場所や距離を意識することなく、またお互いの移動時間を無駄にすることなく面談や講演、あるいは Webinar などを実施できることになったことは、自分にとってはむしろこれまで以上に仕事の機会を得ることに繋がったからである。現実にコロナ禍でアドバイザーとしての仕事も増え、インドの大学やビジネスサークルからの講演の依頼も増えた。

実に、昨年の 4 月から本年の 6 月末までの間に、日印双方でオンライン登壇した回数は延べ 75 回を数え、内日本で開催されたイベントが 11 回ある。コロナのお蔭で色々と得ることも多かったように思う。自分としての最大の成果は、当面の目標でありながらなかなか進展していなかった 5kg 減量に成功したこと、そして自炊が得意になったこと、昔の友人ともオンラインで旧交を温める機会となったこと、オンラインでの講義や講演にも慣れたこと、YouTube で多くの有益な情報を得たこと等々、コロナ騒ぎが無ければ、決してなし得なかったことが沢山あることに改めて気付かされたことに感謝したい。良く耐えた自分と、支えてくれた家族や周りの人達に乾杯！！

2020 年 10 月 24 日、10 月になり多くの制限が解除された。レストランやモールは再開、映画館をはじめジムやスパなども営業を始めた。新規感染者数は

一時の増加スピード (一日９万人！）からピークアウトしたが、それでも増加している状態なので、用心しながら先週末から外出するようになった。マスク着用は当然ながら、サニタイザー (消毒液) は欠かさず携帯して使用する。昨日も約半年振りにランチを外食で済ませた。モールの入口では体温チェックがあり、手荷物は紫外線消毒をされて入場。レストランでは、席に着くとサニタイザーを持ってきてくれる。テーブル席は隣との間隔を開けてあるが、シールドまでは設置していない。

そして、朗報が届いた。ようやくインド政府は外国人に対するビザを解禁した。一部 (E-Visa など）を除いて、「出国したら無効」とされていたビザが全て有効となったので、自分も年末年始には一時帰国しようかなと考え始めていた。日本とインドの航空路線は Air Bubble という協定に基づいて、週に１、２便が飛ぶようになっていたが、日本政府はインドを安全度「レベル３（渡航中止勧告)」を発令していた。悩ましいのは、インドからの便は東京行きしかなく、到着後の行動規制があって、東京から自宅のある奈良まで公共交通機関を利用できないし、到着地での隔離期間があること。この制限が緩和されないと、日本に到着しても 14 日間はホテル詰めで外出もできないし、奈良の自宅に戻ることもできないのである。

５．気分転換も時には必要

2020 年 11 月 13 日、インドは今日から年間最大の祭事、ディワリ (ヒンドゥー教徒のお正月) で６連休。昨日が大晦日に相当するので実際には昨日からお休みになっているところが多い。大学もアドバイザーの仕事もお休みなので、プネから車で１時間程の、ロナバラという日本では箱根か六甲のようなちょっとした避暑地リゾートで、二泊三日の骨休めをすることに決めた。何せパンデミックでロックダウンが半年以上も続いていて、本来ならこちらの夏休み (5 月から７月) には日本に避暑を兼ねて帰る予定が狂ってしまったので、息抜きをする機会が無かった。明日から、３日間新鮮な空気と森林浴と、何といっても嬉しいのは上膳据膳である。二日目と三日目は当地のホテル内に併設しているスパで、アーユルヴェーダ (インドの伝統的自然医療) のオイルマッサージでデトックスとリラクゼーションを堪能した。

2020 年 12 月 15 日、私が敬愛して止まない溝上富夫先生 (大阪外国語大学名誉教授、関西日印文化協会会長) が、当地で私が非常勤講師を務めている MIT World Peace University 大学主催の「インド全国教師会議」に特別ゲストとして招聘された。私がお声掛けをして快諾されたので、大学側にも提案し了承されて

実現したものである。溝上先生はヒンディー語でスピーチされ、非常に高い評価を得られ、MIT 大学総長から、2021 年秋の「世界平和会議」へ来賓として招待されたことは予想以上の嬉しい展開となった。

2021 年 1 月 17 日､プネに春が来た！ちょうど日本の桜のようにこのインドの花 (Pink Trumpet) も春の到来を告げる風物詩である。花の種類は桜とは全く違うが、この短命の淡いピンク色の花は遠くから見ると桜を思い出させてくれる。

6．オンラインで各種イベントにも参加

2021 年 2 月 4 日、この日、インド人によって執筆された書籍、”BECOMING WORLD CLASS - Lessons from ‘Made in Japan’” のお披露目が、鈴木哲駐インド大使閣下ご臨席の下でオンラインにて執り行われ、私もゲストとして招待を受けた。当書籍の著者は Prem Motwani 元 JNU 大学教授で、40 年間に亘り日本語教育に携わり、日本には延べ 80 回以上の訪問歴と 6 年間の滞在歴 (内 2 年は広島大学客員教授）を持っておられる知日家で、2020 年に日本国による「旭日章」を受勲されている。実はモトワニ先生とは直接の面識はなかったのだが、数年前から SNS での交信でお付き合いがあり、今回出版された新著もお贈り下さり、つい最近届いたばかり。全 470 頁に亘る大著で読破できていなかったが、その「まえがき」と「結論」を読んで非常に深い感銘を受けた。この新著は、日本が築いた ”Made in Japan” という信頼のブランドの背景にある日本的経営手法とその叡智を、インドのモディ首相が謳う ”Make in India” による経済発展のためのスローガンを、成功に導くために活用することの重要性を主張し、インドが抱えている根本的な課題と、それに対する解決策を示唆しているもので、正に自分にとっても「目から鱗」であった。この日以来、私はモトワニ先生のこの大著を大いに PR することになる。

同書がいつ日本で発売されるかは未定とのことだが、いつか日本語に訳されて広く流布されることを期待している。

2021 年 3 月 1 日、去る 1 月にインド滞在 10 年を超えたが、この節目に友人のネットチャネル ”HATKE - Think Differently, Think Positively” でインタビューを受けることになった。HATKE はヒンディー語で「差別化すること」の意味があるらしいが、この言葉を聞いて先ず思ったのが日本語の「八卦」であったので、その話から始めて、日印関係について約半時間に亘り話をしたものが、後日ネットで配信された。ネットメディアによるインタビューは実はこれだけに留まらず、その後も日印ビジネスを語るトークショーに 2 回

出演する機会を得た。

2021 年 3 月 12 日、横浜国大の日印関連イベントである、「第四回日印産官学連携人材育成セミナー」の日印関係の現状と課題というテーマに関連し、私は「コロナ禍のインドと日印関係」と題して登壇した。

7．油断大敵！

2021 年 3 月 12 日 、NHK はネットで、「インド コロナ感染拡大の中 世界最大の宗教行事」と題して以下の通り報じた。(以下、同記事抜粋)

インドでは、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、「世界最大の宗教行事」といわれるヒンドゥー教の行事が始まりました。「クンブ・メーラ」と呼ばれるこの行事は、インドにある 4 つのヒンドゥー教の聖地で周期的に行われ、期間中に延べ 1 億人以上が川に入って身を清めるといわれています。今回は、ヒンドゥー教で神聖な日とされる 11 日からガンジス川流域の北部の町、ハリドワールで始まりました。ガンジス川沿いには早朝からサドゥーと呼ばれる聖者や大勢の人々が集まり、川の水に頭までつかるなどして、もく浴し、祈りをささげていました。インドでは、新型コロナウイルスの感染者の累計が 1100 万人を超えていて、1 日当たりの新規の感染者は今月に入って 2 万人を超える日があるなど感染拡大が続いています。地元政府は、今回の「クンブ・メーラ」について、期間を短縮するとしたうえで、参加者には PCR 検査の陰性証明の提出を求め、感染対策を徹底するよう呼びかけています。

(unquote)

自分はこの世界最大規模の巡礼とも言われる「クンブ・メーラ」を、2016 年に聖地の一つであるウジャインで一度体験しているが、確かに大変な人混みとなるコロナ禍で開催されたこの一大宗教行事で、どこまで感染対策が徹底できたのか、想像するに余りある。実際に 3 月 25 日の時点で、地元高裁は「クンブ・メーラ」の巡礼者に陰性証明を義務付けるに至っている。また、医療専門家は、この時期に宗教行事や選挙がらみの政治集会が各地で実施されたことが、コロナの第二波の襲来の原因になっていることに言及し、モディ政権を強く非難した。

モディ政権のコロナ第二波に対する油断はそれだけに留まらない。インドで夏の到来を告げる風物詩、Holi(ホーリー) のお祭りが 3 月 28 日から 29 日にかけてインド北部を中心に祝われた。首都デリー警察はコロナ第二波を警戒して、公共場所での同お祭りを禁止、マハラシュトラ州政府も同様の指令を発令した、のだが。。。

このカラーフェスティバルとも呼ばれるお祭りは、人々は家から出てお互いに頭

から全身に色とりどりの粉をかけてはしゃぐのが通例。この日に外出すると必ず誰かにカラー水鉄砲で攻撃されて、着ていた服に付いた色が落ちないので、毎年外出を控えていたが、今年はホーリー禁止令が出たので、安心して買い物に出掛けてみたら、街は静かでカラー鉄砲も見かけることはなかったが、やっぱりいた！いつものように全身に色を塗りたくった人達、ルールを守らない人はどこにも居る。

2021 年 4 月 1 日、ムンバイ市行政当局は、コロナ感染者で自宅隔離が可能な条件として、(1)無症状であること、(2)中程度の症状であること(既往症がなく、発熱が３７．８℃以下で血中酸素飽和度９５％以上であること。)（3）既往症がある年配者で主治医の診察を受け、病院の医師による診断を受けた者であることを発表した。翌２日、当地プネ市長は「プネはインド全体で最も感染率が高く、一日の新規感染者数も９千人を超えた。」として、3 日から 7 日間の「ミニロックダウン」を発令した。それによると午後６時から翌日朝６時までの間は、医療機関や薬局を除き、全てのサービスは禁止となる。学校も 4 月末まで閉鎖され、オンラインの授業に戻った。

2021 年 4 月 4 日、友人宅を訪問した際に玄関先で見かけた「自主隔離中」という張り紙が陽性反応のあった家族に対して実施されていた。(写真参照)

2021 年 4 月 5 日、地元新聞によると、マハラシュトラ州では直前の日曜日に 57,074 人の新規感染者が記録され、ムンバイ市はインド全国で最初に 1 万人を超えたと報じた。また、インド全土でも一日の新規感染者数が 10 万人の大台に初めて乗ったと報道していた。なお、ワクチン接種は 1 月中旬から、医療関係者、65 歳以上の高齢者を優先的に扱っている。4 月 1 日以降、これを 45 歳以上まで拡大すると発表された。皮肉にもこの辺りから、新規感染者数が急増していくのである。モディ首相はインド国民に対し、コロナ対策の原点に返り対策ルールを徹底遵守するように呼び掛けた。

2021 年 04 月 30 日、ローカル紙の報道によると、インド自動車最大手のマルチ・スズキおよびスズキ・モーター・グジャラートは、急拡大する新型コロナウイルス感染症への治療に医療用酸素の不足が深刻化していることに鑑み、ハリヤナ州、グジャラート州の全基幹工場を 5 月 1 ～ 9 日の間、操業を一時休止すると発表した。同社プレスリリースによると、スズキも操業のために酸素を使用しているが、同社に部品供給している部品メーカーは、より多くの酸素を使用するため、現在の新型コロナウイルスの感染状況において、これらの酸素は人命救助のために使うべきだとしている。インドでは医療現場での酸素不足が深刻化し

ており、スズキのグジャラート工場に近接するアーメダバード市郊外のマンダル日本専用工業団地においても、警察からメーカー各社に対して、工業用酸素ボンベを供出するよう協力要請がきている。

この辺りからインドの主要都市での医療崩壊が顕著に現れてくるのである。

8．直近の状況

2021 年 5 月 6 日、この日インド全体の新規感染者数が 414,188 人と最高記録を更新したが、この後はピークアウトしている。この最終稿を執筆している本日 6 月 30 日現在は、48,878 人にまで減少し、治療中の Active 感染者数も 529,580 人 (前日比 14,138 人減少) となっている。死亡者数も 991 人増と大きく減少しているが、増えていることに変わりはない。

2021 年 5 月 31 日、マハラシュトラ州政府は，現在実施されているロックダウン措置を 6 月 15 日午前 7 時まで延長することを発表した。食料品等の店頭販売時間は，原則午前 7 時から午後 2 時まで延長された。(これまでは午前 11 時までであった） 但し、居住地域における陽性率や重症患者用病床の空き状況等により、店頭販売時間に関する規則が異なる可能性があるとのことだ。(在ムンバイ日本国総領事館領事部） その他の非生活必需品を販売する店舗（モール等を除く）については，各自治体当局の判断により上記時間（月曜から金曜）営業することが可能となる。(同上） 良かった！酒類の販売は再開されたことを確認した。それなら昨年のような禁酒生活を強いられることはない。6 月 30 日現在はモールは再開されているが、午後 4 時で全てのモールや商店は閉店となっている。

9．インド救援のために！

2021 年 5 月 21 日、私は自分のネットワークであるメーリングリスト (世界 300 名超の日本人宛て) に以下のメッセージを一斉配信した。(一部抜粋)

(quote)

民間有志グループによる『緊急インド救援ファンド』が 5 月 9 日に設立しました。このファンドはクラウドファンディングと銀行振り込みを利用して、インドの窮状を救うための義援金の公募をするボランティア活動です。これはインドの伝統医学である「アーユルヴェーダ」(生命の科学) に関わっておられる学術団体の「日本アーユルヴェーダ学会」と「NPO 法人日本アーユルヴェーダ協会」の 2 つの団体による合同の募金活動です。正式名称は「世話プロジェクト 日本からインドへ COVID-19 救援ミッション」となりました。このプロジェクトに参画しているインド人の有志からアイデアを募って、「Sewa Project」というニックネームを付けました。SEWA という

言葉はインドのヒンディー語でも日本語と同意語とのことです。同プロジェクトは本日より、クラウドファンディングを通して義援金の申し込みを受け付けております。

このプロジェクトでは、インド政府認定による国際援助の受け皿となるインド赤十字社を通して、緊急に必要とされる医療機材などの救援物資の調達と無償提供、及び義援金の日本からの送金を行います。その資金集めのために皆さまのご支援をお願いする次第です。第一弾は5月31日までの期間での義援金の公募を行います。当然ながら募金の集金明細や使途明細の透明性、トレーサビリティなどを確保しながら進めて参る所存です。

このインド救援活動にご関心がおありの皆さまにおかれましては、クラウドファンディングにお申込みを頂き、クレジットカード決済もしくは銀行振り込みにて募金をお願いする次第です。同ポスターはSNSなどでも広く拡散して頂ければ有難いです。今回のこのプロジェクトの第一弾（5月31日まで公募）では、緊急救援物資調達資金および義援金として1500万円を目標金額としました。
私はインドに10年お世話になっておりますが､インドの実情を深く知るにつけ、日本人として生まれたことをどれだけ幸運に思うことが何度あったことか、数え切れません。皆様の温かいご支援をどうぞ宜しくお願い致します。
(unquote)

このプロジェクトには関西日印文化協会にもご後援を頂戴し、ご支援を頂いていることに対し、溝上会長はじめ会員の皆様のご厚意に対し心よりの感謝を申し上げます。その後、この「世話プロジェクト」は6月20日まで義援金の公募を行うことになり、6月20日時点のちょうど一ヶ月間で、累計650万円もの義援金を集めることができた。その一部は既に6月15日に、インド赤十字社に酸素濃縮器15台を寄贈する形で救援を実現できたことは嬉しい限りである。残りの義援金をどのような形でどの機関に物資を提供するか、近日中にも決定する予定である。一部の義援金はクレジット決済のため、7月20日までには全ての義援金をインド側に拠出することになる。改めてこのプロジェクトについての報告の機会を得ることになるであろう。

１０.日本にはインドしかない！

以上長々と取り留めもなく綴ってきたが、コロナ禍のインドを1年以上に亘って実体験してきた、生々しい貴重な記録であると思っている。この稿には含めなかったが、オンラインによるインド人の結婚式や、お葬式などもコロナ禍の特徴的な事情として、当たり前の生活シーンになっていたことを付け加えておく必要

があると思う。

最後にまとめに代えて、私自身が改めて感じ入った日印関係と将来展望について触れておきたい。

現状はコロナ激禍で大変厳しい情勢にあるインドだが、今回の一連のコロナ対策を振り返ってみると、モディ首相のリーダーシップの下で、迅速な対策実行がなされ、首相自ら先頭に立ち、国民の協力を求めてきたことは高く評価されている。また、コロナ対策の個々の内容を見ても、非常に細かなSOP(標準作業手順)が打ち出されてきたことも注目に値する。但し、国民の多様性や地域特性などを勘案しなければならない点で、インド全土一律のルールを作ることの難しさや実行面での徹底には相当な苦心を強いられていることも理解できる。数回に亘るモディ首相自身による国民へのスピーチでは、インド北東部の民族衣装を身にまとったり、仏陀について言及するなど、多宗教国家を取り纏めるための工夫が見て取れた。

昨年9月末に第一波のピークを経て、今年の2月末ごろにはワクチン外交を推進していたモディ政権内に「コロナは終息か」との楽観的な見方が出たことで、国民の気の緩みと、モディ政権によるヒンドゥー教徒への配慮(前出のクンブ・メーラ)、選挙がらみの政治集会への参加などが、コロナ第二波による一層深刻な状況を招いた感が否めない。

総じてインドは日本とは対極にあるが、中期的視点に立つと2025年頃には世界一の人口大国となることが確実であり、若年層の人口では既に今日でも世界一になっていることを知る日本人は少ないのではないか。私は2030年を一つの区切りとして捉え、それまでに日印二国間の基盤となる人的交流を大きく発展させることが、将来の日本のために重要であるとの認識の下で、日々微力ながら活動している。人的交流の対象も今後は大学から高校へと、その重点をシフトさせようという段階である。今年度から一部の日印の私立高校間交流にも関与していく予定である。

私の持論のひとつは、「インドを知ることで世界を知ることができる」、「インドを制する者は世界を制する」というもので、インド人の生徒や学生と交流することで、日本の若者たちは大いなる刺激を受け、平和ボケと安住から目が覚め、その中から発奮する子供たちが必ず10人に一人は出てくることを私は経験上知っている。その交流の機会を増やすことで、この比率は少しずつ高まっていくはずだ。

更にその先の2050年を見据えると、今の中学生は2050年には40歳を超えているので、その頃の日本を支える中間管理層になっている。当ジェネレーションには、国際感覚と世界で通用する思考力、創造力、忍耐力、交渉力そして何よりもヒューマニティに富んだ人格を備えて欲しい、と心から願っている。これらのスキルを身に着けるには、インドこそが最適な修道場となる

ことは間違いない。

インドの人口が世界一になったとき、世界中がインドに真剣に注目するターニングポイントを迎えることになるであろう。その時になって日印の関係を強固にしようとしても、日本が世界の中での競争優位に立っていなければ手遅れとなる。今の世界情勢を見ても、中国の世界覇権を目指す動きと、それに対抗しようとする米国、EUと英国の弱体化は今後更に顕著になっていくと見られる。既にQUAD(日米豪印の4ヶ国連携)が英国やフランス、ドイツなどを取り込むかの動きも見えてきた。そのような世界情勢の中で、インドが人口ボーナスを享受し、大国として確実に成長して来ることは必定である。2030年までにインドが日本の経済規模に追い付き、追い越す勢いを得たとき、かつての中国詣でのような波がインドに対して起きることであろう。その時に日印の架け橋となって活躍してくれる人材を、今から育てておく必要があると私は思う。

このような将来展望から、日本の教育界でも今後インドへの注目度は高まっていくことを期待している。日印両国の関係(歴史と文化的背景)は、他のどの国との関係よりも圧倒的にポジティブであり、かつ補完関係にあることを理解すれば、いかにインドとの関係の強化が、日本の将来にとって重要であるかは自明の理である。現状ではまだまだ両国間の相互理解のための努力と人的交流が足りないために、相互理解が進んでいないことを私は日々切実に感じている。この観点からも、中等・高等教育での日印の人的交流と連携を進める必要があると思う。ビジネスの世界では、日印は必ずしもWin-Winの関係には成り得ていないケースも多く、日本側には不満も多いようだが、それはまだ両国間の根本的な相互理解と信頼関係が確立されていないことの証である、と私は分析している。その点では、利害関係のない若者同士の交流を促進することにより、両国間の相互理解と信頼関係の蓄積が、容易にかつ短期間で実現し、将来の両国の相互発展に大きく寄与するであろうことを私は確信して止まない。そして、それらを実現することは決して難しくはない。何故なら、私自身が日々実践してきたことだからである。今回の緊急インド救援の「Sewa Project 日本からインドへCOVID-19救援ミッション」にしても、ボランティアを集めてくれたプロジェクトリーダーや、集まってくれたインドの若者達の、無私無欲の働きぶりには本当に頭が下がる。インドの友人こそが、困った時に頼れる存在であることを、信じて疑わないのは決して私一人であるはずがない。

やはり、「日本の将来はインドしかない!」のである。

2021年6月30日　プネにて

ロックダウンとコロナ禍の生活風景①

徒歩で行くショッピングゾーンでの
ソーシャル・ディスタンシング

ロックダウンとコロナ禍の生活風景②

マンションの出入り口
エレベーターホール
に設置された消毒液

（足で踏めば液体が
飛び出す仕組み）

ロックダウンとコロナ禍の生活風景③

Unlock下でのオート・リキシャは感染予防策
（除菌、マスク必須、出迎え、キャッシュレス）

ロックダウンとコロナ禍の生活風景④

Taxiも運転席と乗客の間の感染予防
運転手も感染予防が必要

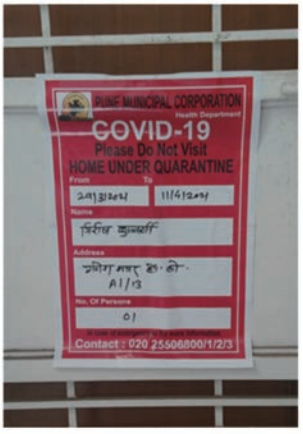
ロックダウンとコロナ禍の生活風景⑤

コロナ禍の結婚式
三密を避けてオンライン結婚式

ロックダウンとコロナ禍の生活風景⑥

1月26日のインド共和国記念日のパレード
観客席はソーシャル・ディスタンスを徹底していた
騎手もマスク着用

（インドのカラーフェスティバル HOLI、写真は昨年のもの）



（自主隔離中の住宅のドアに貼紙）

なぜインドなのか？(まとめ)

① 数年以内に世界一の人口を擁する成長市場
　優秀なインド人材が日本を救うICT、介護ほか
② 日印は過去から同盟関係にあった
　インドは親日国、昔はインパール作戦、今QUAD
③ 仏教の下で崇拝されたヒンドゥー教の神々
　弁財天、吉祥天、帝釈天、歓喜天聖天ほか
④ 一見真逆に見えるが 補完し合える友人
　ハードに強い日本、ソフトに強いインド
⑤ ビジネスはタフだが、友人関係が優先

学生間交流で両国の信頼関係の基盤を構築できる

コロナ禍で登壇したWebinar等

(2020年4月から2021年6月30日まで)

延べ75 回

①インドの大学関連 (24回)
- 新入生対象のInduction講演 (5回)
- 産学Conference (IITA/MITWPU/Flame他) (7回)
- 特別単独講演など (12回)

②ビジネス関連 (24回)
- 日印投資促進、日本的経営関連 (12回)
- インドのビジネスサークル/企業内研修 (12回)

③文化交流関連 (16回)
- 日本語教育/人材開発関連 (16回)

④日本との交流 (11回)
- プライベートグループ(関西日印協会N会他) (6回)
- 日本の大学・高校(公立小松大関西大/横浜国大) (4回)
- 日本の大学生対象「Onlineインド研修」 (1回)

India records 50% fall in daily Covid cases in just three weeks from peak

Slower Decline In Deaths, Down 18%

Amit.Bhattacharya
@timesgroup.com

The meteoric rise of Covid-19 cases during the second wave that overwhelmed the health infrastructure in the country is now being matched by an equally steep decline in infections. In three weeks, the seven-day average of daily cases has fallen to half the number recorded at the peak of infection on May 8.

The average fell below 2 lakh on Saturday to 1,95,183, almost exactly 50% of the peak of 3,91,263, as per TOI's Covid database. The 50% reduction in average daily cases in the second wave has come in half the time as compared with the first wave of the pandemic in the country.

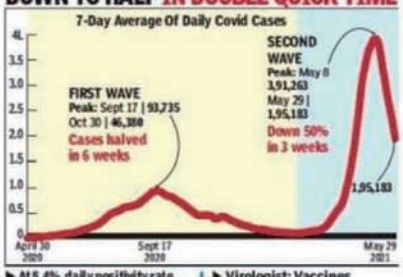
The daily death toll though hasn't followed the same steep downward slope. The seven-day average of daily fatalities has fallen by around 18% from the peak, not counting the over 5,000 deaths from earlier months added to Maharashtra's tally during this period.

▶ At 8.4%, daily positivity rate dips to under 10% for 5th day, P 11

▶ Virologist: Vaccines effective for a year, P 11

▶ Below 2L for 3rd day, P 11

DOWN TO HALF IN DOUBLE QUICK TIME



Maha crosses 25k deaths in May alone, Pune tops

Bhavika Jain & Malathy Iyer

Mumbai: With the addition of 832 deaths on Saturday, Maharashtra's toll for May crossed the 25,000 mark, which is higher than the toll of most states for the entire pandemic. The state reported 443 deaths on Saturday and added 389 "old" deaths, taking its cumulative toll to 94,030.

A closer look at district-wise data shows that in some districts such as Beed, Gadchiroli and Chandrapur, more deaths occurred in May than in the previous 13 months of the pandemic. The tribal-dominated Gadchiroli district, for instance, reported 191 deaths till April 30 and added 225 deaths

Maharashtra's May toll is higher than the cumulative fatalities recorded in some nations/states

Belgium	24,910
Delhi	24,073
Tamil Nadu	22,775
Pakistan	20,680
Philippines	20,566

Surprisingly it is Pune and not Mumbai that leads the death charts in May. Data shows although cities such as Pune and Mumbai added the highest deaths in absolute numbers, the growth rate was slower than the smaller districts

▶Lower than 1st wave, P 2

(プネ市が最悪の感染状況にあることを報道する新聞記事)

(国際ヨガデーのイベントに出演)

(日本の桜とそっくりのインドの春の風物詩ピンクトランペット)

(緊急インド救援ミッション「世話プロジェクト」のポスター)

日本における英連邦進駐軍 インド部隊の素描：1945 － 1947 年

Sketch of Hindustani Troops, BCOF in Japan:1945-1947

会社員
奥埜 梨恵

2020 年 6 月時点で、西日本に在留するインド人は約 6,000 人。だが、75 年前は、その 2 倍、約 1 万人以上のインド人が中国・四国地方に駐在していたことをご存じだろうか。

第二次世界大戦で日本が敗れ、アメリカ軍（以下、米軍）のマッカーサーが連合国軍最高司令官として日本を訪れている。他方、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、インド部隊から構成されるイギリス連邦進駐軍（以下、英連邦軍。British Commonwealth Occupation Force の名称は 1945 年 12 月に決定）も 1946 年 5 月には日本に着任し、同年 12 月 31 日時点の兵力は 37,021 名。その内訳は、イギリス人 9,806 名（内、イギリス経費を受給するインド人編成部隊 2,533 名）、インド人 10,853 名、オーストラリア人 11,918 名、ニュージーランド人 4,444 名。つまり、全体の約 4 割をインド人が占めていた。本稿では、日本にいたインド部隊の様子や、彼らが利用した休暇施設等を紹介する。

1．インド部隊についての先行研究

英連邦軍のインド部隊については、千田武志氏の『英連邦軍の日本進駐と展開』でも触れられており、同様に、島根県や鳥取県、広島県、岡山県の郷土史でも取り上げられている。しかし、インド部隊をメインとした調査は少ない。他方、インドでは近代日印関係史研究者の T. R. サリーン氏が India and Allied Occupation of Japan 1945-1952 で、彼らの活動や各国の動きについてまとめている。

インド部隊についての調査が難しい要因は 3 つあると考える。ひとつは、インド部隊自体が分散していたため、全体像を掴むことは困難であること。もうひとつは、インド部隊といえども英連邦を構成するひとつにすぎず、彼らの活動を「インド」部隊の成果として重要視されなかったこと。最後に、インドの歴史においても、彼らの存在は多く触れられていないことである。

2．使用する主な史料

一次資料である英連邦軍の広報紙 BCON: Official All-services Newspaper for the British Commonwealth Occupation Forces in Japan（以下、BCON）と、Official History of the Indian Armed Forces in the Second World War 1939-45 などの一次資料を優先している。枚数の都合上、引用箇所の記載が困難であるため、参考文献をご覧頂きたい。

▲日本の英連邦軍進駐エリアの地図（BCON、1946 年 12 月 20 日付）

3．英連邦軍インド部隊の概略

英連邦軍の日本進駐準備は、日本の敗戦直後から進められていた。1945 年 8 月末には、インド軍総司令部にて日本占領を目的とした英印師団の編成が提示されている。英連邦軍は、一箇イギリス歩兵旅団、一箇インド歩兵旅団と師団分遣隊からなる英印合同の一箇師団、いわゆる BRINDIV（BRINJAP とも呼ばれる）を組織した。このインド歩兵旅団が、第 268 インド歩兵旅団であり、第 1 パンジャーブ連隊第 5 大隊（ビルマ戦線で活躍）、マラーター軽歩兵隊第 1 大隊（イタリア戦線に参加）、第 5 ロイヤル・グルカ・ライフル隊第 2 大隊（ビルマ戦線に参加）によって編成された。さらに、第 7 インド軽機甲中隊、第 30 イギリス野戦砲中隊、第 16 インド野戦砲中隊や工兵隊も参加している。

この英印師団司令部の人員は、9 月 10 日にデリーへ集結、インドのナーシク近郊のキャンプへ移った。インド人で唯一師団の指揮権を与えられていた K. S. ティマイヤ代将の下、英印師団に属する兵士たちも、1945 年 7 月の半ばから、このキャンプへ集結し、日本上陸に備え訓練を重ねていた。1946 年 2 月 16 日に先発隊 17 名が空路でインドを出発。続いて、基地部隊 1,600 名が 2 月 8 日、主力部隊が 3 月 17 日と、4 月 29 日の 2 回に分かれて英連邦輸送船でムンバイから呉に向けて出港した。前者には第 5 イギリス歩兵旅団や司令部、部隊 6,761 名が輸送船デュネラ、オルドニャ、アランデル・キャッスルにそれぞれ乗船し、後者は第 267 インド歩兵旅団本隊と部

隊 112 名が輸送船ラジュラ、オルドニャに乗船した。その後も部隊の入れ替えは続いている（BCON、1946 年 9 月 3 日付）。

主力部隊が 3 月に出港する際、ムンバイ港に停泊する輸送船デュネラの甲板でオール・インディア・ラジオ局が特別番組を収録し、カメロン軍楽隊とクマオン軍楽隊の演奏が花を添えた。出港前夜のティーパーティーでは、30 名の報道関係者らが招かれ、英連邦諸国の威厳と名声を日本人に広めるという彼らの責務を報道した。しかしながら、日本で活躍する彼らのもとにインドから報道関係者らが訪問することはなく、彼らの活動は独立運動の陰に隠れてしまった。

英印師団司令部が 4 月 5 日に呉に到着。最後に出港した第 267 インド歩兵旅団の到着を待たずして、彼らの進駐先が岡山、鳥取、四国となることが日本でも報じられた。オーストラリアは広島を中心に据えたが、山口はニュージーランドに。島根、鳥取、四国の 3 県が英印師団へ割り当てられた。

オーストラリア兵と、ほぼ同数のインド兵が日本にいたにもかかわらず、連邦軍内のインド部隊の地位は高くはなかった。1946 年 12 月までに、司令部にいる 200 名以上の将校のうち、インド人将校はせいぜい 6 名程度であった。当時のインドが、あくまでもイギリスの被支配国インドにすぎなかったという事実が滲み出ている。事実、東京の皇居で、第 2・第 5 グルカ人小銃部隊らがイギリス士官に従うことを拒み「座り込み」を実行したこともあった。当時、白豪主義に傾倒するオーストラリア兵との折り合いは、さらに悪かった。L. C. ジェインによると、オーストラリア兵は日本人のみならずインド部隊も有色人種と差別的に捉え、まるで「もうひとつのアボリジニ」のように扱ったという。

インド部隊は、英連邦軍内では従順であること。他方、日本人の前では英連邦の代表として模範的な兵士であることを強いられたのではないだろうか。

4．日本におけるインド部隊の様子 岡山市の事例から

英印師団司令部が 4 月 5 日に呉に到着。最後に出港した第 267 インド歩兵旅団の到着を待たずして、彼らの進駐先が岡山、鳥取、四国になることが周知された（『合同新聞』1946 年 4 月 19 日付）。英連邦軍の中で、最初に広島を占領したのはオーストラリア軍だが、広島の施設はオーストラリア軍の要望にあわず、さらに山口、島根、鳥取、四国を占領する必要があると考えていた。結局、オーストラリア軍は広島を中心に据え、山口はニュージーランド軍に。残りの 3 県が英印師団へ割り当てられた。第 267 インド歩兵旅団本隊は、5 月 18 日に呉に到着すると、早々に島根県と鳥取県へと

移り、先に広島県呉市に駐留していた英印師団司令部などの中枢機関も岡山県に移った。

岡山市は 1945 年 10 月に、米軍約 5 万人の進駐を受け入れている。翌年 1946 年 6 月に、アメリカ第 8 軍第 10 軍団第 24 師団は岡山から福岡県小倉市へ移動し、米軍の軍政部・情報部・停車場司令部の特殊機関のみが岡山市に残った。代わって英連邦軍主力部隊が進駐して、岡山市内の施設に入り、倉敷市と玉野市に軽騎兵部隊が進駐した。当時の岡山の様子を、戦時の一県一紙体制下で、唯一県内発刊されていた合同新聞（現山陽新聞）が詳細に報じている。

英印師団が岡山市に進駐した後、軍当局が、市内の 46 本の街道名を替え、公会堂筋を「ボンベイ」、専売局から東山電車終点を「アラカン」、奉還町から後楽園線を「マウント・バッテン」と改称し、新しい標識を掲げた（『合同新聞』1946 年 10 月 30 日付）。

岡山市民と英印師団は、総じて友好的な雰囲気を維持していた。それは各代表者らが民主主義を重んじる社交的な人物であったことも一因である。岡山市長橋本富三郎は、社交的に進駐軍との交渉を進められる人物との期待を受けて、進駐軍受入れ直後の 1945 年 11 月 6 日に合同新聞社長から市長へ就任。2 代目岡山軍政部長のスプリンガー中佐は在任 1 年余りの間に、岡山県内を隅々まで巡察し、多くの人に接して、各方面に好印象を残した。また、1947 年 1 月 4 日に岡山にやってきたインド人の英連邦軍司令官シュリナゲシュ代将も「平民的で、好紳士」との評判が残っている。英印師団についての記事は下記の通りだ。

「デモクラシー援護と云ふ共通の尊い使命を帯びてユニオン・ジャックをなびかせ…彼等は血の滲む苦闘を続け今や輝かしき戦勝ののち宿望の目的地、日本に到着し、世界平和の援護者としての任務についている…この英印軍は日本における総司令部［ママ］を岡山市に置き岡山、島根、鳥取及び四国を管轄するが、部隊の全員は約 1 万 5 千名で大英帝国の凡ゆる地域、英本国、全印度及びネパールのグルカ独立王国より参加した兵員により或る者は正規の軍人であったが大部分は、農夫、書記、技術者、商人、芸術家など凡ゆる平和な職業に従事しており、且つ異なる宗教と言語を持つ人々であったのだ、…」（『合同新聞』1946 年 7 月 6 日付）

岡山の観兵式や東京の皇居正門前での行進、衛兵交代の儀礼など、常に報道の中心にいたのはグルカ隊とパンジャーブ隊である。彼らの特徴的な外観が、日本人の眼をひいた要因だろうが、もう一つ、両隊が東南アジアの戦地で日本軍と刀を交えたという歴史的接点もある。このと

き、ビルマ戦線で第 17 インド師団の指揮を執ったのが、英印師団司令官であるコーワン少将である。東南アジアでの対決で、日本は彼らに負けたのだという事実を繰り返すことで、彼らの有能さを説いている。

他方、マラーター隊は、両隊と比較すると後進的という評価はあるが、劣らず素晴らしい功績を残している。特筆すべきは、山陰地域で問題になっていた闇市の摘発、韓国からの不法入国者の摘発協力である。島根に進駐していた彼らは、週 2 回、巡視船ベテ・ノワールでの海上警備を実施し、大きな成果をあげた。

しかし、インド部隊を敵視する証言も残っている。シュリナゲシュ代将夫人は、「日本の男性たちから、インド人に対する沈黙の敵意がはっきり感じられ、距離をおいてよそよそしい振る舞いだった」と、回想している。また、岡山市中を歩く彼らを「いままでのアメリカ兵にくらべ、頭にターバンを巻いたインド兵や腰に蛮刀を吊った小男のグルカ兵が市中を闊歩し、日本はまさしく連合国に敗れたりとの感を強くしたのであった」と、表現し、なかには「黒ンボの幼稚」と、揶揄するものもあった。事実、英連邦軍の日本進駐には、米国のみならず英連邦諸国にも負けたのだと日本人に認識させる目的があり、このような敵意から逃れることはできなかっただろう。

英印師団はイベントを通して市民を招待し、災害救援、家事の消火活動、道路補修などの公共事業への取り組みを通して、支配者というよりは、共に困難に立ち向かい、再興を築く同胞のような存在であったように感じる。

8 年ぶりに再開された岡山競馬場の復興も英印師団の活動の一環であった。1946 年 8 月 10 日に岡山進駐英印師団の第 1 回競馬大会が挙行され、軍楽隊の演奏裡に将兵が華やかに競技を展開した。馬券も発売され、多くの入場者で盛況した。12 月には岡山県馬匹組合の主催で「岡山競馬」が始まり、「競馬場前」という新しい鉄道駅ができるほど人気があったという。岡山市民が進駐軍に敵意を抱きつつも、彼らの活動により娯楽を得られるようになったひとつの例だ。

特に、1946 年 11 月 16 日に岡山市後楽園芝生で開かれた英印師団軍楽隊の大演奏会は、彼らの活動の象徴となる。1946 年 5 月 19 日に、同じ後楽園で、米軍軍楽隊が岡山市民に別れの特別演奏会を開催し、2 万人の聴衆がつめかけた。米軍軍楽隊は、全員起立のうちにアメリカ国歌を演奏し、「若々しいアメリカデモクラシーの勝利を響かせ」て終幕したのに対し、英印師団軍楽隊は、当時流行っていたリンゴの唄の演奏で締めくくり、聴衆の大合唱と大喝采を誘ったという。このような日本人への姿勢の違いは、岡山市民に「米軍が官僚的なのに反して、とても英軍が民主的なのには驚い

た。」と、語らせている。

5．インド部隊がみたヒロシマと天災

インド部隊が特筆している日本での体験が、広島訪問と自然災害である。

英印師団のレジャーとして、原爆が投下された広島と呉海軍工廠の見学ツアーが開催された。広島の訪問では、原爆の破壊力もさることながら、被爆者の体験談を聞き、日本人の辛抱強さに感銘をうけている。壊滅的な惨状を前にしても、昼夜問わずに復興作業に精を出す日本人。この辛抱強さこそ再興の鍵となり、インドを偉大な国にするための良い手本になると感じたようだ。

1946 年 7 月初旬、インドから到着した第 653 インド機械装備中隊が早々に任務に就いたのが、6 月の集中豪雨で破壊された呉､広､江田島の道路工事であった。彼らはナーシクでの訓練で、日本には天災が多いことを学び、事実、彼らも度重なる天災を経験することとなる。1946 年 7 月 29 日､四国を襲った台風に、隊員は一睡もできず、翌年 9 月 17 日には、カスリーン台風来襲で洪水となった東海地方の救済に協力している。

1946 年 12 月 21 日早朝に発生した昭和南海地震は、中国・四国地方を管轄していた英連邦軍の活動に大きな影響を与えた。記事には、早朝 4 時 30 分頃、呉・広では、兵士がパジャマのまま、または大外套をはおって、揺れる家屋から気温零下の外へと駆け出し、2 分間程の揺れを感じたと記載されている（BCON、1946 年 12 月 23 日付）。四国の被災者のもとへ直ちに救助隊が派遣され、最も被害が甚大な高知県御免町周辺には医療チームが救助活動を行い、毛布や厚手の衣類が送られた。最終的に、高知県内の死者は 670 名となったが、地震発生後 3 日目で、高知県だけで死者は 647 名にのぼると報じられていることから、被災後の混乱下でも、情報把握は非常に正確で、迅速な対応がなされたことがうかがえる（BCON､1946 年 12 月 27 日付）。

6．英連邦軍広報紙から みえてくるインド部隊

今回、西日本に分散していたインド部隊を繋ぐツールとして、英連邦軍の広報紙 BCON を手掛かりに回顧する。BCON は、1946 年 4 月 9 日から 1950 年 4 月 6 日まで大阪から発行され、英連邦軍所属者は無料で購読できた。

当初は 2 ページであったが、発刊後 1 年を過ぎる頃には 8 ページに増え、その内容も一面、一般ニュース面、特集面、イギリス面、オーストラリア面、インド面、ニュージーランド面、スポーツ面と、多岐に富んでいる。国別の面は発刊時にはなかったが、1946 年 5 月 7 日から「Brevities From Home」欄や「BCOF

HOME NEWS SECTION」欄として、各国のニュースが報じられ、同年8月3日からは1面ずつ各国に割り当てられることが多くなり、定着化した。

なかでもインド面（Indian Section）は、英語とウルドゥー語の両方で記事が書かれているという特徴的をもつ。文体から察するに、インド面は複数名が交代で執筆していたように感じられる。このインド面は1946年8月3日から1947年10月10日までの約1年2ヶ月間設けられていた。つまり、この時期に多くのインド部隊が日本にいたということになる。同時に、この時期は英領インドが独立運動の佳境を迎える時期と重なっている。

・インド・パキスタン独立について

インド現地の状況は、ほぼ翌日から3日後にはBCONに記載されており、インドとイギリスとの独立に関する交渉については、何度もトップニュースとして取り上げられている。

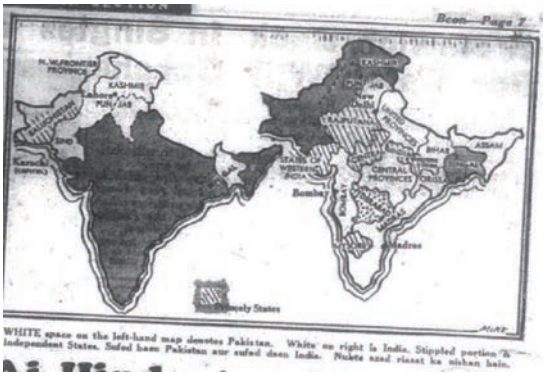
特筆すべきは、どの記事も第三者的視座で報じられている点である。私は当時のインド国内で発行されていた独立に関する新聞記事の比較研究をした経験から、紙面から何かしら独立への意見が現れるものだと認識している。その点、BCONの独立に関する英文記事をみると、政治家の名前は例外なく「Mr.」で言及され、指導者的存在であったガーンディーやジンナーが、マハートマ（偉大なる魂）やカーイデアーザム（偉大なる指導者）といった尊称で登場することはない。このことから、比較的中立を保った記事内容であったことがうかがえる。

インド部隊が日本に集結した1946年5月は、インドでイギリス閣僚使節団が「インド連邦案」を提示した時期であった。同年4月には、全インド・ムスリム連盟が、中央・州議会議員総会で、単一のムスリム独立国家パキスタンの樹立を目標とすることを決議しており、一旦は閣僚使節団案を受託したが、7月には撤回し、パキスタン分離独立実現のため、「パキスタンか、さもなくば死を」のスローガンのもと「直接行動」の日を計画していることが、8月14日付の記事で言及されている。その6日後には、この直接行動の呼びかけで引き起こされたコルカタの暴動についても報じられ、後日の記事では、コルカタ近郊のブルハンプールの村で起こった心胆寒からしめる襲撃事件を掲載している。この時、1枚の写真が添えられているが、それは1月に起こったムンバイ暴動の写真であった。このことから、現地写真の即時入手は困難であったことがわかる。

そして、インドが独立した1947年8月15日には、一面に「全BCOFがインドの素晴らしい日を祝福」という見出しが踊っている。インド統治は大英帝国か

らインドの人々の手にわたり、インドとパキスタンからなる新しい英連邦の誕生だと報じられ、ちょうど、対日勝戦記念日を８月 14 日 [ママ] に祝う代わりに、８月 15 日と重ねて祝日となっている。東京のインペリアル・プラザ（現皇居前広場）で、BCOF 各国はインドとパキスタンの英連邦への参加を歓迎し、パンジャーブ連隊とオーストラリア軍楽隊の演奏が予定されていた。岡山や呉、浜田、東京の各所インド部隊も祝賀会を催す旨、詳細が報じられている。東京のインペリアルホテル（現帝国ホテル）ではシュリナゲシュ代将は、インド特使シュリ・ラーマ・ラウと晩餐会。岡山では 1,500 名の孤児にお菓子が配られ、大きな花火が打ち上げられる予定。浜田では、マラーター部隊が花火を上げ、約 3,000 人の子供たちを招いて、マラカンブ、レスリング試合を披露。夕方、将校らは立食式晩餐会、男性用食堂では盛大な宴会を開催予定と、まさにお祭り騒ぎである。

同日のインド面は、３つの記事と写真の解説以外は全てウルドゥー語で綴られている。主な記事は「今日、インドは独立した！」の見出しで、一面ウルドゥー語表記となっており、「マハトマ・ガンディー、パンディット・ネルー、ミスター・ジンナー」の３名の写真や、インド・パキスタンの地図が掲載されている。注意深く地図をみてみると、カシミール全域がパキスタンとして描かれている。



翌日８月 16 日付の BCON では、インド面（INDIAN SECTION) ではなく、インド・パキスタン面（INDIA & PAKISTAN）と表現され、本土から離れた日本で独立を迎えたインド・パキスタン両国民への配慮が感じられる。この紙面では、ラホールはパキスタンに。コルカタはインドになることが伝えられ、同時に、コルカタで発生した暴動や、両国の軍再編成に関する記事など、分離独立が抱える諸問題も並んでいた。

・インド部隊の日本撤退

1947 年２月に、第５イギリス歩兵旅団が日本を離れ、続々とイギリス進駐軍が日本を去った。このことから、インド部隊内でも自らの日本撤退も遠くはないだろうという噂がたった。事実、1947 年２月 14 日に、インド軍事連絡部 (the Indian Liaison Mission) は、インド政府に対し、マッカーサーはインド政府の決定であればインド部隊の撤退に異議はないと語った、と電信している。

1947 年 3 月 22 日に英領インドは、オーストラリアに 1947 年末までのインド部隊の撤退を打診してる。このとき、オーストラリアはインド部隊撤退を強く引き留めている。オーストラリアのインド高等弁務官パラーンジパイー氏が、日本でのインド部隊の活動を継続するようインド国民会議派のネルーに要望をだしたほどだ。ネルーは、日本に進駐しているインド部隊の経費には、イギリス政府の経費ではなく、税金を充てると発言したとされ（BCON、1947 年 2 月 19 日付）、彼らの存在を認めている数少ない人物でもある。しかし、インド政府はこれに応じることはなかった。実際、インドが独立すると、インド初代首相となったネルーは、インド部隊が進駐軍の一翼を担うべきではないと、早々に引き揚げを決定した。

オーストラリアがインド部隊の撤退要請に動揺した理由として、ひとつはニュージーランドも撤退を検討しており、インド部隊撤退が引き金となり、大幅な人材不足に陥ると懸念されたこと。もうひとつは、多岐にわたるインド部隊の貢献が、英連邦軍の活動の根幹となっていたことにある。

インド部隊の撤退が見えてきた 1947 年 2 月 20 日。ちょうど BCON では「英印師団の物語（BRINDIV STORY）」という特集が組まれ、1946 年 6 月からの活動を振り返る写真や出来事が詳細に記されている。コーワン少将の功績からはじまり、部隊毎に日本での功績やイベントについて時系列で紹介し、大いに称賛している。

最終的に、インド部隊の撤退は承認され、5 月 30 日に英連邦軍総司令部がインド部隊撤退を 1947 年末までに完了するよう計画および準備するよう命じ、第 268 インド歩兵旅団が実行責任を担った。しかし、インド独立目前の 7 月 22 日になって、インド総司令部から「政治的事情により、インド部隊の日本撤退は 1947 年 9 月 15 日までに計画すること」、さらに「全部隊は遅くとも 1947 年 10 月 1 日までに撤退し、一切の護衛部隊を残さないように」と、伝達があったため、インド部隊は、十分な調整ができず、貴重な備品等を置き去りにせざるを得なかった。

インド部隊の引き上げは 3 回に分けて実施された。7 月 17 日早朝、第 5 ロイヤル・グルカ・ライフル隊第 2 大隊と後衛尖兵らは特別列車で福島から、シュリナゲシュ代将と第 4 ニュージーランド軍楽隊の待つ呉へ。13 時に輸送船デボンシャーに乗船開始。夕方には、呉のスポーツスタジアムで、グルカ・パイプ楽隊とクマオン楽隊が、これまでで最高の演奏を集まった多くの観客の前で披露した。

インドとパキスタンの独立は、彼らインド部隊の日本引き上げが本格的に始ま

ることを意味していた。インド独立前日の 1947 年 8 月 14 日付の BCON 一面では、すでに 7 月末に岡山から第 5 ロイヤル・グルカ・ライフル隊第 2 大隊が呉港から日本を去っているが、残りのインド部隊が 1947 年 9 月末までに完全撤退し、彼らが立ち去った後は、半数はオーストラリア部隊。残りをニュージーランドと大英帝国部隊の計 20,000 が名補完する見込みだと説明されている。

そして、インド独立からわずか 2 日後の 8 月 17 日には、シュリナゲシュ代将にオーストラリアのキャンベラで開催される日本平和会議にインド代表として出席し、インドへ帰国するよう命令が下ったため、翌日には大勢の岡山市民に見送られて、一部のパンジャーブ連隊とともに日本を後にした。

最後に、師団司令部と残りの第 1 パンジャーブ連隊第 5 大隊、全ての家族が輸送船タルマとディルワラに乗船し、補給品を積んだ 6 隻とともに 10 月 25 日に呉を出発し、シンガポールを経由してチェンナイへ向かった。この時の様子は、1947 年 10 月 27 日付の BCON の一面に掲載されている。1,348 人の全階級のインド部隊と、数名のイギリス将校、5 人の民間人が乗船。イギリス将校は、インドとパキスタンへの再編のためインドまで乗船し、その後、ほとんどがイギリスへ帰国予定とのことだった。この記事は、帰任する 2 名のインド兵のインタビューで締めくくられている。彼らはそれぞれ、インド軍とパキスタン軍に分かれて配属される予定であった。

パキスタン軍に所属予定のラーワルピンディーのガラハド・カーンは、18 カ月日本にて従事。「家をあけてから 3 年後、再びインドを訪れることができそうで嬉しい。しかし、同時に日本を立ち去ることを残念に思う。我々はここで最高の条件で滞在し、全員がとても満足していた」。

他方、カトゥ・ヴェンカテーシュは 4 カ月の日本滞在を終え、インド軍に戻る予定。「私は政府の命令にしたがうのみだが、日本はとても好きだし、もっと長く滞在したかった」

ガラハド・カーンのコメントは、当時の彼らの境遇を良く表している。故郷がパキスタンとなり、事実上、パキスタン軍に属する予定だが、彼の脳裏には、まだ英領インドであった頃のラーワルピンディーの姿のままであることが想像できる。日本進駐中に、彼らの故郷は動かずして状況は大きく変わり、帰国後の彼らの配属にも影を落とした。

・ウルドゥー語への愛着と誇り

BCON のインド面には、既述の通りウルドゥー語の記事も掲載されているが、全てアルファベット表記である。当時、大阪で印刷するにあたり、アラビア・ペ

ルシア文字を用いることが困難であったことは想像に難くないが、注目すべきは、アルファベット表記でも使用言語はウルドゥー語だと表している点である。誌面では「DES KI KHABREN, URDU MEN KHABREN（故国のニュース、ウルドゥー語でのニュース）」と明記されている。当然ながら、インド部隊は全員ムスリムではない。これらの特徴から、インド・パキスタン独立を目前とした時期でも、インド部隊内でウルドゥー語は「公務の言語」といった側面を維持していたことが感じられる。

また、英連邦軍はラジオ放送施設を有しており、インドの言語による番組もあった。1947 年 3 月 15 日付で掲載されている週末の番組をみてみよう。呉局、山口局にならんで、岡山局で BBRINDIV 向けの番組があり、「BT（ブリティッシュ）・プログラム」にならんで、「ヒンドゥスターニー・プログラム」と紹介されている。番組名をみると、ウルドゥー語が多用されているが、日曜日には 15 分ずつパンジャービー語、マラーティー語、タミル語の番組もある。

番組内容は、映画の歌謡曲や音楽、手紙や投稿の紹介、オール・インディア・ラジオ提供の本国のニュース、そして、病院にいる患者からの投稿番組があったようだ。この病院とは、おそらく呉にあった第 92 インド総合病院であろう。この病院は、7 つの英連邦軍の医療施設のうち最大数の病床を誇っていた。

このインド総合病院でもウルドゥー語に関する記事が掲載されている。見出し「心の声（Dilki Awaz）」で、第 92 インド総合病院のスタッフによるウルドゥー語演劇が成功裏に閉幕と報じられている（BCON、1947 年 5 月 17 日付）。このことからも病院内は相当数のインド人のスタッフや患者がおり、院内の数少ないレクレーションとして、スタッフ自ら企画していたことは興味深く、教養の高さを表す例であろう。

ウルドゥー語への関心の高さは、とりあげたインド国内の報道内容からも感じ取れる。1947 年 3 月 7 日付で、「中央議会でウルドゥー語の使用を認可」の見出しで、G. V. マヴァランカル議長が、議員は英語を知っていても、国家の言語 (national language) であるウルドゥー語を使用することができると発言したことや、ハイデラバード首相 M. イスマーイールのウルドゥー語がインド国家の言語になるべきだという発言を取り上げている。いち早く「インド部隊の共通言語」としてウルドゥー語記事を掲載している BCON が、この記事を介して、インド独立後の言語編成を暗に提唱していたのかもしれない。

・宗教儀式の実施

祖国から遠く離れた日本でも、彼らは

宗教的儀式を行っていた。

1946 年 8 月 30 日付 BCON では、英印師団司令部やインド部隊のムスリム数百名が岡山飛行場に集まり、イードの礼拝をした事が報じられている。コーワン少将が来賓となり、全てのムスリム兵に祝辞を述べ、ムスリムでないインド人や米軍将校が訪れ、日本人も、インド部隊が日本の地でイードを祝う姿を初めて見るために出席した。この日は映画が上映され、英印師団の福祉部が特別コンサートを催している。

英印師団のヒンドゥーも独自の宗教儀式を行っている。既述の BCON 特集記事「英印師団の物語」では、マラーター隊がガネーシュ・チャトゥリティとダシャラーを祝ったことが掲載されている。ガネーシュ・チャウリティ当日の朝、寺院でバジャンを歌い、15 時にはガネーシュ像を先頭に行進し、海へ流している。また、10 月にはダシャラーを「正式な」マラーター式に祝い、ダヒーハンディ（人がピラミッド状に組み合い、1 人がそれをよじ登って約 5 メートルの高さに下がるヨーグルト入りの壺を割るというゲーム）まで行ったという。日本人の出席については言及されていないが、儀式を行う彼らの姿を地元の日本人も好奇の目で見ていただろう。

▲岡山飛行場での礼拝（BCON、1946 年 9 月 2 日付）

・女性の活躍

英印師団関連の記事では、女性の活躍も報じられている。

英印師団の福祉事業を支えていたのは応急看護隊、英連邦女性補助部隊、英国女性奉仕部隊、インド女性奉仕部隊の女性たちである。彼女たちは、主に食堂などの施設運営補助や、娯楽サービスの運営を担っており、なくてはならない存在であった。しかし、応急看護隊が日本から引き上げると、慢性的な人材不足に陥り、インド女性奉仕部隊 6 名では不十分だと、総司令部がインドにメンバーを追加派遣するよう強く要請したが、補充はなかった。既述「英印師団の物語」でも、彼女たちの重要性は写真付きで紹介されている。英印師団キリスト教青年会（Young Men's Christian Association、以下、YMCA) のスタッフであるマートル・ゴードンは、サリーを着用していることがわかる。

当時、呉にあるキリスト教女子青年会(Young Women's Christian Association、以下、YWCA) 福祉サービスのトップは、ニュージーランド人女性ミュリエル・ムーディーが務めていた。彼女が、日本にいる英連邦軍の女性のためのクラブやホステルの建設を指揮し、英印師団に給仕している 6 名の女性らにも、岡山の YMCA 福祉サービス局より新しいホステルを提供させた。

このような異国における福祉サポート運用も、当時のインドにとって重要な経験であった。英印師団が日本に到着してすぐ、インド・ビルマ・セイロン YMCA 事務総長に選ばれた初のインド人女性ソーサ・マシューも英印師団を激励し、インド兵に対し、英印師団に所属している機会を最大限に活用し、全てを学ぶよう告げている（BCON、1946 年 8 月 29 日付)。

女性の活躍は、YMCA や YWCA の関係者だけでない。インド部隊の家族も、市井の日本人やインド部隊以外の英連邦軍との交流を重ねていた。いち早く「英連邦軍の家族」として日本を訪れたインド人妻子は、彼女らが自覚している以上に、周囲に大きな影響を与えただろう。

1946 年 5 月 30 日、英連邦軍総司令官は、オーストラリア統合参謀本部に対して、英連邦軍将兵の家族の日本入国を許可するよう要請し、1946 年 7 月 20 日、オーストラリア統合参謀本部が許可した。それにともない、日本式家屋の修理とヨーロッパスタイルの新築住宅の建設が開始された。1946 年 12 月にインドを発ったインド部隊家族は、1947 年 1 月 10 日に日本に到着し、江田島、広、岡山の改築された日本式家屋に入居した。彼らが、英連邦軍のなかで最初に日本へ到着した家族となった理由は、当時のインド本国の情勢が不安定であったことと、改修された日本式家屋をあてがわれ、受け入れ準備が早く整ったためであった。結局、1946 年 12 月から 1947 年 5 月までに、96 家族がインドから日本に移り住んだ。

シュリナゲシュ代将夫人ラージクマリも子供らを連れて、岡山市内の丘の上にある改築された日本式家屋に移り住んだ。彼女も、司令官夫人として軍のイベントに参加し、インター・フォーメーション・トーナメントの決勝戦で、英印師団

Aチームを破った美保ホッケーチームのキャプテンとの握手に応じる写真が掲載されている(BCON、1947年5月6日付)。

これら福祉面の充実やインド人家族の呼び寄せが、インド部隊と日本人女性との接触を減らすことに成功したという見解がある。しかし、私は、彼らの文化には、女性とは軽々しく親交を持つべきではないという意識が根強く、かつ、日本人に模範を示すという責務に徹した結果だと考えている。そもそも英連邦軍は、日本人女性との交際禁止策をとっていた。

こんな事例がある。インド人医師が、頻繁に日本人女性を病院に招き入れるオーストラリア人の患者らを咎め、翌日から日本人女性の入場を拒否したところ、オーストラリア部隊が病院を襲撃、死者を出す事件に至った。この事例からも、オーストラリア部隊とインド部隊では、日本人女性との付き合い方が異なっていたことがうかがえる。事実、交際禁止策を採りながらも、オーストラリア兵との日本人「戦争花嫁」は数百名に及び、他方、インド兵と日本人女性の結婚の要請は、わずか2件であった。

インド兵と日本人女性間の事件は皆無ではなかったものの、他国部隊と比べて格段に少なかった。

7．日本に残る思い出の場所

任期中、インド部隊はインドへの一時帰国は許されなかったものの、1年間で8日間の休暇、後に8日間休暇を年2回取得することができた。この休暇を利用して、米軍が使用していた休暇センターや、新たにインド部隊が建設した詫間湾休暇宿泊所等に滞在し、リフレッシュしていたようである。皇居警護の任務などで東京へ遠征した部隊は、休暇を取って恵比寿休暇センターに滞在し、日光や鎌倉へ観光に出掛けていた。

数多くある休暇センターのうち、滋賀の国華荘、京都の菊屋萬碧楼は、インド部隊御用達の宿である。

当時、滋賀や京都は進駐軍に人気の観光スポットであった。保津川遊船は進駐軍に最も人気のあったアクティビティで、保津峡観光株式会社は、進駐軍観光輸送料を安く設定しているため、赤字経営に陥っていると、値上げを要請している。同様に、京福電鉄桟山ケーブル線も赤字経営に陥っており、乗車料徴収の要

望をだしている。その原因は、多くの進駐軍が観光目的で乗車しているにもかかわらず、交通手段として料金を支払わずに利用しているためであった。京都駅は陸軍管轄の輸送量が増えたことで大混雑し、公務で訪れる進駐軍の旅行調整を、京都事務局交通班の確認をもって、京都駅長が行うほど混雑していた。

・国華荘

滋賀の石山、瀬田川西岸にあった由緒ある旅館柳屋は、1945 年 9 月 21 日から英連邦軍の休暇センターとして使用されていたが、1946 年 10 月 21 日に火災で焼失してしまい、琵琶湖西岸の雄琴温泉街にあった国華荘が、休暇センターとして大きな役目を担うこととなった。

国華荘が接収されたのは 1946 年 7 月 18 日から 1948 年 7 月 7 日の約 2 年間。多額の予算を投じ、純日本温泉旅館は一級の洋式の施設を備える宿泊所へと改装された。

FEATURE SECTION

Bcon—Page 5

Kokkasa Inn Becomes "A Little India"

Kokkasa Inn, on the shores of picturesque Lake Biwa, near Kyoto, has become a "Little India."

Each week 40 men selected from Indian units of BCOF spend there a holiday in surroundings as attractive as any in Japan. Kokkasa has been given over exclusively to Indian personnel.

Kokkasa Inn was formerly a popular resort with Japanese visitors to Lake Biwa. It is situated on rising ground overlooking the lake, and terraced fields climb behind it to the pinecled mountains.

When Kokkasa Inn was first taken over as a BCOF holiday hotel it was renovated and Europeanised. Each bedroom has its own wireless set and

The men who stay at Kokkasa are conducted on sightseeing tours to Kyoto, 15 miles away, and to other points of interest, including the American hydroponics farm, where

1947 年 3 月 5 日付 BCON で、「国華荘が『リトル・インディア』に」の見出しで、インド部隊へ国華荘の施設やレジャー、食事、周辺観光について詳細に詳細されている。記事によると、インド部隊から毎週 40 名ずつ選出され、国華荘で休暇を楽しむ運用となっていた。最大の特徴は、カレー、チャパティ、プラオなどのインド料理が毎日振舞われていたことである。その他、京都観光やアメリカ運営の水耕栽培農場見学のツアーや、登山、湖上ボート遊び、ビリヤード、卓球、テニス等を楽しむことができた。

現在も国華荘は「びわ湖花街道」として旅館営業を続けているが、2001 年に全館リニューアル工事が施され、当時の面影はない。そこで、滋賀県立公文書保管の資料を調べたところ、当時の滋賀県知事柴野和喜夫と国華荘支配人佐藤傳三郎との接収に関わる賃料契約から、工事図面、接収解除後の備品査定額まで、一次史料が保管されていた。

国華荘は、三階建て木造建築の一棟で、55 名が泊まれる畳敷き和室 32 室、和式物置 3 室、玉突 (ビリヤード) 室があった。しかし、和室で使用されていた畳は全て撤去され、リノリウム塗装がされた木製フローリングに改装された。同様に和式便所も全て洋式トイレに改修され、シャワーや、給水用タンクが設置された。新たに旗竿、医務室、理髪室、テニスコート、ボート用桟橋・収納庫、プール（貯水池を改造）、冷蔵室付きのバー（非常階段を改造）、アイロン室（燃料室を改造）、ビール収容箱、ネオンサイン

のついたアーチ、入口までの道路等が設置されている。すっかり改造された国華荘は、接収解除後、もはや純日本温泉旅館としての営業は困難になってしまった。

残念ながら、これら資料に目を通しても、「英豪軍」と記されているが、「英印軍、印度軍」の文言は一切ない。このように、インド部隊の活躍は英豪軍の名に隠されていることが、日本のみならず世界中でインド部隊の活躍が知られていない要因だと推察される。

・菊屋萬碧楼

一方、菊屋萬碧楼（以下、菊屋）は、宇治の重要文化的景観として選定され、現存している。現在は、老舗の茶店である中村藤吉が、平等院店として利用し、保存に尽力している。菊屋がインド部隊専用の休暇センターとなった時期は 1947 年 10 月 1 日から 16 日までで、その後、菊屋は日本政府に返却されている。つまり、インド部隊にとっても日本を離れる直前に美しい時間を過ごした場所が菊屋であり、菊屋も最後に見送った進駐軍がインド部隊だったということだ。

戦後すぐの 1945 年 9 月 25 日に、米軍を中心とする連合軍第 6 軍の宇治進駐が始まった。この第 6 軍は当初京都市に司令部を置いたため、京都市を中心に多くの建物が接収されたが、菊屋の接収については記録が残っていない。しかしながら、地元の方の証言から、菊屋も当初は米軍に接収され、英連邦軍へと引き継がれたようである。

宇治町観光課は、進駐軍をもてなすため、料理や料亭旅館の施設に関するガイドラインを早々に作成している。同時に、宇治警察署員も英会話の特別講習を受けている。宇治は、進駐軍と接することによる風紀の乱れよりも、経済的メリットと、インフラ整備を期待していたようだ。進駐軍は、宇治市大久保に拠点を置いたため、宇治市内を頻繁にまわっていたようだ。当時を知る中村藤吉の大女将が、米軍が店に立ち寄った時に呈茶をしたところ、御礼に肉を頂戴し、食料にも困らなかったことや、ジープに乗せてもらったことを話していたそうだ。このことから、進駐軍との関わりが、決してマイナスだけではなかったことがうかがえる。

実際に宇治へ足を運び、菊屋を保存・運営している中村藤吉平等院店を訪問した。菊屋はいわば「宇治の迎賓館」として歴史を刻んでおり、皇族の行幸でも利用され、1908 年の韓国皇太子李垠（イ・ウン）と初代韓国統監伊藤博文の歓迎も菊屋で執り行われた。他方、日清戦争時には出征軍人の歓迎会場にも利用されるなど、皇族にも庶民にも開かれた旅館であったようだ。

菊屋が進駐軍接収下にあった当時は、ダンスホール等があったが、現在は清風閣、丸窓亭、観爛亭だけが残っている。

中村藤吉の大女将によると、大広間か何かがダンスホールとなり、天井にシャンデリアがあったとのこと。現存する清風閣は、カフェとして利用されており、市内宇治川西岸の堤防上に建つ唯一の建物である。ここからは宇治川と大吉山が一望できる。1 階は 8 畳と 10 畳の各座席に 4 畳ずつの前室、2 階は 10 畳と 16 畳の広間となっており、清風閣だけでもかなりの人数が宿泊可能であったことがうかがえる。

今回は、中村慎吾氏に話をうかがうことができた。2001 年頃に菊屋の女将を訪ねた時は、すでに旅館業を廃業しており（昭和 40 年代までは旅館営業していた）、その後、2004 年に土地と建物を買収。2006 年に菊屋は中村藤吉平等院として開店した。耐震補強等の補修をする際、建築上必要な場所に柱がない等、増築を重ねていたことが判明したそうだ。また、現在、テイクアウト兼売店として利用している場所は、不自然に地面が隆起している。史料には給水用タンク位置との記載があるが、一方で、星条旗の掲揚台であったと伝え聞いているとのこと。先の菊屋の女将の証言といい、このような伝承は非常に重要である。店内はカフェにリノベーションされているが、床の間や階段の手摺などは当時のままである。手摺や引き戸飾りには細かな菊の文様が彫刻されており、上品で趣があった。観爛亭は清風閣よりもさらに宇治川に近く、一段下がった場所で、宇治川に張り出すように設置されていた洋室だった。

インド部隊が菊屋を利用した期間が短かく、滞在者も 71 名だけであったためか、現地でも彼らに関する情報は得られなかった。その中で、当時、彼らが見たものや景色を今に伝えてくれる菊屋の存在は非常に貴重である。

・神戸モスク

最後に、現在も多くの人々に慕われている神戸モスクとインド部隊が関わる印象的な BCON の記事を 2 つ紹介したい。

ひとつは、神戸モスクでの初めての結婚式が、英印師団のインド人ムスリムの結婚式であったとの報道がある。1946 年 9 月 9 日付「神戸ムスリム･モスクで、英印師団将校が応急看護隊とともに色鮮やかな結婚式を祝福」の見出しで、英印師団の広報カメラマンであるサイード・ヤーワル・アッバースと、英印師団司令部に従事する応急看護隊のメンバーであるヴェラ・マリアン・ケイティーとの結婚を報じている。結婚式は、軍事婚姻法に則って岡山にあるウェイヴェル・クラブで行われ、再度、神戸モスクにてトルコ人イマーム立会のもと、イスラーム式で結婚式が挙行された。これが神戸モスクでの初めての結婚式となり、地元に住む様々なコミュニティーのインド人やト

ルコ人ムスリムも参加している。国境も人種も宗教をも越えての祝福があふれる舞台が、戦後間もない神戸モスクであったことに驚く。

もうひとつは、神戸モスク修繕の寄付を呼び掛けている記事がある。空襲で傷ついた神戸モスクを修繕するために、6名からなる委員会が計 70 万円の寄付を募っている。ムスリムのみならず、ヒンドゥーもクリスチャンも惜しみなく寄付に応じている。注目すべきは、この内容が英文とウルドゥー両方で報じられているものの、ウルドゥー記事にだけ下記の文言が付け加えられているという点だ。

「このままインド部隊がインドに戻ると、日本に状態の良くないモスクだけを残していくことになる。それよりも、モスクとともに全てのインド人、民族が一緒になって、団結したという素晴らしい模範としてあり続けるように」（BCON、1947 年 5 月 22 日付）

ecide To Fund Opened To Repair Mosque

Osaka. — Indian troops in BCOF have been asked to contribute to a repair fund for the Kobe Mosque, which was damaged during the war.

A committee of six officers has been formed to raise the 700,000 yen, which, it is estimated will be the cost of repair works.

Muslims, Hindus, Sikhs and Christians have generously answered the appeal.

Kobe Masjid, Fauji Ittifaq Ki Misal

Osaka.—Larai ke dauran Kobe Masjid ko kuchh nuqsan ho gaya tha. Uski marammat kelie chande ki appeal karne par BCOF ke faujion ne hark farakh dili ka sabut dia hai.

Masjid ki marammat men qariban 700,000 yen kharch honge. Yih zaruri raqm jama

このメッセージに、宗教の垣根を越え、「インド人として」日本に彼らの団結を示すものを残したいという想いに、英連邦諸国のインドではなく、一国インドとしての自我の芽生えを感じられる。

8．おわりに

限られた人数で、戦地の苦難を乗り越えてきたインド部隊だからこそ、団結の重要性と個々のアイデンティを尊重・維持する重要性を深く理解していたに違いない。日本進駐時も、インド部隊は飛び地で任務にあたっていながら、素晴らしい連携を見せていたように感じられる。そんな彼らの日本進駐活動の完遂と、母国で繰り返されるコミュナル暴動とインド・パキスタンの分離独立は、インドの多様性の陰と陽を一層浮かび上がらせている。

母国から離れてインド独立を迎えたインド部隊の様子は、どこか第三者的にも感じられる。約 100 年間のイギリス支配から立ち上がるインドの様子を、敗戦から立ち上がる日本で眺める彼らの視座は、むしろ、我われ日本人に近かったのかもしれない。

別添資料

英印師団 インド部隊駐屯地（1946年6月）

県名	市町村	部隊名
広島県	旧呉市内	第92ｲﾝﾄﾞ総合病院中隊
	旧呉市内	第363ｲﾝﾄﾞ野戦中隊
島根県	松江市	第268ｲﾝﾄﾞ歩兵旅団 司令部
	松江市	第152ｲﾝﾄﾞ自動車修理工作中隊 独立班
	出雲市今市	第9ｲﾝﾄﾞ野戦衛生隊（除分遣隊）
	浜田市	ｲﾝﾄﾞ・ﾏﾗｰﾀｰ軽歩兵連隊 第1大隊
	浜田市	第9ｲﾝﾄﾞ野戦衛生隊（分遣隊）
鳥取県	西伯群大篠津村	ｲﾝﾄﾞ空軍 第4飛行中隊
	米子市	第56ｲﾝﾄﾞ混成燃料隊
	鳥取市	ｲﾝﾄﾞ第1ﾊﾟﾝｼﾞｬｰﾌﾞ連隊 第5大隊
	鳥取市	第9ｲﾝﾄﾞ野戦救急部隊 分遣隊
岡山県	岡山市	英印師団 司令部
	岡山市	第429ｲﾝﾄﾞ野戦中隊
	岡山市	英印師団直轄部隊（除分遣隊）
	岡山市	ｲﾝﾄﾞ第50ｲﾔﾙ・ｸﾞﾙｶ・ﾗｲﾌﾙ隊 第2大隊
	岡山市	第38ｲﾝﾄﾞ後方支援補給所
	玉野市宇野	第7ｲﾝﾄﾞ機甲中隊 1個小隊
	倉敷市	第7ｲﾝﾄﾞ機甲中隊（除1個小隊）
香川県	高松市	第758ｲﾝﾄﾞ補給小隊
徳島県	小松島市和田島	第16ｲﾝﾄﾞ野戦砲中隊

参考文献

●書籍・マイクロフィルム

・BCON: Official All-services Newspaper for the British Commonwealth Occupation Forces in Japan, R.1-8, 国立国会図書館蔵

・Prasad, Bisheshwar, ed., Official History of the Indian Armed Forces in the Second World War 1939-45: Post-War Occupation Forces: Japan and South-East Asia, The Naval & Military Press Ltd. UK. 2015.

・岡山県史編纂委員会編、『岡山県史 第 13 巻　現代 1』、昭和 59 年

・岡山県郷土部隊史刊行会編、『岡山県郷土部隊史』、昭和 41 年

・岡山県警察史編さん委員会編　『岡山県警察史　下巻』、昭和 51 年

・岡山市史編集委員会編、『岡山市史 戦災復興編』、昭和 35 年

・岡山市百年史編さん委員会編、『岡山市百年史　資料編Ⅱ』、平成 9 年

・岡長平、『続・ぼっこう横町　岡山のいちばん長い日　岡山戦後史』、岡山日日新聞社、1972 年

・株式会社クラレ、『創新：クラレ 80 年の軌跡 1926-2006』、2006 年

・荒敬編、『日本占領・外交関係資料集　第 2 期 第 8 巻　大阪・近畿』、柏書房、1994 年

・宇治市教育委員会編、『宇治市文化財総合把握調査報告書 I』、平成 23 年

・林屋辰三、, 藤岡謙二郎編、『宇治市史 4　近代の歴史と景観』、1978 年

・宇治市教育委員会編、『宇治市文化財総合把握調査報告書 I』、平成 23 年

・『接収物件調書　JPNR42 滋賀郡雄琴村雄琴〈個人〉所有国華荘ホテル)』、昭 6-5-57

・『国華荘ホテル各所修理 (本館壁・ピンポン室・理髪室・料理場・浴室・非常階段・表門塗替) について請負契約締結の伺』、昭 6-10-14

・『国華荘ホテルネオンアーチ・医務室新設並に室内各所修理追加工事其の他について請負契約の伺』、昭 6-10-11

・『連合国軍 (元英豪軍) 休養ホテル国華荘二係ル解除物件管理ニツイテ (通知) 』、昭 6-11-30

・『英軍休養宿舎国華荘テニスコート新設工事及び国華荘専用道路設営工事の件』、昭 6-29-11
・『英連邦国華荘ホテル使用のボートハウス新設に関する件』、昭 6-39-5
・『 (英連邦軍) 雄琴修練道場接収に関する件』、昭 6-39-7
・『国華荘ホテル接収解除書送付について』、昭 6-45-22
・Issar, Brigadier Satish K., General S. M. Shrinagesh, Vision Books, Delhi, 2009.
・Sareen, Tilak Raj, India and Allied Occupation of Japan 1945-1952, Life Span Publishers & Distributors, Delhi, 2013.
・千田 武志、『英連邦軍の日本進駐と展開』 御茶の水書房　1997 年

●ウェブサイト（最閲覧日 2021 年 3 月 1 日）
・「鳥取の文化交流史①」、『2017 年度地域文化調査報告書』、鳥取大学、2017 年
-http://www.rs.tottori-u.ac.jp/bunka/student/report/2017/pdf/4_culture-2017.PDF)
・西村芳将、「進駐軍は鳥取でなにをしていたか」、鳥取県立公文書館県史編さん 室、2019 年 -https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1171906/tottoridenanio.pdf
・ssMaritime.com
- http://ssmaritime.com/indx2.htm
・Australian War Memorial
-https://www.awm.gov.au/collection/

●インタビュー・メール回答
・中村藤吉：中村慎吾氏、2021 年 3 月 6 日
・宇治市歴史資料館：坂本氏、2020 年 9 月 15 日
・岡山県立図書館郷土資料班：隈元氏、2021 年 2 月 5 日
・京都資料総合閲覧室歴彩館資料課：公文書担当者、2020 年 12 月 14 日

BCON 掲載の写真・イラスト

▲1947年8月15日午後に東京の皇居前広場で開催されたインド・パキスタン独立と両国の英連邦加入を祝う様子。ユニオンジャックの両脇に、インドとパキスタンの旗がたなびく（1947. 8. 19付）

▲岡山市内で消火活動に加勢するインド部隊（左）。この時は5軒が焼失した（1947. 5. 1付）

▲インドへの帰国にむけ、呉で船積みが進められる（1947. 9. 3付）

▲呉オフィサーズ・クラブで、インド・パキスタンの英連邦加入[ママ]を喜び合うハルキラト・シン中佐とS. G. ラジャギオパル少佐（1947. 8. 19付）

▲原爆投下後の広島で瓦礫を調査するインド部隊（1947. 2. 20付）

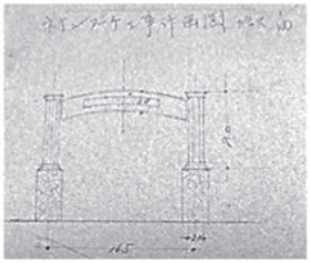
▲岡山のウェイヴェル・クラブで、サンダース中佐（右）が見守る中、ケーキ入刀をするアッパース（中央）とケイティー（左）（1946. 9. 12付）

▲中央にシュリナゲシュ代将夫人とその子供たち、右側にラジンダル・シン中佐夫人が宮島を訪れた様子（1947. 5. 1付）

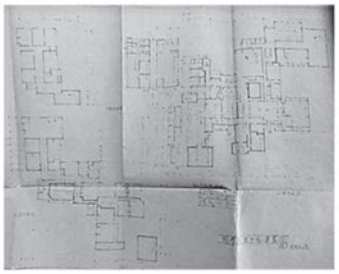
◂岡山コンサートパーティーの様子。出演者はインド部隊員で、左はエスラジを。右は寺院の踊りを披露している様子。芸能に造詣の深い者も多かった（1947. 2. 18付）

▸インド部隊員の似顔絵が描かれており、ユニフォームの特徴がよくわかる（1947. 8. 16付）

国華荘に関する資料



◂「ネオンアーチ工事計画図」どおりのゲートが設置された国華荘の入口。入口右側には「KOKKASO INN BCOF HOLIDAY CLUB」の看板が掲げられている。写真は1946年11月頃のもので、Australian War Memorial所蔵。図面は全て滋賀県立公文書館所蔵。



▸国華荘敷地の図面（右）。右側に琵琶湖の雄琴港と鉄道が南北に走っている。中央部が習練館。左上が国華荘本館。
国華荘本館の1〜3階の平面図（左）。入口すぐに英連邦軍の受付窓口、将校専用部屋などがあり、奥にビリヤード室や食堂がある。日本人用の食堂・入口等は別に設けられている。

菊屋萬碧楼 中村藤吉に関する写真・資料

◂清風閣へのアプローチや、立派な松も当時のまま。

▼清風閣の外観。宇治川に面して、眺望が開く設計になっている。現在、周辺で堤防の天端にある建物は清風閣のみとなっている。

◂売店内部。奥に階段があり盛り上がっていることがわかる。

▲インド部隊も見たであろう清風閣からの眺望。二階から北方向（上）、一階から東方向（下）。

▼かつての菊屋敷地内の図面。宇治市資料館蔵。

▲各所に施された菊の模様。左：鬼瓦に菊屋。懸魚に菊。中央：階段の親柱。右：玄関引戸。

今こそ！文化芸術の発展と繁栄

本会理事
マルガユニティー主宰
モガリ 真奈美

はじめに／バラタナーティヤムとインド神話

初めてマドラス（現チェンナイ）で観たバラタナーティヤム（南インド古典舞踊）は、まさに太古の光が今ここの一点一点を照らしこの先の道をも導いている奇跡の芸術のように感じました。南インドのカルナータカ音楽の旋律とリズムに乗ってリズミカルにステップするその姿が独特であり、アビナヤという表情の美しさには、国や宗教を超えて太古から伝えられているこの芸術に魅了されていく魔法があるようにも思いました。

しかし、習得するには途方もない道のりを歩むことになります。全身の動きとバランスを保つ厳格なスタイルを追求し、複雑なステップが音楽・リズムとひとつになる練習を何度も繰り返します。その一つ一つの小さな達成感が醍醐味であり、何物にも代えがたい喜びです。それと同時に、インドの神々への祈りや感謝を表現することは、神々を身近に感じ、インドを知る一歩になり、神々の神話では時空を超越した世界を感じる面白さに出会えます。そして、バラタナーティヤムが太古から伝えているインド神話の虜になりました。

バラタナーティヤムの演目で表現するインド神話は、6 分から 10 分程度（30 分前後の踊りもあります）ですので、神話の内容はとても短くまとまっています。その中で同じ場面の同じ様なジェスチャーを繰り返し表現しますので、その神話の印象的な場面が強調されています。その演目を習得するために何度も何度も同じ様な表現を練習していると「この表現にはどの様な背景があるのだろう」と関心を抱きだしその答え探しも楽しみの一つになります。

インド神話には、摩訶不思議なことが展開する中にも心の在り方、家族のこと、道徳を正すことなど、現在にも通用する教えや叡智が今こそ必要なメッセージとして伝えられているように思います。イ

ンドでは、バラタナーティヤムの他にもインド神話の漫画本やアニメ、またTVドラマとしてお茶の間で楽しみながら神々のメッセージや太古の叡智を受け取られる環境がありますが、日本は多くの神話があるにも関わらず日本人に浸透しているとは言えない状況でありその様な環境があまりありません。そこでバラタナーティヤムを通して、日本でインド神話を伝えることを目標にして活動しています。宗教を超えて太古の叡智は、地球に生きる全ての人々の魂に響き、遠い記憶にある光が蘇っていくようにイメージしながら。。。

バラタナーティヤムが語るインド神話

2020年のコロナ禍で活動が制限されたことを機に、バラタナーティヤムで表現するインド神話の絵本「南インド古典舞踊が語るインド神話〜ミーナクシー女神〜」を制作しました。南インドの古都マドゥライ に伝わるミーナクシー女神の神話です。踊りの内容を文章にして、関西日印文化協会会員の辻恵子さん（画家）に挿絵を描いていただきました。そして、文章を読みながらバラタナーティヤムの表現を見ていただけるようにQRコードとYouTubeのリンク先を載せて動画付きになっています。他にもマドゥライでの取材から得た内容や神話の背景を解説として絵本に載せています。丁度、コロナ禍による緊急事態宣言が始まる1ヶ月前に南インドを訪れていました。マドゥライ にも足を伸ばしたのは必然だったのかもしれません。この神話が伝えられているマドゥライの中央に鎮座するミーナクシー寺院はまさに文化芸術の宝庫でした。そこで数々の不思議な体験をしたことや、踊りの背景を知る機会に巡り会えた事は大きな後押しになりました。

この一年以上、以前のように芸術活動が出来ない状況で、文化芸術の活動を続けることに不安を感じています。文化芸術活動は不要不急のなのでしょうか？こういう今こそ必要との声も多いでしょう。その一つとして、バラタナーティヤムの「ミーナクシー女神」の神話を伝えたいと思います。

踊りを短くまとめます。「マドゥライの王は、世継ぎを祈る護摩だきの火から女の子を授かり女王として育てまし

た。女王は次々に領土を広げる戦いを続けて、最後にシヴァ神の領域に行きました。その時シヴァ神と目が合い結婚しました。そして、王としてミーナクシー女神とマドゥライ を統治しました。マドゥライは、３つの文化「詩を書くこと」「歌うこと」「踊ること」の繁栄で人々は平和に暮らしました。」という内容です。

強調したいのは、「３つの文化の繁栄で人々の心を平和に導く」は今に通ずるメッセージであるということです。

ミーナクシー寺院に伝わるエピソード

バラタナーティヤムで踊る「ミーナクシー女神」の「詩を書くこと」「歌を歌うこと」「踊りを踊ること」について具体的なエピソードを紹介します。これらのエピソードはミーナクシー寺院に伝わるシヴァ神の６４の奇跡のエピソードなので、絵本の解説には載せなかった内容なのですが、この場で伝えられる機会を得た事は奇跡（シヴァ神の？）なのかもしれません。

神話は、インド哲学において、世界の誕生と消滅を定期的に繰り返す一つの時期「ユガ」４つの内の「クリタ･ユガ（サティヤ・ユガ）」（ダルマ／法・秩序・調和など／が 100% 行われている黄金時代）のエピソードから始まります。このことは、ミーナクシー女神の出生を解説するために絵本に載せました。こちらでは、シヴァ神がマドゥライに来て統治後のシヴァ神と王の関係とつながりを説明し紹介します。

まず、ミーナクシー女神と結婚しマドゥライ を統治したシヴァ神がパーンディヤ朝の Soundara 王になります。Soundara 王の息子 Ugra 王はシヴァ神の息子ムルガン神の化身。その後、シヴァ神とミーナクシー女神はミーナクシー寺院に入り数々の奇跡を起こしてパーンディヤ朝の代々の王を擁護し、マドゥライ は神の力で守られていきます。

著者は、ごく幼い時にサンスクリット語とタミル語を認識していた聖者 Paranjothi。著書には Saiva 聖典「Saiva シッダルタ哲学と、優美な語法と内容・

構成のサンガム文学の重要な意義を具体的に表現した。」とあります。

では、「踊りを踊ること」に関するエピソードです。シヴァ神は南インドでは踊りの神ナタラージャ神として有名で、バラタナーティヤムの神でもあります。ナタラージャ神が踊っているポーズは左足を上げているのですが、ミーナクシー寺院のそのポーズは右足を上げています。演目「ミーナクシー女神」でもこの踊りに限ってナタラージャ神のポーズは右足をあげる振付になっているので、下記のエピソードからその理由がわかりました。

「踊りを踊ること」

『シヴァ神の崇拝者でパーンディヤ朝５代目のRajasekara王は、舞踊を除く６３の芸術を身に付けていましたので、彼は後一つの舞踊を学びたいと思っていました。チョーラ朝の有名な詩人Karikalanは舞踊の芸術に無知なRajasekara王に、彼の王は６４の芸術を習得したことを自慢しました。そこで、Rajasekara王は舞踊の練習に取り組み始めました。しかし、シヴァ神が左足をあげて踊る技術に驚きこれは大変困難であることを早々に悟りました。「シヴァ神が地面につけない足をもち上げて　地面につける足で踊っているが、思い通りに身体が動かず痛みを感じる。片足で踊ることはさらに痛みを増すがどうしてなのだろう」と考えました。そこで彼は代わる代わるに地面にそれぞれの足をつけて練習しました。さて、いよいよシヴァ神に舞踊を捧げる日になりました。王は目に涙をためてシヴァ神に、この問題を克服できなかったことを打ち明けて、右足を上げたポーズを認めて欲しいと懇願しました。王の努力をやむなく認めたシヴァ神は右足を上げたポーズを受け入れました。』

（＊ Rajasekara王は舞踊を学びたいと強く願って、舞踊の専門家のkarikala cholaの弟子になった。という解説もある）

「歌を歌うこと」

『第 15 代目の Varaguna 王が統治している時、北から音楽家の Emanathan が訪ずれ王は手厚く受け入れました。しかし、彼は傲慢な態度でマドゥライ にいる音楽家たちに、音楽会で歌の技術を争うことを挑みました。王はマドゥライの音楽家 Banapathram に、その訪問者と国のために張り合うように命じました。彼は、「シヴァ神の恩恵により、その訪問者のプライドを抑えるでしょう」と答えました。Emanathan は弟子たちの歌の技術をマドゥライ中で見せつけていました。それを聞いた Banapathran は、「彼らの師匠の歌はどれだけ素晴らしいのだろう。」と思い、彼はシヴァ神の恩恵があることを願いました。

その頃、シヴァ神は薪売りとしてマドゥライに現れていました。Emanathan の家のポーチで休みながら楽器を弾き歌い始めたその時、Emanathan が「誰なのですか？」と尋ねたので　薪売りは「私は老齢のために歌を訓練するのは適さないと拒絶されました。そして生計のために薪を売っているのです。」と説明しました。そこで Emanathan は薪売りに「では、歌ってみたまえ」と言い、彼は感動的に歌いました。

その歌は、魔法のように木々はじっと立ち、水、泉、川、そして全ての生命が描かれた絵のように見えてとてもうっとりとさせました。蓮華座のブラフマー神はシヴァ神の足元にいました。ミルクの海にいるヴィシュヌ神は至福の海にいると感じていました。インドラは彼の体の全てが耳であることを望みました。

Emanathan が魅了され呆然としている間に、薪売りの姿をしたシヴァ神は姿を消しました。次の日、Banapathram に会うことに自信を失った彼は、荷造りをしてサッサとマドゥライ から出て行きました。彼の弟子たちも四方八方に逃げました。

シヴァ神は Banapathram の夢に現れて一連の出来事を話しました。彼はシヴァ神が彼のために薪を運んでいたことを申し訳なく思いました。そしてすぐに、彼はこれらの出来事を王に知らせました。それを聞いて驚いた王はシヴァ神を崇拝し、Banapathram に宝石と衣装をつけて生涯に渡ってシヴァ神の賛美を歌うように頼みました。

Varaguna 王が望むように、Banapathram の生涯はシヴァ神の賛美を歌うことに専念し、彼は生計を立てることはなく貧しくなりました。そこでシヴァ神は定期的に少しずつ国の宝庫から盗み、それを Banapathram に与えました。

しばらくしてシヴァ神はそれをやめたので、Banapathram は貧困と飢餓の

ために多くの苦しみを味わいました。それでシヴァ神は大きな富を彼に与えるであろうCheranの夢に現れました。「今後も私が盗みを続けたら、王はそれを知り守衛たちがそのために罰せられるでしょう。そこで、Banapathramはあなたに手紙を持っていくでしょう。」と伝えました。

Banapathramは、夢でシヴァ神からこのことを知らされていたCheranに手紙を持って行きました。Cheranは喜んでBanapathramを受け入れて彼に宝石、衣装、象、そして馬を授けました。Banapathramはマドゥライ に戻りシヴァ神を崇拝しました。そして、彼の富を詩人たち、僧侶たちや他の者たちに分配し幸せに暮らしました。』

「詩を書くこと」

まず、「詩を書くこと」のエピソードの前に＜前置き＞を少し付け加えます。

第39代目Keerthi Veedanan王が統治している時、７つの全ての海が溢れ出し世界を破壊しました。しかしマドゥライ にあるシヴァ神の神殿のあるミーナクシー寺院、象の丘、牛の丘、蛇の丘は残りました。洪水に流された世界はシヴァ神によって再現され、３人のタミルの王たちは太陽、月、火から創造されました。

チャンドラ（月）王朝のVangiya Sekara王は、ミーナクシー寺院の周りに作った街が繁栄に伴い人口が増えたのでシヴァ神に古い境界線を示して欲しいと願いました。シヴァ神は蛇の姿で街の境界を取り囲み示しました。

その街に、北インドの王朝と結びついたチョーラ国のVikrama王が大軍を率いて侵攻し勝利を確信しましたが、シヴァ神がVangiya Sekara王を助けるのを見たVikrama王は撤退しました。北インドの王たちはその後も攻撃を続けたのでシヴァ神は全てを破壊し退けました。Vangiya Sekara王は、勝利のドラムを叩き王国の安泰に努めました。＜前置きここまで＞

『この王国の子孫の繁栄を求めて権力と栄光、近隣の州に対する主権の獲得を目的とする儀式を行ったブラフマー神は、三人の妻、サラスヴァティ、サヴィトリー、ガヤトリーとガンジス川に沐浴に行きました。その途中でサラスヴァティは下働きの女性の音楽に魅了され夢中になりました。

ブラフマー神は他の二人の妻を従えて沐浴しました。後でサラスヴァティは彼にどうして自分を置いて沐浴できたのかを尋ねました。それはあなたの間違いであり、私を非難するべきでないとブラフマー神は言いました。そし

て、彼女は永遠に人間の生を得るように呪われました。

彼女は怯えて、ブラフマー神の妻が人間の形になるのがいいのでしょうかと尋ねました。彼は、あなたの身体からなる５１文字のうち、”aharam””hagaram”（解釈・定義）から４８の詩人となるでしょう。Aharam は、詩人として現れるシヴァ神自身であり、詩人たちの委員会にとどまるでしょう。シヴァ神は彼らの心に留まることで詩の創作をもたらすでしょう。と言いました。

これらの４８人の詩人たちは全ての言語になり、たくさんの国に行きそして名声を得てマドゥライ に戻りました。シヴァ神は詩人としてマドゥライに他の詩人たちを導きました。そして、シヴァ神を崇拝させて姿を消しました。

王は彼らに贈り物をして ”Sangam Mandapam（サンガムの円筒形の大ホール）” を建てました。詩人たちはシヴァ神に詩の創造性を評価するための委員会を備えたいと願いました。シヴァ神は詩人として現れて委員会を設けました。詩人たちは多くの貴重な作品を創作しました。

Vangiya Sekara 王の後、息子の Vankya Soodamani が王になりました。彼は Shenbaga（モクレン）の庭園を創り、その花輪でシヴァ神を崇拝したことから Shenbaga 王として知られました。ある日、庭園で女王の髪から違う香りがしたので、それが自然なのか人工的なものか疑問を持ち、それについて教えることができる詩人に 1000 の金貨を与えることにしました。

シヴァ神は貧困に苦しむ司祭ダルミを助けるために詩を代筆しました。王はその詩が気に入って金貨を渡そうとした時、詩人 Nakkeerar は「香りの全ては人工的なものだ」と抗議したのでシヴァ神は第三の目を見せました。それでも間違いは間違いだと言いながら第三の目の熱に耐え切れずハスの池に逃げ込みシヴァ神は姿を消しました。

全ての詩人たちは、Nakkeerar が池に沈んだことをたいへん残念に思いました。Nakkeerar も後悔していました。彼らの許しを請う願いを聞き入れたシヴァ神はミーナクシー女神とハスの池に現れて、いたわりを持って Nakkeerar にキラリと光る視線を一瞬向けました。それから Nakkeerar は詩「Kailai Paathi, Kaalathi Paathi」を書きました。シヴァ神は喜んで彼を池から助け出し、以前のように彼は詩人の委員会に名を連ねました。王はダルミに金貨を渡しました。

シヴァ神はハスの池で沐浴する Nakkeerar を気に入り、アガスティア

聖人に変化した言葉の語法と変化しなかったそれらをさらに教えるように言いました。アガスティア聖人は彼に総合法と分析手法を通して、文法・句の解説の主要な仕事を教えました。そして、Nakkeerar は学んだことを他の詩人たちに教えてシヴァ神を慕いました。

最後の Sangam（詩人の委員会）の４８人の詩人たちは、傲慢に彼ら自身を喜ばせる詩を書いていました。彼らはシヴァ神に自分たちの作品を評価して欲しいと頼みました。そこでシヴァ神はある詩人として現れて「金持ちの Guna Salini には５歳の口のきけない息子 Rudhra Sanman がいます。彼を通してあなたたちの詩を評価してもらうのがいいでしょう。彼は口はきけないのだけれど、感動したことによって涙を流したり頭を頷くように動かして詩に反応することができます。それであなたたちの不明な点がはっきりとするでしょう」と彼らに伝えました。

Rudhra Sanman は委員会の詩人たちに招待されました。彼はいくつかの詩の言葉遣いの美しさ、他の詩の一貫性と内容に反応し、いくつかの詩には両方がないことを非難しました。しかし、Nakkeerar, Kapilar そして Baranar の詩を聞いている時は、彼は涙して頭をこの上なく幸せそうに動かしていました。その後、詩人たちはもはや口論をしなくなりました。そしてこの３名をもっとも素晴らしい詩人として受け入れました。』

文化芸術の繁栄とは

以上「詩を書くこと」「歌を歌うこと」「踊りを踊ること」のエピソードで、代々の王が文化芸術に関心が高く自らもそれらを学び習得したことや、詩人、文学者、音楽家、舞踊家などに文化芸術の発展を求めて支援や庇護をしていたことがわかります。このように、太古の多くの詩人と実力者の庇護により発展したサンガム文学は、優れた叙事詩や文献を残し極めて貴重な遺産になっています。そして今もなお、その大きな影響を受け継ぐタミル文学は、南インドの人々の誇りであり、人々の心の糧となり愛されています。また、バラタナーティヤムも素晴らしい芸術として受け継がれているのです。文化芸樹の促進・発展が神への信仰と融合してきた歴史であると言えます。

神への信仰とは、このエピソードではシヴァ神を指しますが、元々は日本と同じで南インドも大宇宙・大自然の恩恵に感謝し畏敬の念を持ち日々の安泰を祈る習慣がありますので、それを神への信仰と捉えてみます。例えば、「乾いた大地に大きな傘のような木が立ち、

その木陰に寄り添う人々はひと時の涼に感謝し、雨季は山や川・池を豊かにし浄化し大地を育み、人々は沐浴し崇拝をする。」このような自然への感謝を神への崇拝と重ねて、詩が生まれ歌となって豊かな心を育み、歌の節（リズム）が心身を鼓舞し力強い心と精神へと導く文化芸術が発展したと推測します。すなわち、「詩を書くこと」「歌を歌うこと」「踊りを踊ること」その他の文化芸術の繁栄は、大地のエネルギーを心身の研磨による豊かな感性で、天（宇宙・神）へと昇華していくこと、まさに個々のチャクラの活性と整列を促し天地に繋がる目的に向かうと考えます。

最後に、このエピソードには、自然災害による深刻な飢餓の時のこと、家族の問題、嫉妬や欲望など心の問題、領土争いなど、時代の流れに沿って様々な困難が生じますが、シヴァ神や神々（聖人）が奇跡を起こしてその時代を統治する王を導き、王は恩恵に感謝して人々の安泰な日々を祈ると語られています。そこには現在にも通ずる内容が多々あります。太古から繰り返されているあらゆる困難な問題が今の時代にも形を変えて生じていますが、次の新たな時代への道を照らす解決法は何でしょう。

その一つとして、先にも述べた「天地の繋がりに感謝する文化芸術の発展と繁栄」であると確信しています。南インド・マドゥライ で伝えられている神話「ミーナクシー女神」のバラタナーティヤムの演目がここで輝き増すことを願います。

関西日印文化協会サイトのご紹介

関西日印

最新情報を確認できます

過去の刊行物も閲覧できます

1958年発行の日印文化 1号より

QRコードで簡単アクセス

インドフォークアートワークショップの記録

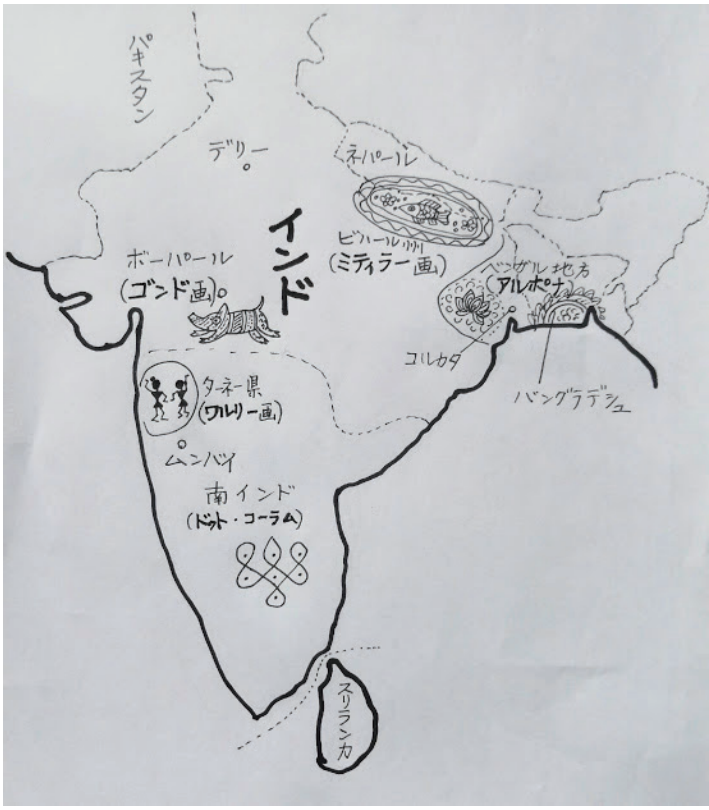
本会会員
川瀬 陽子

インドフォークアートワークショップの経緯

2012 年から 2019 年まで（2016 年なし）計 7 回、神戸三宮の勤労会館、インドクラブで、関西日印文化協会主催の体験型イベント「I LOVE INDIA」の「フォークアートワークショップ」を洋画の辻恵子先生と一緒にご指導いたしました。

私は日本画出身で度々インドに細密画やスケッチなど絵の勉強に行っていました。辻恵子先生も、インド人作家の絵本に挿絵を描かれるなどインドと関わっておられました。二人でインドのフォークアート（原住民に伝わる、壁画や地面に描く絵）を取り上げ、その場で実際に参加者に描いていただくワークショップを企画しました。

今回は、今まで取り上げたフォークアートについて、それぞれの歴史や説明、描き方、参加者の作品例などをまとめてご紹介したいと思います。



フォークアートの分布地図
ワークショップで取り上げたフォークアートの発祥地です。

1．ワルリー画 (Warli painting)

（第1回･2012年､第7回･2019年実施）

◆歴史と説明

インド西部、マハラシュトラ州ターネー県の先住民族ワルリー族によって描かれる壁画です。

自然への畏敬の念を込めて神羅万象に宿る精霊や女神、神話、村の生活などを、米の粉を水で溶いた白い絵の具と竹を削ったペンを用いて、赤土の壁に描いたもので、線描と三角形や矩形、円などの組み合わせによって人物や動物を表します。1972年にこの独特の表現を世に広め民俗画として育てようというインド政府の勧めで紙や工芸品にも描かれるようになり、民俗画として国内外に知られるようになりました。

◆ワルリー画の学習

2010年12月末から2011年1月上旬にインドを訪れた際、現地の学校で美術教師をされているカリヤーニ・ボレティさんに教えていただきました。

コースターのように丸く切った茶色の紙に、白い絵の具を使い、人や動物を頭部は丸、胴体は三角二つ、手足は関節部分を曲げた直線で表し、人々が様々な活動をしている様子を思い浮かべながら描くというもので、即興的に描く面白さがありました。

◆ワークショップの実施状況

2012年は茶色や様々な色の円形や正方形の紙を多数用意し、お客さんに白の水彩絵の具や、銀色の細いマーカーを使ってワルリー画を描いてもらい、最後にカバーフィルムではさんで接着、切り抜いてコースターを作りました。30分入れ替え制で2回実施しました。

2019年は30cm角に切った布に、細書き油性ペンでワルリー画を描いてもらい、テーブルセンターを作りました。50分入れ替え制で2回実施しました。

ワルリー画の描き方資料 （資料1）
（この原稿の最後のページ参照）

第1回の2012年は、模造紙に説明・描き方を大きく書き、インドでの作例写真や実作品と共に掲示していました。第7回では模造紙資料の他、実作品、描き方、様々なインドの神様の線描のプリントなど用意しました。

この年は初めてで指導者は余裕がありませんでしたが、参加者の皆様には楽しく作って頂きました。

寄稿

参加者の様子・
作品例（2012 年）▶

◀参加者の様子・作品例（2019 年）

ワルリー画の基本形と合わせて、様々なインドの神様の絵も取り入れる方々もおられ、自由な作品が生まれました。

2．ゴンド画 (Gond painting)

（第２回・2013 年実施）

◆歴史と説明

インド中央部、マディヤ・プラデーシュ州を中心に住む先住民族ゴンド族によって描かれる絵画です。

伝統的なゴンド画では、村の儀礼や祭事の折にいろいろな神話や神様､動物、人物が、家の床や土壁に描かれてきました。寓話や神話、自然・動物や人物の形を描き、いくつかに区切って色を塗り、中に精緻な模様を敷き詰めるように描き込んでいきます。

近年では現代的な感覚で、キャンバスに色鮮やかに描く優れたアーティストも国内外で注目されています。

◆ゴンド画の学習

2012 年 12 月末から 13 年 1 月上旬にかけてインド旅行に行き、再びカリヤーニ・ボレティさんにゴンド画を教えていただきました。動物の形の中をいろいろな模様で埋め尽くすというもので、イノシシの親子を描きその中に様々な模様を考えながら描きました。

◆ワークショップの実施状況

前年度は 30 分入れ替え制でしたが、時間が足りない場合もあったので、50 分入れ替え制で２回実施しました。形の中を彩色したり、模様を描く画材は、水彩絵の具、つまようじ、綿棒、筆などを準備しました。元になる動物や神様の形を数種類印刷した色画用紙と、無地の色画用紙を用意し、好きなものを選んで制作できるようにしました。

ゴンド画の描き方資料　（資料２）

模造紙に大きく説明を書いて掲示し、描き方資料プリントも作りました。

参加者の様子・作品例

お子様から大人まで、熱心に取り組んでくださり､素敵な作品ができました。

3．ミティラー画 (Mithila painting)

又はマドゥバニー画 (Madhubani painting)

（第 3 回・2014 実施）

◆歴史と説明

インド、ビハール州のマドゥバニー村近辺の家々の女性によって、母から娘へ、何世代にも受け継がれ、祭や宗教的行事、結婚といった人生の節目に、漆喰を塗った家の土壁に描かれてきました。

主に自然やヒンドゥ教の神々を細かく線で描き、隙間は花や動物、幾何学図形で満たし、植物からとった色で部分的に彩色します。

1967 年の飢饉の折に、インディラ・ガンディー首相が収入源として紙に描くことを奨励し、有名になりました。

◆ミティラー画の学習

1997 年から 98 年にかけて、ウエスト・ベンガル州のビシュワ・バラティ大学に留学していた時、隣のビハール州から来ている人たちからマドゥバニー画を購入する機会がありました。神様や自然を素朴で力強く描いている絵に魅力を感じました。

その後、日本で「インド素朴絵画 (マドゥバニー・ペインティング)」(大崎紀夫氏　著) に出会い、それらを参考にして自分でも描いてみることにしました。

◆ワークショップの実施状況

インドを題材にした油絵を描かれる山本貞子様にもご協力いただき、50 分入れ替え制を 2 回実施しました。一から神様などの形を描くのは難しい場合もあるので、無地の画用紙の他、ガネーシャ神、クリシュナ神、孔雀、花、魚、外枠などの一部輪郭を印刷したものも準備しました。辻先生にも魅力的な資料を準備していただきました。画面を埋め尽くすように線や模様を細書き黒油性マーカーで描き足し、一部を水彩絵の具で彩色してもらいました。

ミティラー画の描き方資料　（資料 3）

模造紙の説明と共に実際の作品を掲示し、プリント資料もお配りしました。

参加者の様子・作品例（写真 4）

お子様から大人まで、多くの方々に熱心に描いていただきました。

４．アルポナ画 (Alpona)

（第 4 回・2015 年実施）

◆歴史と説明

インド東部、ベンガル地方の女性たちによって、ヒンドゥ教の祭りや祈り、結婚式などの機会に、庭などの地面、石の床など水平面、土壁などに、米粉を水で溶いた白い液体と、指と布を使って描かれてきた民俗画です

その場を清め、神聖にするために、土壁や石の床、地面などに、毎朝、又は儀礼の折に、家々の女性たちが、米粉を水で溶いた白い液体をしみこませた小さい布切れを手で持ち、中指を伝わらせて描きました。同心円形を基本に、即興的な模様や、吉祥模様という縁起のいい模様、例えばラクシュミ神の足あとや、太陽、稲穂、蓮の花、唐草模様などが線や点の組み合わせで描かれます。文様は各家庭で母から娘へと継承されます。他の地方では米粉や色粉で描かれ、ランゴーリ (Rangoli) と呼ばれています。

◆アルポナ画の学習

2014 年 12 月末から 15 年 1 月上旬にかけてインド旅行した際、アッサム出身のジュミ・チョードリーさんに教えていただきました。黒い大型の紙に白絵の具と布を使って描きました。それまではウェスト・ベンガル州のビシュワ・バラティ大学校内で目にしたことはあったのですが、自分で描いたことはなかったので、実際に即興で模様を考えながら描くのは新鮮で楽しく感じました。

◆ワークショップの実施状況

50 分入れ替え制で 2 回実施し、八つ切りの色画用紙と、基準の半円形を描く厚紙の帯に複数の穴をあけたもの、鉛筆、白色ジェッソ（水性アクリル絵の具）を水で溶いたもの、容器、絵具をしみこませる小切れの布、新聞紙、ドライヤー等を準備しました。

アルポナ画の描き方資料 （資料 4）

アルポナ画特有の吉祥模様（ラクシュミ神の足跡、蓮の花、唐草模様等）や、描き方を模造紙に書いて実作品と共に掲示しました。描き方プリントも作りました。

参加者の様子・作品例（写真 5）

お子様から大人まで、多くの方々が熱心に取り組んで素敵な作品ができました。

5．ドット・コーラム (Dot Kolam)

（第 5 回・2017 年実施）

◆歴史と説明

インド南部タミル・ナードゥ州に起源を持ち、南インドのカルナータカ州、テランガナ州、アンドラ・プラデーシュ州、ケララ州、ゴア州、マハラシュトラ州、スリランカで描かれます。グリッド状に打った点を基準に、一筆書きのような線で囲んだり、結んだりして描かれます。朝に女性の家族が、玄関前に米粉、石灰、岩粉を手で置いて描きます。

地方によって呼び名が変わり、ムッグー（muggū）、アリパン（aripan）、マーンダーナー（māṇḍanā）などと呼ばれます。

◆ドット・コーラム画の学習

アルポナ画と同じく 2014 年 12 月末から 15 年 1 月上旬にかけてインド旅行した際、アンドラ・プラデーシュ州出身のカリヤーニ・ボレティさんに教えていただきました。米粉とターメリック粉を手から落として黒画用紙に一筆書き模様を描くのは初めての経験で、粉がふわふわと広がるので練習がいると思いました。

◆ワークショップの実施状況

再び洋画の山本貞子様にお手伝いいただき、50 分入れ替え制で 2 回実施しました。粉を線状の模様に置くのは一度では難しく、紙でコーンを作り細く出す方法も紹介しました。数回繰り返し練習できるよう、須磨海岸の砂を洗って乾かしたものと、コーヒー豆の粉を乾かしたものを準備しました。また、関西日印文化協会の方々にご協力をいただき、缶ビール 6 本入りの箱を集め、中に八つ切り色画用紙を敷き、その上に粉で模様を描いてもらい、気に入ったら各自その場で作品写真を撮ってもらいました。

ドット･コーラム画の描き方資料　（資料 5）

コーラムの吉祥模様を模造紙に描いたものや、コーラムの写真を拡大コピーしたものを掲示しました。描き方プリントも準備しました。

参加者の様子・作品例（写真 6）

敬老の日に実施したこともあり、お子様からご年配の方々にも多くご参加いただきました。作品を持って帰っていただくことはできませんでしたが、写真を撮ったり、砂をまいて模様を描くのを充分楽しんでいただけたようでした。

6．ペイズリー文様　(Paisley)

（第 6 回・2018 年実施）

◆歴史と説明

ペイズリーは装飾に使われている文様で、名前の由来は 19 世紀にこの柄の織物が量産されるようになったイギリスのペイズリー市です。模様の発祥地はインド・イランで、紀元前 5 ～ 6 世紀にすでに描かれていました。モチーフは、菩提樹・マンゴー・ナツメヤシ・ザクロ・糸杉・原生動物・植物の種子等、諸説存在します。勾玉のような形の中に様々な文様が描かれます。インドでは、ペイズリーの名称以前は「ブータ」「カルカ」とよばれていました。

◆ペイズリー文様の学習

ペイズリー模様はテキスタイル（布）にデザインされているので、ジャイプール在住のミナークシ・ラトゥルさんがデザインしたシルクスクリーン印刷の布の模様や、愛用していたインドのバンジャビードレスの模様を見て、いろいろ応用して描いてみました。

◆ワークショップの実施状況

約 30cm × 60㎝の丈夫な数色の薄い色の布地に、油性マーカーで模様を描いてランチョンマットを作ってもらいました。布地を透かして模様が描けるよう、辻先生にランチョンマットに合う型紙を数種類用意していただきました。50 分入れ替え制で 2 回実施しました。

ペイズリー文様の描き方資料　（資料 6）

ペイズリー模様のあるインドの服、ショール、ランチョンマット作品などを掲

示し、ペイズリー模様の描き方（中から外に描く）、布の下に敷いてペイズリー模様の形が描けるプリント、模様の作例プリントを用意しました。

参加者の様子・作品例（写真 7）

型紙を選んでペイズリー模様の輪郭を描き、その内外に模様を増やして作品にされる方が多かったです。数色のペンでカラフルな作品を楽しんで作っておられました。

まとめ

振り返ってみますと、フォークアートを教えてくださったインドの友人の方々、毎回一緒にご準備ご協力いただく辻恵子先生、山本貞子様、様々な材料や机の準備などをお手伝いくださる関西日印文化協会会員の方々、北野ライオンズクラブの方々、ご来場ご参加いただいた皆様のおかげで毎回盛況に実施できました。ご協力いただいたすべての方々に厚くお礼を申し上げたいと思います。

これらのフォークアートには、通常の絵画とは違う描き方や画材を使い、初めての方でも、楽しく新鮮な驚きを味わいながらインドの文化を学べる素晴らしさがあります。写実的に描く絵と違い、思いついた模様や、楽しい記憶を思い浮かべながら、のびのび表現する喜びを多くの方々に味わっていただきたいと思います。そんな思いから「I LOVE INDIA」の他、講師をしている姫路市立姫路高校、絵画教室、INDIA MELA、立命館守山高校でもこれらのインドフォークアートワークショップを実施しました。

2020 年は新型コロナ感染拡大防止の観点から、「I LOVE INDIA」は 20 名限定の会場での観客の方々と、その他の観客の方々は Zoom オンラインでの鑑賞で実施されました。「フォークアートワークショップ」は体験型ワークショップで材料等用意できないことから実施を見送りました。これからの実施は現在未定ですが、今後も新たなインドフォークアートを取り上げ、皆様に楽しみながら体験していただけるよう情報収集し、準備してまいりたいと考えています。

参考文献

「インド素朴絵画（マドゥバニー・ペインティング）」（京都書院　大崎紀夫　著）Wikipedia（Warli painting, Gond painting, Mithila painting, Alpona, Dot Kolam, Paisley）

ワルリー画の描き方資料　（資料１）

＜ワルリー画＞

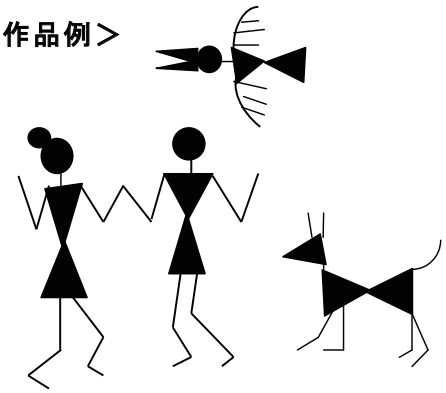
I LOVE INDIA 2019　31st Aug.

インド西部マハーラシュトラ州の先住民族ワルリー族が、
自然への畏敬の念を込めて神羅万象に宿る精霊や女神、神話、村の生活などを、
米の粉を水で溶いた白い絵の具で赤土の壁に描いたもの。
近年インド政府の勧めで紙や工芸品にも描かれるようになり、
民俗画として国内外に知られるようになりました。
モダンアートのような丸・三角・線というシンプルな形の組み合わせで、
誰でも自分の思い出や日常生活など驚くほど簡単に豊かな世界が表現できます。

＜描き方＞

人物や動物の胴体を三角形二つで表し、頭は女子は丸い頭部にお団子、男子は丸い頭部のみで表す。手足は線で表し、関節は曲げる。家やその他のものは簡潔な線描で表す。いろいろな思い出や生活の一こまを表してみましょう。**今回は正方形の布にワルリー画を描いてテーブルセンターを作ります。**

＜作品例＞



ゴンド画の描き方資料　（資料 2）

I LOVE INDIA 2013 ワークショップ

24th Nov. 2013

ゴンド画　（Gond painting）

ゴンド画は、インドの先住民族ゴンド族によって描かれています。インドには、500以上の先住民族が住んでいますが、ゴンド族はその中の最大の民族で、インドのマディヤ・プラデーシュ州を中心に近隣の各州に居住しています。ゴンド画は、儀礼の折に家の土壁に描かれてきました。ゴンド族の伝統絵画を現代的な感覚で描く優れたアーティストも注目されています。

描き方

1．動物や人物の形を描き、内部をいくつかに大きく区切り、それぞれの面を彩色します。

2．その上から、面をうめつくすように、様々な色の点々や短い線などで、繰り返し模様を描き込んでいきます。

ミティラー画の描き方資料　（資料３）

I LOVE INDIA 2014/9/21

ミティラー画（マドゥバニー画）の描き方

１．　画用紙にふちどりのワクを描き、中に動物、人物、神様等を　黒い細い線で描きます。

２．　黒ペンで、ふちどりのワクや、動物、人物、神様等の輪郭を二重にしたり、波線、ギザギザ線、斜線を引いたり、模様や飾りを線で描きこんでいきます。

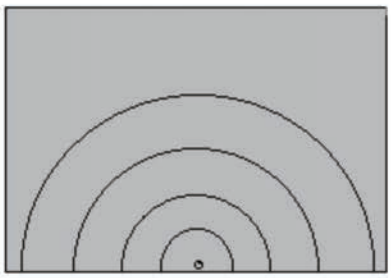
３．　空いている空間をうめるように、花や点々、オリジナルの模様など、好きなものを線でたくさん描きこみます。

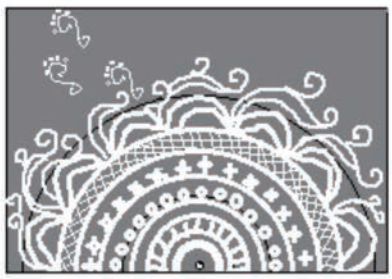
４．　最後に、部分部分に絵の具できれいな色を塗って完成します。サインも書きます。（塗らないところも残します。）

アルポナ画の描き方資料　（資料 4）

アルポナ（Alpona）の描き方の例

I LOVE INDIA 2015 12th July





アルポナは元々、土壁や石の床、地面などに、米粉を水で溶いた白い液体で描かれました。ここでは、色画用紙に、ジェッソというアクリル絵の具を使って描きます。

1. 色画用紙の長い一辺の中心あたりにえんぴつで点を描き、そこを中心にして、紙コンパスなどを使って、えんぴつで半円形をいくつか描きます。
模様を描くときの目安になります。

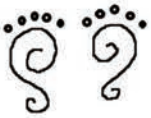
2. 白絵具を用意して、布きれにしみこませ、薬指と親指でつまむように持ちます。布から中指に伝ってきた絵具で、半円の中心に点を描きます。そこから半円を描き、中心から外側向かって、点、円、繰り返しの幾何学模様、半円形などを次々描いていきます。

３．　思いつくままにいろいろなパターンで模様や形を繰り返し描いていきます。線だけでなく、塗りつぶすところがあってもいいです。
満足できるところまで模様を描いて完成します。

4. 吉祥模様という、縁起のいい模様もあります。
（例）　ラクシュミ神の足あと

稲穂

蓮の花



唐草模様

出来上がったアルポナは、壁に飾ったり、床やドア（部屋の出入口）の前に置いて鑑賞しましょう。

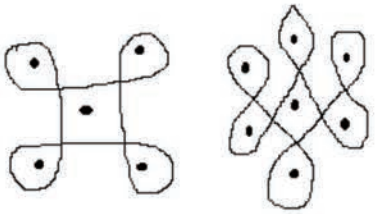
ドット・コーラム画の描き方資料 （資料 5）

ドット　コーラムの描き方　（Dot Kolam）

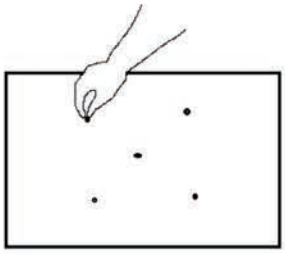
I LOVE INDIA 2017

18 Sep.

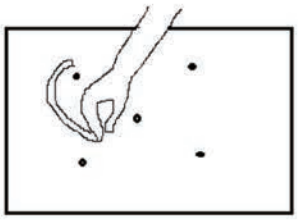
１．　ドット　コーラムは点を基準にして、線で囲んだり、結んだりして模様を描きます。紙に点を打ってから、線を引いて描き方を確認しておきます。

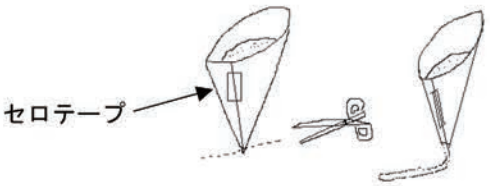


２．　箱の色画用紙の上に、砂をつまんで基準になる点を置きます。簡単なデザインから始めましょう。

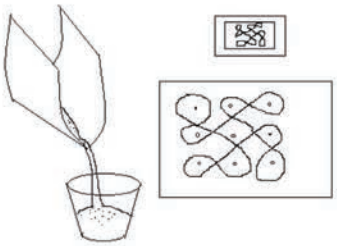


３．　点を基準にして、手で砂をつまんで線状に置いていきます。
手で置くのが難しい場合は、紙を巻いてコーンを作り、中に砂を入れ、コーンの先を少し切って砂が出るようにして、線状に置いていきましょう。

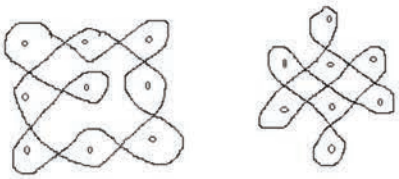




４．　置いた砂は再び容器に戻し、何度も練習してみてください。いろいろなデザインを作ってみて、気に入ったコーラムができたら写真を撮ることをお勧めします。



５．　よい機会があれば、実際に地面や床にコーラムを描いてみてください。



ペイズリー文様の描き方資料　（資料 6）

ペイズリーもようをかこう

I LOVE INDIA 2018 17th Sep.

ペイズリーもようとは？
インドやイランで、ボダイジュの葉、ナツメヤシ、ザクロ、糸杉、マンゴーなどの形から考えられたもようで、イギリスのペイズリー市でそのもようの布がよく作られた

ペイズリーもようを布にかいて、すてきなランチョンマットを作ってみよう！

ペイズリーもようの例

いろいろ　もようを考えてみよう！

関西日印文化協会 入会のご案内

関西日印

会員 随時募集しています！

ホームページの「関西日印文化協会について」を
ご覧ください。

◆インド文化を知り体験する交流イベント「I LOVE INDIA」を毎年開催しています。
◆在大阪・神戸インド総領事講演会を行い、交流を深めています。
◆その他、様々な団体（インド政府組織、大学等）と連携して、日印交流イベント情報をご案内しています。

『令和印度滞在記』

元在インド日本国大使館専門調査員

宮島 菜実

２０１９年４月、人生で３度目となるインド滞在が始まった。１度目の滞在は旅行者として、２度目はボランティアとして、そして今回は仕事として。本会報をお読みになる諸先輩方にとっては３度のインド経験など取るに足らないものであると承知した上で、未来のインド経験者のために自身のインド滞在で印象的だった出来事を共有させていただければと思う。

１「民主主義」であり「世俗国家」であるインドについて思うこと

いきなり堅苦しそうな題名ではあるが、この２年間、インドに住んだ者として触れないわけにはいかない話題である。インドは世界最大の民主主義国家であるとされていることは周知の事実であると思う。インド独立当初から民主的な選挙が実施され、約９億人という世界最多の有権者数を抱えることがそう形容される所以である。それに加え投票率が基本的には６０％を超え、地方選挙となれば８０％超えはざらであり、その意味で言えば立派な民主主義国家であるように見える。

また、インドは独立時から「世俗国家」を名乗り、１９７６年のインド憲法改正により、憲法にも「世俗」という言葉を盛り込んだ。宗教別に見ると、ヒンドゥー教徒が人口の圧倒的多数（約８０％）を占めるインドにおいて、イスラム教徒（約１４％）やキリスト教徒（約２．３％）、シク教徒（約１．７％）などの他宗教信仰者は圧倒的にマイノリティーである（と言っても日本以上の人口を有するが）。とは言え、インドは、その宗教的多様性を、第２次世界大戦後にムスリム国家として歩み始めたパキスタン（現パキスタン及びバングラデシュ）とある種対比した形で、アイデンティティとして掲げてきた。宗教に対し寛容で、宗教に関わらずインド大陸で生まれた者がインド人であるという国家の精神的枠組みは、常にインドの根底にある誇りのよう

なものであると思う。

各宗教の重要な祭事には、大統領もしくは首相らが欠かさず祝福のメッセージをＳＮＳ上などで自ら発信し、インド国全体の祭事であるように演出する。余談だが、インドの公用語であるヒンディー語が現地語ではない地域の祭事においては、同地域の現地語及び英語、ヒンディー語を併用してお祝いのメッセージが発信されることが通常であり、単一言語国家の日本に生まれた私にとっては非常に興味深い。いずれにせよ、インドは何かしらの宗教を信仰する国民がほとんどでありながら、世俗国家としてそれぞれを尊重しつつ歩んでいるように見えるわけである。

民主主義にせよ世俗国家にせよ「見える」と書いたのは、今回の滞在中、そうとは言い切れないかもと思う場面に出くわしたからである。あまりインドでの経験がない方のために先に補足しておくと、私の記録はインドの一側面に過ぎず私自身にとって印象的であった点を記しているに過ぎないということを前提に読み進めていただきたい。

私の滞在中、印象的な出来事の一つに市民権法の改正があった。市民権法はインド国民としての市民権が誰にどのように付与されるのかなどを記した法律で、１９５５年に初めて制定された。その後複数回改正が行われたが、２０１９年に再度の改正が国会で審議され可決された。簡単に主要部分のみお伝えすると、この改正により、インド近隣の３つのイスラム教国家（パキスタン、バングラデシュ、アフガニスタン）からの、ヒンドゥー教、シク教、仏教、ジャイナ教、ゾロアスター教、キリスト教に属する不法移民（つまりイスラム教徒以外の不法移民）を、宗教的な難民とみなしインド市民権を付与することが可能となった（その他条件あり）。「イスラム教国家から」の不法移民を「宗教的な」難民とみなすため、ムスリムは対象とされていないのであるが、これは明らかなムスリム差別であるとして、国内各地で主にムスリムによる大規模抗議活動が実施された。

モディ首相率いるインド人民党（ＢＪＰ）は、２０１４年以降インド中央政権を担い、モディ首相の人気を背景として国民からの支持を拡大している。ＢＪＰは民族奉仕団（ＲＳＳ）というヒンドゥー主義を掲げる巨大組織を母体とする右派政党である。ヒンドゥー主義とは、母なるインドの地に育まれた民族共通の文化の継承・繁栄を目的とするものであり、必ずしも他宗教を排除するものではないとされているが基本的にはヒンドゥー教の教えがベースとなる。

このようなＢＪＰ率いるインド政府が可決させた市民権法の改正は、当然の帰結としてムスリムの影響力を低下させようとするものに見えるため、ムスリム

の人々を中心に大きな反発を引き起こした。首都のデリーでも主にデリー北東部や南部において抗議活動が実施された。特にムスリム女性を中心とした座り込みの抗議活動は、気温がぐっと低下する２０１９年１２月から新型コロナウイルス拡大を受けたロックダウン開始まで継続された。余談だが、その抗議活動に参加した８２歳のムスリム女性は、米国タイム誌の２０２０年に世界で最も影響力のある１００人の１人として選出されている。

この抗議活動が実施された頃、新聞やテレビを連日賑わす抗議活動の様子は、日本のバブル期以降の実体験しか有さない私にはとても新鮮で衝撃的なものであった。前述した座り込みの抗議活動は平和的なものであったが、何百人というムスリム女性が集団で座り込みを行っているそばで警察が立ちすくんでいるという光景は異様でありながら、選挙以外の民主主義の形が現れた瞬間であった。また、市民権法に限らずヒンドゥー主義を掲げるＢＪＰの勢力拡大に恐怖感を抱くムスリム国民の存在がわかりやすい形で認識された出来事でもあった。

また、同時期の２０２０年２月に発生したデリー北東部における市民権法の改正賛成派による暴動も印象深い。この暴動については、現在調査段階にあるものの、改正に賛成であるヒンドゥー教徒によるムスリムへの攻撃が主なものであった。抗議活動により一般市民が公共の道路などを利用できないなど不便な状況が継続し、市民の不満が蓄積される中で発生したこの暴動は、抗議活動に何ら関係のない一般市民まで巻き込み大騒動へと発展した。同地は治安上危険な状態となり、一時インターネット接続が停止されたり、集会禁止令が発令されるなどの措置がとられた。インドが世界で最も政府によるインターネット接続制限数の多い国とする調査もあるが、世界最大の民主主義国を謳うインドの脆弱な部分が現れた出来事だった。

パンデミックの影響を受け、デリーのみならずインド各地において実施されていた市民権法改正に関連する抗議活動は一応の収束を見せている。しかしながら、野党政党は、地方選挙のための選挙活動において市民権法の改正に批判の声をあげ続けており、それに賛同する支持者も少なくないため、今後いつ火を噴き返してもおかしくない問題である。

市民権法の改正と同様に大きな抗議活動を引き起こしたのが、２０２０年９月、これも国会で可決された農業分野に関連する複数の法改正である。この農業法の改正につきごくごく簡単に述べると、現在政府の管理下にある農産物取引を市場に開放し、農産業への

投資を促したり、農民が仲介を介さず直接収入を得られるようにしたりするものである。私は専門家ではないのでこの改正の是非は論じないが、主にデリー周辺の、ハリヤナ州、パンジャブ州、ウッタル・プラデシュ州の農業団体が、改正の内容に加え可決のプロセスが強引なものであったことに批判の意を示し、２０２０年１１月からデリー周辺に宿営地を設け、道路を封鎖するなどの一応は平和的な抗議活動を継続中である。しかし、２０２１年1月２６日の共和国記念日、農耕用トラクターに乗り込んだ農民中心の抗議参加者らが群をなしてデリー内に入り込み、参加者の一部がインド独立の象徴とされるレッド・フォートに押し入るなどの暴動に発展した。抗議活動の主催団体は、農民の抗議活動を利用した暴徒の仕業であると発表しているが、共和国記念日という民主主義国家として重要な意味を持つ日にコントロール不能の暴動が発生したことは事実であり、民主主義国家たるインド史上の汚点となったことは間違いないと思う。

これら２つの抗議活動は、私のインド滞在中、紙面を賑わし、また複数の死者を出したことで強く印象に残った。関係者が莫大な人数にのぼり、負傷者が発生するなど衝撃的な事実が多かったというだけではなく、インド政府の強引な法案可決までのプロセスや、その上で治安上の問題が発生しそうな場合などは直ちにインターネット制限を課すという対応を見て民主主義国家としてのインドに疑問符がつくという意味で印象的であった。

このような社会的インパクトの大きな抗議活動はもれなく野党政党が政治利用をする。著名な政治家が抗議場所に赴き、自ら抗議参加者と意見交換を行い現政権に対する批判を口にすることは日常茶飯事である。民主主義国家としてのインドに疑問符が浮かぶなどと大仰に述べた下りと矛盾するが、この野党の活発さや国民の抗議活動への行動力は、結果は別としても、ある意味で民主主義の形としては健全なのではないかと思う場面もあった。

世俗主義を掲げる、世界最大の民主主義国家・インド。インドがその形容詞どおりの国であるとは思わないが、今回の滞在を通じ、少なくともインド国民にはその矜持があるし、そうであるよう目指していることも実感した。日雇い労働者や衣食住すらままならない国民も多いため、そんな精神的なことよりも目の前の生活が大切であると多くの国民は思っているだろうが、それでもリキシャワーラー（リキシャの運転手）などの一般市民が自然に政治に興味を持ち、必要であれば抗議活動をも厭わない国民性に民主主義の形を見る。彼らは一様に生活の改善や人生の

上昇を目指して、政治に期待をし続けている。急激な成長を遂げている国の民主主義の形はあまりにもエネルギッシュだし、ここで一括りに語るにはあまりに多様だけれど、彼らの未来への期待に触れると、その一つのツールとして政治が必ずあり、民主主義が活きているなと感じるのであった。

２．デリーでの暮らし

抗議活動にパンデミックと物々しい雰囲気漂うデリー滞在に映るかもしれないが、もちろんそれだけではない。私が滞在していた２年間だけでも、インドは急速に変化し続けており、新しい発見もたくさんあった。

まず、ＵｂｅｒやＯｌａなどのタクシー配車アプリの導入は劇的に外国人のインド滞在を簡単に、言い換えれば味気ないものにしている。私が２０１０年頃にインドに滞在していた際は、オートリキシャやサイクルリキシャを利用するためまずリキシャワーラーと値段交渉をし（これが本当に大変)、きちんと目的地に向かっているのか気を張っている必要があった。英語を話すことが出来るリキシャワーラーばかりでないことが問題をより困難にした。言い換えれば、それが面白かった。しかし今ではスマホアプリへの登録一つで、値段も予め決まっているし、支払いはアプリ経由で行うことができるし、ＧＰＳ機能により現在地がわかるしで、リキシャワーラーとは一言も交わすことなく目的地へ到達できる。さらに価格設定は現地価格であるため、かなりの安価である。インドで生活する者、毎日リキシャを利用する者としてこれには大変助けられたが、もしも私が旅行者であればインド旅行の面白い部分をごっそりと失っていることになるので残念に思ったかもしれないことは言い添えておく。

デリーで食に困ったことは一度もない。さすがは首都なのであるが、インド料理に限らず、他国の料理やファーストフードの飲食店も多数出店している。有難いことに、ココ壱番屋やすき家がパンデミックに負けずインドに出店した。以前から日本料理屋さんはあったし、日本の食材もある程度入手可能であったが、新たな日本企業の進出は、お腹が喜ぶだけでなくコロナ禍において心も喜ぶニュースの一つであった。

元々デリバリー文化が根付いているインドだが、新型コロナウイルス拡大に伴うロックダウンを経て、デリバリー体制を備えた飲食店の数が急増した。そのおかげで、様々なレストランに日替わりでデリバリーを依頼し、好みのお店を見つけることが、ロックダウン中の楽しみの一つであった。デリバリーを頼んだ冷凍食品が溶けてしまってい

たり飲み物が盛大にこぼれてしまっていたこともよくあったがご愛嬌である、と思えるくらいにはデリバリーだけでも色々なハプニングが起こったのだが、それが滞在の良いスパイスとなった。

日本にもあるようなスーパーマーケットも存在し、冷凍食品から外国製品まで大抵のものは何でも手に入る。ロックダウン中には専ら日用品や食料品の調達アプリを利用しデリバリーに頼っていたためスーパーに行く機会は激減したが、休日の良い気分転換先であった。

一方で、手押し車を引いて野菜や果物を売り歩く昔ながらの行商人も当たり前にいて、主婦と思しき女性らが行商人を囲っている姿をよく目にした。日本では手に入れられないような新鮮な果物や野菜を安価で本当にたくさん食することができた。種類の異なるマンゴーやメロンを食べ比べするという贅沢もやってのけ、食生活は大変充実していた。

インドではカレーが主食なんでしょうとは最早使い古されて面白みも何ともない質問であるが、滞在中、インドでは本当にカレーが主食なんだとしみじみ感じることは多かった。わかってはいたが、本当に何にでもスパイスを入れてくる。マクドナルドのカレー風味のメニューがあることは驚かないが、アイスクリームがカレー風味やパーン風味（噛んで清涼感を得るインドの嗜好品）になっていた時はさすがに笑ってしまった。インドらしくて良い思い出である。

デリーは絶賛開発ラッシュの最中であり、私の滞在中にも新たな店舗や道路が日々出現し、街中散策はまさに一期一会の連続であった。昨日でこぼこで歩きづらかった道路が、今日は綺麗に舗装されている。昨日まで空き家だったスペースが新たに開店準備に入っている。そういうことが日常茶飯事だった。もちろん街や店舗が綺麗になると生活しやすくなり、有難いことであったが、時には旅行者気分ででこぼこ道を歩きながら、何が売られているかわからないけど何でも売っている昔ながらの店を冷やかしに見学したり、道を悠々と歩いているハエまみれの牛を眺めることもとても楽しかった。

近代的で西洋風の店舗もたくさんあった。日本のショッピングモールと同等かそれ以上の規模を有するモールが進出しており、ユニクロや無印良品も日本の店舗と変わらぬ外観でモールの一画もしくは複数フロアを占領している。その様子を眺めて日本人として嬉しくもあり、もはや昔のインドではないと一抹の寂しさを覚えたものであるが、インドにとっては余計なお世話である。

このようなモールではインドの祝祭

日に合わせ様々なデコレーションが施されるのが常であるが、特に１１月頃の光のお祭りであるディワーリ祭の時は、インド風の色彩豊かでゴージャスなイルミネーションが至る所で輝き、自撮り大好きなインド人の撮影スポットとなる。

また、ディワーリは、インド人にとって日本のお歳暮やクリスマスのような位置付けであり、お菓子などのプレゼントをお世話になっている者同士で贈りあうことが習慣となっている。ディワーリの時は私も、「Happy Diwali」の合言葉と共に、お世話になっているアパートの大家さんや警備員さん、職場の同僚などにささやかなプレゼントを贈り、インド文化を楽しませていただいたものである。

新旧インドを楽しみつつ、インド文化に触れられたデリー滞在は、私にとって大変貴重であったことは言うまでもない。ここでお伝えさせていただいた以外にも毎日毎日エピソードには事欠かず、実はそのほとんどが人を通じた体験であったことは特筆すべきことである。インド人の手にかかると何気ない日常も一気にスパイスの効いたものになる。とても面倒くさいと感じることの多い国だけれど、人間臭くて面白い魅力に溢れる国だと思う。

３．新型コロナウイルス禍でのデリー生活

インドに限らずこのウイルスは全世界で蔓延したわけだが、個人的にはインドでこの時期を過ごせたことは大変貴重であった。２０２０年３月下旬から開始されたロックダウンは全くの急な出来事であり、近くのスーパーマーケットに食材を購入するため走ったのを覚えている。

ウイルスが蔓延し始めた当初、上述のとおりインドは抗議活動の真っただ中にあった。法的根拠のあるロックダウンの開始により、必要最低限のもの以外は外出が禁止となり、警察が強制的に抗議活動参加者を解散させた。当初、モディ首相が発表したロックダウンは３月２４日から２１日間であり、映画のような世界になったなと薄っぺらな思いを抱いたことを覚えている。仕事は在宅ワークに切り替わったものの、仕事に適した環境ではなかったため、当初は環境づくりに苦労した。テーブルも机もまるで業務用ではなく、コンセントの位置からして不便だと思った。

そのうち、マスクの未着用も罰金の対象となり、報道紙面上では多くの違反者が罰金を徴収されているとのニュースをよく目にした。日本ほどマスク着用に慣れている国はないのではないかと思う

一方、インドほどマスク着用に無頓着な国もないのではないだろうかと思っていた。元々マスクがほとんど市場に出回っていないインドでは、ロックダウン当初からマスク自体が一般的ではなく、マスクを持っていない者は口元を布で覆うという対応でしのいでいた。モディ首相自身もそれを認識していたと見え、マスクではなくインド風の布を顔周りに巻くというスタイルで度々メディアに露出していた。今では、インド風の素敵な刺繍が施されたおしゃれ布製マスクが大量に市場に出回っているが、街中ではアラビア風に口元をドゥパッターなどの布で覆っている者も多い。

社会的距離の確保が重要な予防策の一つであることは言うまでもない。店舗では一度の入店可能人数が制限され、入店を待つ人の列ももちろん社会的距離の確保が求められた。ロックダウン後、久しぶりに外出した際、インド人が社会的距離を確保していることに非常に驚いた。嫌味でも何でもなく、インドをご存知の方には理解していただけるかと思うが、インド人はパーソナルスペースが非常に狭い。列に並ぶ際は、基本的に前後に並ぶ人と密着することが普通であり、別に急いでいるわけでも何でもなく、後ろから押されることが自然である。押されなければ何だか心配になる。しかし、少なくともロックダウンが開始された当初のデリーでは、インド人も一人一人が約２mの距離を保ち列に並んでいた。私はインド人がきっちりとマスクを着用し、社会的距離を確保している姿を見て、感動と判然としない悲しみで少し涙ぐんだのを覚えている。なお、ウイルス拡大から１年以上経過した現在、上述した抗議活動や祝祭日、選挙の実施などに伴い、社会的距離はすっかり元に戻っている。

インドでも各所で体温を測るという「常識」が出来た。モールやホテルだけでなく一般の店舗に入る際には、入口でセキュリティチェックを受け、手消毒と体温測定が必須である。また、デリバリー担当者の体温を明示することも普通になった。ただし、インドでは体温計を自宅に持っていることは普通ではないだけでなく、そもそも何度が適正体温なのかという知識も広まっていなかった。そのため、モールなどに入店する場合でも形式的に測定していることがほとんどであると思う。（日本も一部そうかもしれない）

新型コロナウイルス拡大により、もちろん全世界が生活を変化させなければならない状況に置かれたが、上述した基本の予防策だけでもインド国民に与える影響は相当のものであったと思う。コロナ前、帰宅すれば当たり前に手を洗うという衛生観念が一体どの程度インドに浸透していただろうか。現在では衛生環境を保つための商品が大量に販売され、帰宅したらまず手を洗ってよね

と家族が一家の大黒柱を諭すようなコマーシャルが連日テレビを賑わしている。衛生用品が蚊などの虫よけ商品と同等の地位を得て、主力製品としてスーパーマーケットに並んでいる様は、インド史上革命とも言える様相である。「新たな習慣」がどの程度インド国民に浸透しているかは定かではないものの、基本的な衛生習慣により予防できる疾病が複数存在するインドにおいて、もしかしたら（大声では言えないが）長期的に見れば良い機会であるかもしれない。

最後に、インドでＰＣＲ検査を受検した体験を記しておきたいと思う。私は、日本のＰＣＲ検査も経験した。日本の場合、ガラス越しの部屋の中で、防護服を着た検査員がガラスに開けられた穴から手のみ差出し、メディアでもよく見る検査棒を片方の鼻の穴に差し込むという方法であった。相当鼻の奥まで差し込まれ、目に染みるツンとした痛さだったことを覚えている。インドでは、防護服を着た検査員が、屋外で私の脇に立ち検査をしてくれた。日本同様の検査棒を両方の穴に差し込んだのだが、日本で差し込まれた時よりも浅い場所でぐりぐりとこすりつけるように採取された。また、鼻だけでなく、別の検査棒で舌上の唾液も採取された。そして最後にその検査員は、「私の目の前で」防護服を脱ぎ、去って行った。検査場所は屋外であったし、検査対象者の前では防護服を着用しておくべきなどというつもりも、それが正しいとする医学的知識も私にはないが、いささか驚いたことは間違いない。

私はインドにおけるパンデミック第２波真っただ中で帰国したが、今後どのような状況になるのかはまるで見当がつかない。インドではワクチンや治療薬の前に病床数や医療用酸素、人工呼吸器を扱う人材が不足し、そして再度ロックダウン並みの制限が課されるなど苦しいニュースが流れている。悲壮感溢れる状況であることは間違いない。しかし、それでも、数は少ないとは言え街中を歩けば子供の笑い声は聞こえるし、住民らが家の軒先や屋上で身体を動かし運動不足に備えている。青空床屋は静かに営業し、牛や山羊がゆったりと歩いているのを見かける。祭日にはワッツアップというインドで広く使われるメッセージアプリを通じ、インド人の知り合いから祝いのメッセージが届く。そして民主主義の象徴たる選挙が実施されては、選挙集会が大混雑となり、パンデミック前と変わりない投票率を叩き出している。状況はどうなるかわからないが、生活を続けるしかない中で、皆それぞれに未来と周囲を思い、できることをやっている。綺麗事が空しく聞こえる現状だが、出来るだけ早くこの状況が収束し、再度大好きなインドの地を踏める日が来ることを心から願っている。

ディワーリ祭モール

マスク姿

Tali

UNIQLO

日本とインドを繋ぐ YouTuber という自分らしい生き方

インド系 YouTuber

人見眞代

ナマステ〜！インド系 YouTuber の Mayo で〜す！

ヒンディー語で日本に関する動画を作っていて、チャンネル登録者は 93 万人で〜す！

歴史ある関西日印文化協会様の特集号にて、このようなテンションの文章を寄稿させていただくのは場違いかもしれないが、常識を無視できる思い切りあったからこそ、YouTuber の私が存在する。

私は、2017 年に大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻を卒業し、その後は一度一般企業に就職し、紆余曲折を得て、現在は YouTuber を本業としている。本稿では、私が YouTuber になった経緯や、その中での体験を、私らしい文章で皆様に伝えたいと思う。

そもそも、何故私はヒンディー語を学ぶ事に決めたのか？これは、ヒンディー語専攻の学生なら一生に何千回と聞かれる質問だろう。「インドのことが大好きだから！」と答えられたら、どんなに楽だろうか。しかし、高校時代の私は、インドに関してほとんど何も知らなかった。また、将来の夢もなく、大学で何を学びたいかも分からなかった。ただ、言語を学ぶのは好きだった。ほとんどの日本人が話せない言語を話すことができたらカッコイイかなと思い、数ある言語の中からヒンディー語を選んだ。

インドについて全く知らないままヒンディー語を選んだ私だったが、大学での授業やインド留学を通じて、卒業する頃にはインドが大好きになっていた。しかし、就職活動では、すぐに私をインドに送ってくれる企業ではなく、給料の良い安定した大企業を探した。正直にいうと、留学中にインドでいろんな経験をし、「インド疲れ」を起こしていたのだ。インドで 49°の灼熱の中生き延びた経験や、家に入ってきた猿を棒を振り回して

追い返した話など、インドでの経験話は就活の面接で大いに役立った。(とある商社の面接では、面接官がカーマ・スートラについて質問したこともあった。その面接も、難なく突破した。) 結果として、世界 4 大会計事務所である PwC コンサルティング合同会社に就職できた。この会社にはインド支店がありインドでも日本の駐在員がいるため、将来的にはこの会社でインドに駐在したいという思いもあった。

しかし就職してみて気づいたのだが、若手はなかなか海外に出られない。まずはコンサルタントとしての実力を国内で磨けという至極当たり前の理由だった。平日は 21 時ごろ (たまに終電ギリギリ) まで会社で Excel をたたき、休日は、経済学部出身の同期に負けないように、勉強した。半年が過ぎた頃、しばらく見ていなかったインド映画を見たのだが、そこで自分のヒンディー語が明らかに落ちていることに驚愕した。5 年間努力して身に付けたヒンディー語をかなり忘れている事に気付き、非常に虚しかった。どうしたらヒンディー語力を維持できるか？どうしたらインド好きの人と繋がって、インド映画やインド料理などを楽しむことはできるか？そう考えた時に、YouTube で日本人にヒンディー語を教えることを思いついた。2017 年 YouTube の波が来る少し前だった。忘れているヒンディー語を思い出しながら、会社で学んだプレゼン資料作成スキルを活かし、Keynote(最初 Power Point を使おうと思ったが、デーヴァナーガリー文字が文字化けした) でヒンディー語の教材を作った。 ヒンディー語を学ぶ人はそれほど多くないため、爆発的な視聴回数は得られなかったが、少数でも一生懸命勉強している日本人の方々に励ましていただき、動画を作るのがとても楽しかった。始発電車にのり、会社の近くのカフェで、始業前にヒンディー語の教材を作った。週末に撮影をし、動画編集を独学で学び、週に一本動画を作った。

そんな中、意外なことが起きた。インド人の方々が、日本人向けに制作していた動画を見てくれるようになったのだ。そしてコメント欄で、日本人にヒンディー語を教えるのではなくインド人にヒンディー語で日本語を教えてくれと言う意見を頂いた。実は最初、このコメントをずっと無視していた。ヒンディー語で日本語を教える自信がなかったからだ。そもそも私のヒンディー語力は、しばらく使っていない間に地に落ちていた。日本人に教えるためのヒンディー語教材を作ることはできても、ペラペラとヒンディー語で日本語を教えることは無理だろうと思っていた。ただあまりにもインド人の声が大きく何度もコメントに残るものだから、日本語を教える動画も

作ってみようと、清水の舞台から飛び降りる思いで動画を撮った。一番最初に、ヒンディー語で自己紹介をする動画を作った。日本語で台本を作成し、ヒンディー語に翻訳し、それをインド人の友達に添削してもらい、丸暗記し、そのまましゃべった。ヒンディー語教師として活動をしている身で、ヒンディー語の間違いを犯すことは、非常に恥ずかしいことのように感じたからだ。こうして、新たな YouTube チャンネルで、日本語をインド人に教え始めた。インド人の視聴者はとても優しく、私の拙いヒンディー語を褒めてくれた。

インド人向けのチャンネルを始めて 3 ヶ月後、インド人が多く住む西葛西で行われるインドのお祭り「ホーリー」に参加した。その動画をアップしたのだがこれが大きな反響を呼んだ。数千人だったチャンネル登録者数が、一気に 5 万人になった。インドの人口が多いことは、誰もが知っていることだが、その時私は初めて「体感」した。5 万人が私の動画をみているのか・・・・？数が多すぎて、よくわからなかった。これがモチベーションに繋がり、一生懸命色んな所に行って動画を作った。

YouTube 動画をせっせとアップしていると、ある日、インド大使館の方からお声がかかり、政府主催の観光イベントに招待していただいた。アッサムとインパールに行き、北東インドの良さをアピールするというミッションだった。北東インドへ行くのはこれが初めてだったのだが、自然が非常に豊かで、食文化も特有で、非常に楽しかった。特に、北東インドの民族舞踊のショーは圧巻だった。この旅の様子は、日本語でも動画を制作した。「なますて MayoTV」と YouTube で検索していて、是非見ていただきたい。

この北東インドへの旅行のタイミングで私は会社を辞めることを決意した。実は収入で言うと大したことなかった。YouTube の広告費用というのは、その国の購買力に比例する。インドでの YouTube 広告単価は日本の十分の一だ。だから、チャンネル登録者数や視聴回数が多くても、思うように収入は得られない。ただし、当初からやっていた日本人向けヒンディー語レッスン YouTube のおかげで、私はオンラインのヒンディー語レッスンの生徒を集めることができた。動画作りをメインにしながらも、オンラインでヒンディー語を教えて収入を得た。とにもかくにも、いつのまにか、「ユーチューバー」という存在になっていた。

私の動画が沢山のインド人に見て頂ける理由の一つは、日本という国がイン

ドで人気があるからだと思う。インド人の多くは日本を尊敬してくれている人が多い。戦後ボロボロだった日本が急成長したこと、日本人の礼儀正しさ、日本の街並みの綺麗さなどが、よく知られているようだ。また、最近ではインドで日本アニメが盛り上がっている。日本でも大ヒットした、新海誠監督のアニメ映画「君の名は」はインドでは上映されていないものの、多くのインド人が楽しんだようだった。そのため、同じく新海誠監督の作品「天気の子」が制作された時には、インドのアニメファンが「インドでも上映してほしい」と署名活動を行い、５万人もの署名が集まった。結果として、この映画がインドでも上映されることになった。プレミア上映の際には、新海誠監督自身がインドに赴いて、インドのアニメファンと交流した。

インドで「天気の子」が上映される日、私もインドに行った。インド人が自分の手で日本のアニメを上映に導いたという歴史的な瞬間に、私も立ち会いたかった。加えて、映画上映後に後に、映画館の外でファン会も実施する事にした。言わずもがな、インドの映画館の雰囲気は日本とは少し違う。日本では映画は静かに見るのがマナーだが、インドでは、大笑いしたり、ヤジを飛ばしたり、拍手をしたりして、皆で一緒に楽しむ。今回、日本のアニメ映画がインドで上映されたわけだが、映画館の雰囲気はインド映画のそれと同じだった。日本らしいギャグでも、インド人は大声をあげて笑っていた。私はこの映画を既に日本で見ていて、インドで見るのは２回目だったのだが、周りの盛り上りにつられて、2 倍楽しめた。(後述するが、今は日本のアニメをインドに持ってくる仕事も行っている。)

「好きなことで生きていく」という言葉が、ここ３年の若者の中ではキーワードになっている。結果的に、私はこの言葉を体現する事になった。YouTube 活動を通して、インドを旅行できたり、普段は出会わないような様々な業種のインド人と友達になったり、タブラやインド舞踊にチャレンジしてみたり、とても楽しい毎日を送っている。（こう言うと、遊んでばかりのようだが、実際には１つの動画あたり１０～１５時間の編集作業があるため、机に向かっている時間の方がずっと長い。）多くの人は YouTuber のような生き方に疑問を持つ。「ずっと YouTuber として生きていけると思ってるの？」「不安定な仕事なんじゃないの？」と聞かれることがある。確かに、一生 YouTuber として生きていくことはできない。老ければ人気は落ちていくだろうし、その前に YouTube というプラットフォームが何か他の物にとって変わるかもしれない。

だが、私は食いっぱぐれることはな

いと思っている。YouTube を通して培った動画編集能力・マーケティング能力を用いて企業で働くこともできるだろうし、ヒンディー語や日本語を教えることだってできる。最近は、ヨガの免許を取得するために勉強しているので、ヨガ講師として生きていくこともできるだろう。先月からは、日本のアニメをインドに展開している会社で、フリーランンスとして週２で働いている。ヒンディー語能力とコンサル時代に培った社会人スキルを用いて、インドのアニメ市場調査やSNS の運用などの業務をしている。日本のアニメをインドに広めたい！と思っている私にとっては、非常に楽しい仕事だ。この仕事は、前職の同期の紹介であったが、前職時代から現在に至るまで、「私インド YouTuber してます！」と周りに宣伝し続けた故に巡り合った縁である。好きなことは、周りに言っておくと、後々、良いことがある。

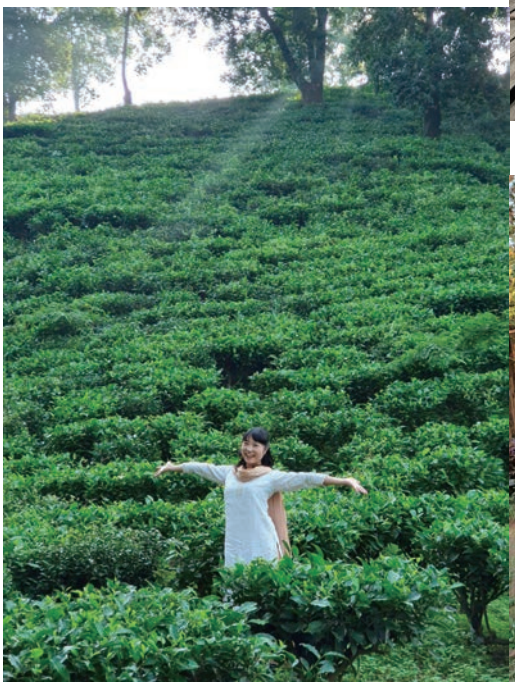
こんな具合で、何かと仕事は舞い込んできているため、当分は、将来に不安を持たず、自分の好きなことをしながら、日印の架け橋になれるような活動をするつもりだ。別に、「ボリウッド女優になってやるぞ」といったような野心があるわけではないし (もちろん、オファーが来たら間違いなく受けます！)、有名になること自体は重要ではない。自分がこれまで培ったヒンディー語を用いて、インド人のファンの皆さんに、日本に関する有益な情報やエンタメを提供し、「ありがとう」と言わることが好きだから、続けている。「マヨがきっかけで、日本に行きたくなった」とか「マヨのおかげで日本語を勉強できている」なんて嬉しい言葉をもらうと、またやる気が出る。自分が好きなことをして、感謝されながら生きていていけているのだから、幸せ者だと思う。この満足感は、前職では決して得られなかったものだ。

ヒンディー語専攻を決めたときには思いつきもしなかったが、ヒンディー語学習があってこそ、今の私がある。結局、勉強した知識が将来役に立つかどうかなんていうのは、自分次第だと実感する。私には大きい夢があるわけではないが、この先も何か面白い冒険が転がっていることを信じて、今日もインドと日本に関する面白い動画を作っていく。

撮影のためボリウッドダンスを踊っている

インドのアニメオタクとコラボ動画

マニプルの湖



アッサムのお茶畑

アッサムの村で民族衣装

私とヒンディー語

会社員・本会会員

安藤 康司

あれは私が５歳くらいの頃だったでしょうか。書籍だったか広告紙だったか忘れましたが、これまで見たことのない文字が目に飛び込んできました。洗濯物が物干竿にぶら下がったような形をした文字です。絵や記号のようでもありますが、私はすぐに「これはどこかの国の文字だ！」と認識しました。その文字の形を、とても美しく感じたことを今でも覚えています。これが私とヒンディー語との出会いです。

それから４５年後、２０１０年の初夏、あと2ケ月で私も５０歳になり半世紀を生きて来たことになりますので、四捨五入すれば１００歳です。この人生の節目を迎える前に、将来「四捨五入したらゼロ歳から続けている○○○」と言える日のために、４９歳の今、何かを始めたいと考えていました。

そんなある日、私は本屋さんで何気なく一冊のヒンディー語の絵本を手にし、少年の頃に見た文字のことを思い出しました。何か引き付けられるものを感じた私は、そのままその絵本を購入しました。「旅の指差し会話帳 ２２ インドヒンディー語（岡本良子先生著／株式会社情報センター出版局）」です。

この本には、インド旅行で使える日常会話の単語や会話が、「日本語 - ヒンディー語 - カタカナの読み仮名」で書いてあります。また、それぞれに挿絵もあって読んでいて飽きることがありません。この絵本で、子供の頃に見たあの洗濯物が物干竿にぶら下がったような文字が「デーヴァナーガリー文字」という名前の文字であることを初めて知りました。また、本の後半は、約２５００単語の日本語からヒンディー語への辞書になっていますので、「これをヒンディー語で何というのかな？どう書くのかな？」と思った時に簡単に調べられるので便利です。当時は、いつも持ち歩いて、ことある毎に調べました。こうして、私はどんどんヒンディー語の魅力にはまってゆき、もう１冊もう一冊とヒンディー語の書籍を手に入れて独学を進めていき

ました。

その頃は文法など全く分からずに単語や会話の丸暗記で、特にダジャレを作って暗記することを面白がってやっていました。当時を思い出して、少しご紹介させていただきますと・・・

ダジャレで覚えたヒンディー語１０連発

ジャガイモを食べたこと～有る？
→ジャガイモはヒンディー語でアールー
ダイコンを丸ごと飲み込むのは～無理
→ダイコンはヒンディー語でムーリー
青いニラ
→青色はヒンディー語でニーラー
緑色の原っぱ
→緑色はヒンディー語でハラー
うーんと大きなラクダ
→ラクダはヒンディー語でウーント
パンチを５回おみまいだ！
→５はヒンディー語でパンチ
犬が喰った
→犬はヒンディー語でクッター
集会をする鯖
→集会はヒンディー語でサバー
バルタン星人の食器
→食器はヒンディー語でバルタン
参考値なら躊躇してしまいます
→躊躇はヒンディー語でサンコーチ

インディアメーラー

もっともっとヒンディー語を学びたくなった私は、あるインド祭りがボランティアを募集していることを知りました。それは神戸メリケンパークで行われる「インディアメーラー」というインド祭りで、今回が初めての企画とのことです。インド料理やインド雑貨の露店が立ち並び、３日間に渡ってステージでインド関係のパフォーマンスが展開されます。ボランティアの仕事は主に会場の整理、整頓、清掃、案内なのですが、ボランティア企画としてボリウッドダンスを踊ったり、ヒンディー語の歌を歌ったりするらしいのです。この企画に参加すればヒンディー語を覚えることができるかもしれませんし、さらに深くヒンディー語を学ぶことができるかもしれません。「これだ！」と、早速ボランティア事務所の門を叩きました。２０１０年７月のことです。

ボランティア事務所は阪急中津駅の高架下にあって、通常は劇団が練習や公演をしながらカフェを営んでいるところでした。インディアメーラーでは、この劇団が本部事務局としてボランティアを取りまとめるとのことで、スタッフは全員劇団員です。私はヒンディー語の歌のチームに入り、１１月の本番当日まで、

あと４ケ月、毎週１回、劇団員のみなさんと歌の練習に取り組むことになりました。さすが劇団員さんは歌が上手でしたし、曲名は劇団オリジナルの「虹住む町へ」という歌で、歌い慣れているようでした。

私は、ほとんど毎週欠かさずに歌の練習に参加しました。しかし１０月に入り、ボリウッドダンスの練習はもう仕上げに差し掛かっているにも関わらず、ヒンディー語の歌の練習は、何か様子がオカシイのです。練習は日本語の歌詞と英語の歌詞ばかりで、ヒンディー語の歌詞の練習がありません。ヒンディー語の歌詞については歌うことはもちろん、聞くことも見ることもない練習の日々でした。

「オカシイナ？」と思い続けていたある日、その様子は劇的に好転するのです。歌の練習中に２０～３０人の若者の集団が現れました。そして、引率者と思われる７０歳位の男性が「え～、どの歌を翻訳したらいいのですか？」と、歌詞カードを受け取ると、若者達と一緒にヒンディー語に翻訳し始めたのです。「“虹の花”のヒンディー語は？」「直訳は面白くないから“七色の花”にしましょう。」「咲かせるは“キラーナー”だね。」「見せるは“ディカーナー”だね。」「では〝七色の花を咲かせて見せよう”は、最後に未来形の“エンゲー”を付けて“サトランギー　プーロン　コー　キラーカル　ディカーエンゲー”でしょうか？」・・・と、若者達も「こうしたらいい。ああしたらいい。」と手伝いながら翻訳が進んでいきました。私はヒンディー語が飛び交う中、ホワイドボードに手書きされてゆく、あの美しいデーヴァナーガリー文字を見ながら、「凄い！私もヒンディー語が話せるようになりたい。デーヴァナーガリー文字書をけるようになりたい。」と、ただ驚くばかりでした。

翻訳は１５分程で完成し、その後はホワイトボードの前でヒンディー語での大合唱となりました。ようやく私の思い描いていた練習の始まりです。若者達は、自分たちは大阪大学ヒンディー語学科の学生であり、私と同じくボランティアとしてインディアメーラーに参加すること、引率の方は溝上富雄教授というヒンディー語の著名な先生であることを教えてくれました。これが、私が溝上先生と初めてお会いした時の出来事です。

ヒンディーセミナー２０１０

インディアメーラーの準備を進めている丁度その頃、１０月に大阪大学吹田キャンパスで「ヒンディーセミナー２０１０」という催しがあり参加させていただきました。インド人、日本人を問わずヒンディー語によるヒンディー語

にまつわる話をするスピーチ大会です。１００名程の聴講者はインド人と日本人で半分半分くらいでした。

ひとりの大阪大学の先生が、ヒンディー語学習のサイトを製作し、大阪大学外国語学部ヒンディー語学科のホームページにアップした経験をスピーチされました

「かなえ」という名前の女学生がインドに留学してから帰国するまでを１２章の話にまとめたビデオです。リスニング練習もできますし、ヒンディー語の字幕もありますのでリーディング練習もできます。さらに日本語字幕や詳細な文法の説明付きです。

私が思うに、ヒンディー語に慣れるには、沢山のヒンディー語を聞くことでしょう。インターネットにはヒンディー語映画を始めとして多くのヒンディー語を勉強できるサイトはあります。しかしながら、たびたび発音が聞き取れないので悶々としてしまうので「ヒンディー語の字幕があればな〜」と思います。もしヒンディー語字幕があれば、聞き取れなくても読んで発音が分かります。またヒンディー語字幕があれば単語を辞書で調べることができますので自分で日本語訳ができます。もし、そこに日本語字幕があれば、自分の日本語訳が正しいのかも分かります。

大阪大学のサイトはヒンディー語字幕、日本語字幕、さらに文法の全てが揃っているので、学習を始めるには効率が良いと思います。興味ある方は探してみてください。

セミナーでは溝上先生とも再会し「あれ？どこかでお会いしたような？」と私のことを覚えていてくださいました。そこでご紹介いただいたのがヴィカース・スワループ在日インド総領事で、インディアメーラーの発起人です。お話によるとスワループ総領事は来日し就任直後に毎年、東京で行われているインド祭り「ナマステインディア」に感銘し、「関西でもこのようなインド祭りを開催したい」との思いで、インディアメーラ―を企画したとのことでした。

今日はヒンディー語漬けの１日でした。ヒンディー語スピーチを聞いても私は何を話しているのか、ほとんど分かりませんでしたが、丸一日ヒンディー語に浸ることができ、ヒンディー語へのあこがれに、さらに熱が入っていくのでした。

ヒンディー語教室に通う

こうして第１回インディアメーラー１１月の開催当日を迎え、３日間の来場者は１５万人と大盛況の内に終わりました。溝上先生やスワループ総領事ともお別れです。別れ際に溝上先生から「来年４月から大阪駅近くのNHK文化センターでヒンディー語教室を開講します。

あなたもヒンディー語教室で本格的に勉強してはいかがか？」とお誘いをいただきました。確かにヒンディー語を独学で勉強した半年で、独学では超えられない壁があることは痛感しておりました。(その壁については、後に記載します。これからヒンディー語を学ぼうとされている皆さんの一助となれば幸いです。)

独学の壁を感じた私は、溝上先生のヒンディー語教室に通うことを決めましたが、４月の開講まで、あと５ケ月もあるので逸る気持ちを抑えられません。そこで１～３月の３ケ月間は、阪急淡路駅の近くにある「アジア図書館」で開催されているヒンディー語教室に通い、ある程度、読み書きできるようになってから４月を迎えました。

いよいよ毎週水曜日の１９：４０～２１：１０の一時間半、大阪駅近くのＮＨＫ文化センターで溝上先生のヒンディー語教室の開講です。初心者コースは前編と後編をそれぞれ３ケ月で計６ヶ月間。「ニューエキスプレス ヒンディー語」（町田和彦先生 著／白水社）を教科書にして、文字の書き方から授業スタートとなりました。

生徒さんは、インド総領事の元通訳秘書さんや現役通訳秘書さん、インド舞踊家さんなど、蒼蒼たるメンバーです。「え？通訳秘書さんがいまさら何で教室に通うの？」と思われたかもしれませんが、インド総領事館のインド人の皆さんは英語を使っており、通訳秘書さんの仕事は英語の通訳で、ヒンディー語は話せないとのことです。またインド舞踊家さんは、インドでも活躍されているものの、使う言語は東インドのオリヤ語で、ヒンディー語は話せないとのことでした。

このインド舞踊家さんは、私の住んでいる市の隣の市にお住まいとのことでした。しかしながら住んでいる地域は、お互い向かい合う市境だったので、結局は歩いて１０分程度のご近所さんでした。最寄りの駅も同じだったので、いつも授業帰りの電車の中での復習相手となっていただきました。ご近所さんということもあり、今でもインド舞踊家さんのイベントの際はお手伝いをしています。

溝上先生の授業では時々（というか毎回）脱線しますが、もちろんインドにまつわる内容なので興味深く聞かせていただきました。

こうして６ヶ月で教科書１冊が終わり、一通りのヒンディー語を教えていただくことができました。

青空ヒンディー語教室を開く

私が溝上先生のヒンディー語教室に通い始めた頃、インディアメーラーの幹部の皆さんは第２回の開催を検討していました。その結果、開催が決まったこと

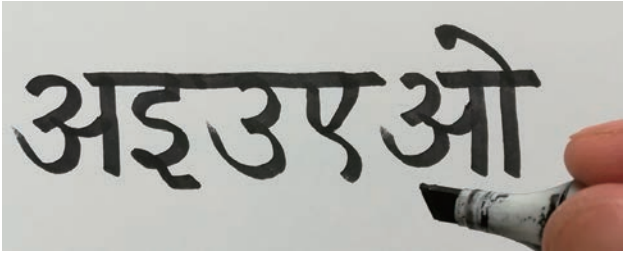
が発表され、私は今年もボランティアとして参加することにしました。そこで、これまで私が学んだヒンディー語を「青空ヒンディー語教室」という形で皆さんにお伝えする企画を考え、ボランティア事務局に申し入れたところ採用されることになりました。

内容はデーヴァナーガリー文字を実際に書いてもらうという体験教室です。まずは「あいうえお」の書き方から始めて、「あいうえお」だけでできる日本の単語「愛」「家」「上」「青」などの書き方を練習、そして「かきくけこ」「さしすせそ」の書き方に進めてゆき、最終目的は自分の名前を、デーヴァナーガリー文字で書けるようになってもらうことです。副題は「ヒンディー語で自分の名前を書いてみよう」。中津駅高架下のボランティア事務所で何回か練習しながら企画を仕上げました。

第２回インディアメーラーの当日、青空ヒンディー語教室は芝生に敷いた特大ビニルシートが参加者で一杯になるほど満席となりました。バッタ・ミシュラ領事ご夫妻に講師として飛び入り参加いただいて、実際にインド人に自分がデーヴァナーガリー文字で書いた自分の名前を読んでもえた瞬間、みなさん大喜びでした。こうして、青空ヒンディー語教室は大盛況の内に終わることができました。

当時のインド総領事とインド舞踊家とともに

「アイウエオ」をヒンディー文字で



その後、スワループ総領事は任期を終えて日本を離れましたが、インディアメーラ―は３回、４回と神戸の恒例行事として続き、一昨年の２０１９年まで第１０回を数えました。私もボランティアとして青空ヒンディー語教室を続けています。（２０２０年はコロナ禍で中止）

正確に言えば、２０１８年だけはボランティアの本業である会場の整理、整頓、清掃、案内には携わっていません。本部事務局を務めていた劇団が、次の新しいことにチャレンジするため２０１７年を最後に、インディアメーラーを離れたことを機に、私もボランティアから引退を考えました。しかし私は「インディアメーラーが続く限り、青空ヒンディー語教室は続ける。」とスワループ総領事と約束していたこともあり、新しい事務局にお願いして、２０１８年は青空ヒンディー語教室としてだけボランティア参加させていただきました。

その時に経験したエピソードなのですが、開催当日に別々の来場者から「みんなで踊るボリウッドダンスは何時からですか？」と、何度か同じ問合せが本部テントにありました。本部事務局のスタッフは、今年が初めてのインディアメーラーなので、昨年までの様子を知りません。隣のボランティアテントにいた私から「昨年まで参加していた劇団が参加していないので、みんなで踊るボリウッドタンスはありません」と回答すると、皆さん残念そうでした。中には去年の YOUTUBE を見て１年間練習してきた子供たちもいました。その年のインディアメーラーが終わって数ケ月後に、その劇団を尋ね、今回のエピソードをお話し、来年はボリウッドダンスを踊ることをお勧めしましたが、難しいとのことでした。残念ではありましたが、この話はインディアメーラーが神戸の皆さんに愛されてきたということを、心から感じたというエピソードです。

いずれにしても、インディアメーラーのボランティアを続けてきたお陰で、私にはインド関係の友人も増え、今でも良い友人として、事あるごとにホーリー際やディワリ際などインドイベントに誘っていただいています。

独学の壁

さて、先程も申しましたが、ヒンディー語の教科書を買って独学で勉強し始めると、独学では超える事のできない壁が３回訪れます。これからヒンディー語を学ぼうとしている人は参考にしてください。

独学の壁－１：有気音

まず最初に、デーヴァナーガリー文字の読み方の壁です。例えば「か」という文字で説明しますネ。正面を向いたま

ま、広げたティッシュペーパーの端を鼻頭に指で押し当てて、唇の前に垂らしてください。その状態で「か」と発音するとティッシュペーパーはほとんど揺れないハズです。これを無気音の「か」といいます。言語学的には正確な表現ではありませんが、ここでは日本語の「か」だと思ってください。しかしヒンディー語には、もうひとつ別の「か」という文字があります。「か」と発音しながら、思いっきり息を吐いてください。するとティッシュペーパーが勢いよく吹き飛ばされるように揺れますね。これが有気音という発音の「か」です。ヒンディー語には無気音と有気音それぞれに別々の文字があります。・・・ほら、文字で説明されても何が何だか分からなくなくなってきたでしょう。

さらに、ローマ字で付けられた読み仮名で躓くことになります。息を吐く発音をhの読み仮名で表現します。すなわち無気音の「か」の文字の読み仮名はkaとなり、有気音の「か」の文字の読み仮名はkhaとなります。それでは「て」ではどうでしょうか？　無気音の「て」の読み仮名はteですが、有気音の「て」の読み仮名はtheになりますね。あれ？theってどこかで見たことありませんか？そうです、英語の「ザ」ですよね。中学校の頃に「ティーエイチの発音」として習った「ザ」です。無気音や有気音の概念もない頃にtheという読み仮名に出会えば、英語の知識に引っ張られて「なるほど！ザと発音すんだ～！」と勘違いしても無理はないと思いませんか？　この勘違いをすると、その誤った理解から独学で抜け出すことが出来なってしまうのです。

「か」や「て」はここでの一例です。有気音は他にも沢山の文字があります。

独学の壁―２：反舌音

「て」の話をしたところで、「て」にまつわる、もう一つの壁についてお話します。「て」には無気音と有気音の２つがあることは、先程お話したとおりですが、「て」には反舌音（そりじたおん）という発音の文字があます。反舌音にも無気音と有気音がありますので、「て」には全部で４つの文字があるという訳です。

「て」と発音すると舌の先が上前歯の後ろに当たりますね。そのまま舌を丸めて上前歯に当たらないように「て」と発音してください。これが反舌音（そりじたおん）という発音です。・・・今、私は「舌を丸めて」と言いました。既にヒンディー語をご存知の方は「オイ！間違っているゾ。丸めるではない！反るのだ！」と思われたでしょう。また、ご存知でない方は「え！舌を反るのですか？丸めるのですか？どっちなの？」と思われたのではないでしょうか？これが独学の壁です。

確かに教科書には「舌を反る」と書いてあります。手のひらを舌に見立てましょう。手のひらを上に向けて思いっきり指を伸ばし、さらに反ってください。私は舌をこの形にすることを「舌を反る」と思って、舌をその形にしたまま、舌の先を上前歯に当たらない位置にもっていこうと頑張りしましたが、そんなの無理です～挫折しました。そして独学開始から約1年後、手のひらを上に向けて指を拳の方向に曲げる・・・舌をこの形にすることを言語を学ぶ世界では「舌を反る」ということを教えてもらいました。その瞬間、私は「え！それは舌を丸めるだろう！！！」と少々憤りを感じましたが、これが正しいのです

さらに反舌音はローマ字の読み仮名を大文字で書きます。反舌音の「て」の読み仮名は無声音ならTeですし、有声音ならばTheです。あれ、ここでもTheが出てきました。それも英文の先頭で見慣れたThe「ザ」ですね。独学では、こうして英語の知識に引きずられてTheを英語で習った「ティーエイチの発音」で「ザ」と読むことに、さらに確信を持ってしまいます。

有気音や反舌音を何とか発音できたとしても、それが正しいかどうか自分では分かりません。だから「独学では超えることのできない壁」なのです。そこで、正しく発音できる人を探して教えてもらいたくなります。インド人に友達がいればいいのですが、当時の私にはそれが叶いませんでしたし、インドレストランに行ってインド人従業員に教えてもらう・・・なんて度胸もありませんでした。

独学の壁―3：他動詞の過去形

ヒンディー語の勉強を文字から始めて、さらに教科書を読み進めていくと、単語や文の勉強に進んでゆき、ここで大きな壁に行く手を阻まれます。“他動詞の過去形”です。

日本語やヒンディー語に限らず、全ての言語には動詞があり、動詞には自動詞と他動詞があります。「歩く」「走る」「泳ぐ」など、自分一人で出来る動きを表す動詞が自動詞です。一方「～を投げる」「～を蹴る」「～をする」など、自分の他に人や物など相手がある動き（すなわち相手が無いと出来ない動き）を表す動詞が他動詞です。自動詞の場合、例えば「私は歩く」の主語は「私」であり、過去形にしても「私は歩いた」の主語は私です。同じく他動詞も、例えば「私はボールを投げる」の主語は「私」であり、過去形にすると「私はボールを投げた」となります。

さて、これをヒンディー語にすると、日本人の常識を覆す度肝を抜くようなことが起きるのです。他動詞を過去形にすると「私」は主語ではなくなり、「ボール」が主語になるのです。でも、そのヒンディー語を日本語に訳せば飽くまで

も「私はボールを投げた。」であり、「私にボールは投げられた。」ではありません。・・・どうですか？理解できないでしょう。

こんな難解な文法であってもインドでは毎日、使っていますから、当たり前過ぎて日本人が理解できる様に説明できるインド人はほとんどいないでしょう。私は私なりにどのように理解していいか考えに考えて、「インドでは自分が相手にしてしまった過去のことは、もはや自分ではどうすることもできないから、もう自分は主語にはなれないのだ。インドの考え方は深〜い！」と自分自身に言い聞かせています。

あとは、名詞は動物や生物でなくても男性名詞と女性名詞に分かれるとか、複数の文字を一つの文字にまとめた結合文字とか、ヤヤコシイ決め事がありますが、最初は違和感があるものの独学でも無理なく理解できるでしょう。

今の私とヒンディー語

２０２０年以降、インディアメーラーも、ホーリー際もディワリ際も、コロナ禍のため中止となって、ヒンディー語を使う機会が無くなってしまいました。
それまでは毎年どこかでヒンディー語の歌、例えば、坂本九の「上を向いて歩こう」、美空ひばりの「川の流れのように」、松たか子の「ありのままに」などをヒンディー語バージョンで歌って、インド人のみなさんを驚かせるのが楽しみだったのですが、今は封印状態です。次の機会には何を歌おうかナ・・・今年は東日本大震災から１０年の節目ですので、復興支援の応援歌として歌われた「花は咲く」のヒンディー語バージョンを、練習しています。コロナ禍が収束したら、またインド人のみなさんの前で歌おうと思います。

かと言って、ヒンディー語を使う機会が全く無くなった訳ではありません。インディアメーラ―で同じボランティアだった友人の紹介で、インド本土とオンラインでの繋がりができました。その友人と一緒に日本語講師ボランティアという形で、インド本土で日本語通訳を目指すインド人のみなさんとつながっています。私としても自分のヒンディー語を試す良い機会になっています。

お返しに日本人側がインド人側からヒンディー語を教わるコーナーも作ってもらいました。このコーナーには１０年前のヒンディー語教室でクラスメートだった総領事の通訳秘書さん（今は退職されて別の仕事をされていますが）も参加されています。

また、良い教材を見つけました。各国の政府が連携して進めている「持続可能な開発目標」･･･いわゆるSDG ｓです。それぞれの国の言語への翻訳がインター

ネットで公開されており、もちろんヒンディー語も日本語もあります。政府関係で仕事をされている翻訳者の翻訳なので正しい翻訳のように思います。正しい翻訳なので正しく効率よく勉強できます。例えば、日本語のページには「持続可能な開発目標」と書いてあり、ヒンディー語では「サタト　ヴィカース　ラクシャエ」と書いてありますので、「持続可能な」はサタト、「開発」はヴィカース、「目標」はラクシャエと分かります。SDG ｓは１７の目標で構成されていますが、それもまた全てヒンディー語や日本語に翻訳されていますので、今トレンドとなっている単語や文を勉強できる訳です。

これからの私とヒンディー語

今、私は会社員として、安全・衛生・環境・防災の分野のエンジニアとして仕事をしています。中でも機械の安全設計については、深い思い入れがあります。日本では国際的な安全規格が存在するにも関わらずあまり知られていないことを残念に思っています。確かに日本の工場は、すでに全ての業界で出来上がっており各地で飽和状態です。工場の中の機械も稼働を続けており、いまさら使い慣れた機械を安全に作り直すことには抵抗もあるでしょうし、手間もお金も掛かかるので難しいのかもしれません。

そう考えるとインドでは、これからでしょう。これから次々と工場が建って工業が発展してゆくのでしょう。これから造って、これから稼働する機械ならば、初めから安全に造っておくことができるように思います。そうすることでケガや死亡の災害を抑えられ、その結果、インド工業の発展に寄与するように思います。

非現実的な妄想になってしまいますが、私の持っている安全設計の知識をヒンディー語でインドにお伝え出来たら、いいな～。お伝えすることができないとしても、機械安全を教材としてヒンディー語の勉強は続けていこうと思っています。

国際ヒンディーデー

毎年１月、インド総領事館の主催で国際ヒンディー語の日という催しがあります。ヒンディー語がインドの公用語として法律に明文化されたことを記念する催しです。２０２１年はコロナ禍のためにオンライン開催となりましたが、インド総領事館の取り計らいで私のヒンディー語スピーチの時間をいただきました。今回の投稿のまとめとして最後に、その時の内容を日本語訳でご紹介させていただきます。ご完読ありがとうございました。

国際ヒンディー語の日おめでとうございます。私はヒンディー語を愛する一人の日本人です。私は幼いころから絵を描くことや物を作ることが大好きで、そんな少年の目にある日、一つの文字が飛び込んできました。それはそれはとても美しい文字でした。これが私とヒンディー語との初めての出会いです。

しかし、ほとんどの日本人は、この文字を見ると「難しい」と思って、それ以上深く知る努力をしません。これは私にとって悲しいことです。そこで私はインディアメーラーで「ヒンディー語で自分の名前を書いてみよう」という体験教室を開いています。

しかしながら、私の本職はインドともヒンディー語とも関係ありません。物を作ることの好きな私はエンジニアの道を選びました。私の仕事の中に機械の安全設計があります。

今から３６年前に大きな飛行機事故がありました。ジャンボジェット機が御巣鷹山に墜落して５２０人が亡くなったのです。原因は何だったのでしょうか？パイロットには何ら過ちはありませんでした。飛行機の一部が大気圧に耐えられず破裂したのです。これは私達エンジニアに機械を安全に設計すること、安全に造ることが如何に大切かを教えています。

被災者の一人に坂本九という名の有名な歌手がいました。４３歳の幸せな家族のお父さんでした。彼の歌った「上を向いて歩こう」という歌は、「スキヤキソング」として世界的に有名です。１９９５年の阪神淡路大震災では復興支援の応援歌として日本中で歌われました。

今日はこの歌をヒンディー語で歌います。溝上教授が翻訳しました。

♬ウーパル　コー　デークテー
♫チャレンゲー　ヨーン・・・・♬

インド万歳！ヒンディー語万歳！

ありがとうございました。

Beating Retreat Ceremony（フルドレスリハーサル）2019 の鑑賞

永田特許事務所勤務・本会会員

山本 和美

2019 年 1 月 28 日午後 5 時、私はインドのニューデリーにある Vijay Chowk（ヴィジャイ・チョウク）で行われたインド共和国記念日の祝典の 1 つである Beating Retreat Ceremony（ビーティング リトリート セレモニー）のフルドレスリハーサルを鑑賞した。この Beating Retreat 自体は、イギリスで 17 世紀に始まった伝統的な軍事儀式で、元々は兵隊が戦闘を止め、日没、撤退の合図の音で基地に戻り、旗が降納されるというもので、現在もイギリスで行われている。そして、インドでもこの軍事儀式が初めて取り入れられたのは 1952 年で、現在のような形になったのは、1961 年インド独立後に初めてエリザベス女王が、故エディンバラ公爵フィリップ殿下と共にインドを訪問することになった際、歓迎するための催しを当時のネルー首相がインド陸軍 Major Roberts 氏に依頼したことに淵源がある。

インドでの Beating Retreat Ceremony の本番は毎年、リハーサルの翌日である 1 月 29 日の夕刻、インドの大統領を主賓とし、軍の関係者を始め、首相を含む政府関係者や一般市民が参列して行われる。会場となる Vijay Chowk の周辺は、インド門や、大統領官邸、国会議事堂、首相官邸など政庁の建物が立ち並んでいる。式典ではまず、大統領が Rashtrapati Bhavan（大統領官邸）から、馬に乗ったボディガードに護衛され、車もしくは馬車に乗って Raj Path（ラージ・パス）を通って会場に入場するところから始まる。会場の前方中央には、大統領専用の席が用意され、その後ろに軍関係者、首相や閣僚たちが並び、観客席にいる大勢の市民と共に大統領を出迎える。また、会場向かって前方右手に位置する財務省と内務省があるノース・ブロックと、左手に位置する首相官邸、外務省、国防省があるサウス・ブロックのバルコニーにはそれぞれ、ラクダに乗った国境警備隊の隊員が銃を片手に並んでいる。大統領が会場に到着すると、国旗を掲揚し、インドの国歌ジャナ・ガナ・マナが演奏され、大統領が着席。大統領のボディガードは立ち去り、陸海空軍

及び警察の音楽隊 1,000 人以上が入れ替わり立ち代わり入場し、演奏を開始する。ここで演奏される曲は、インド人が作曲した曲と、西洋人が作曲した曲とが入り混じり約 30 曲近く演奏される。ちなみに、私が鑑賞した 2019 年に演奏された曲は全 27 曲で、そのうち 19 曲はインド人の音楽家の作品で、次の通りであった。

'Indian Star'（インドの星）,'Paharonki Rani'（山々の女王）,'Kumaoni Geet'（クマーオン地方の歌）,'Jai Janam Bhumi'（故郷に勝利を）,'Queen of Satpura'（サトプラの女王）, 'Marooni','Vijay'（勝　利）,'Soldier-My Valentine'（兵士は我が恋人）,'Bhupal（王様）,'Vijay Bharat'（インドの 勝利）,'Akash Ganga'（天の川）,'Gangotri'（聖地ガンゴートリー）,' Namaste India'（ナマステ・インディア）, 'Samudrika'（海）,''Jai Bharat'（インド万歳）,' Young India','Veerta Ki Misal'（勇気の例）,' Amar Senani'（不滅の司令官）,'Bhumiputra'（火星）。

他の 8 曲は西洋の音楽であった。すなわ ち、'Fanfare by Buglers','Sound Barrier', 'Emblazoned','Twilight','Alert(Post Horn Gallop), 'Space Flight''Drummers Call'and'Abide with me'. そして、有名な 愛国歌 'Sare Jahan se Accha'（全世界で一番―我がインド）で、締めくくった。（Press Information Bureau: PIB（インド政府報道・情報局）"Curtain Raiser – Beating the Retreat 2019" より抜粋。）

最近は、特に 2014 年に政権がインド国民会議派から BJP（インド人民党）になって以降、演奏される曲を「Indianisation（インド化）」したものに変更しようとする動きがある。2016 年の式典では、従来のトランペット、バグパイプやドラムなどの西洋楽器に加え、インドの古典楽器のシタール、タブラ、サントゥール、バンスリなどが初めて取り入れられ、グラミー賞受賞者でもある有名な作曲家・歌手の A.R. Rahman 版の Vande Mataram なども演奏された。今では半分以上の曲がインド人の作曲したものになっている。またこのような変更については、軍関係者の間では受け入れ難いような意見がある旨の記事を見かける。（The Print,2020 年 1 月 30 日付 "Indian popular tunes that are pushing out colonial martial music at Beating the Retreat"）明年、2022 年はインド独立 75 周年ということもあり、軍の式典で演奏される曲は、更に Indianisation が進む可能性があるかもしれないとのことだ。（The Print, 2021 年 6 月 7 日付 "New marching tunes, no more pre-1947 battle honors — armed forces set to get more 'Indian'"）

演奏される曲は毎年異なるが、最後から 2 番目に演奏される「Abide with me」という讃美歌はマハトマ・ガンディーが好きだったと言われており、毎回必ず演奏される。まもなく陽が沈もうとする頃に演奏され、曲の途中で鐘の音が鳴り響く。インド独立前の 1910 年代に建てられた歴史あ

る政庁舎を背に演奏されるこの曲と、その時の雰囲気が私は好きで、いつも楽しみにしているのだが、この曲も先述したようにインドの曲ではないとのことで、演奏曲目から外すか否かの議論の対象になっており、その議論をインド紙で見るたびにいつもハラハラする。

この「Abide with me」の演奏が終わると、ビューグルの音が鳴り、掲げられていた国旗が降ろされていく。国旗を降ろし終わった後、最後の曲となるインドの有名な愛国歌「Saare Jahan se Accha（サーレ - ・ジャハーン・セ・アッチャ -)」を音楽隊が演奏しながら、再び傾斜のある Raj Path の道を大統領官邸へ向かって行進し、去っていく。傾斜を上り、音楽隊の姿がはるか遠くになって「Saare Jahan se Accha」の演奏もストップしたその瞬間、政庁舎や大統領官邸など会場周辺の建物にライトが一斉に点灯する。そして、再び馬に乗った大統領のボディガードがカツカツという蹄の音を響かせながら会場に入場し、国家が演奏された後、大統領が退席して約 2 時間の式典は終了する。

因みに、最後のライトアップの様子は時代とともに変化しており、過去の式典の動画を Prasar Bharati Archives の YouTube（www.youtube.com/c/DDARCHIVES）で見ることができる。1980 年代は、このアーカイブで見る限り、ライトアップと同時に花火が上がっている。2000 年代に入ると花火はなくなり、ライトアップのみとなっている。このライトアップの電飾も、BJP 政権後、同党所属で現在のラーム・ナート・コーヴィンド大統領に代わって初めて迎えた2018年更に変化した。それまでは、長年、政庁舎の建物の形をかたどるように張り巡らされた何千ものオレンジ色一色の白熱電球が一斉に点灯していたが、代わってインド国旗の三色（オレンジ、白、緑）とヒンドウー教のお祭り、ホーリーを連想させるカラフルな色の LED 電飾が建物をゆっくり、そしてぼうっと照らした。残念ながら、正直これまでのものと比べると奇麗には感じられなかった。インド紙でも同様の感想がみられた。(Business Standards,2018 年 2 月 4 日付 “Beating Retreat ceremony with nationalised flavour disappoints many”)

このホーリー色のライトアップを見た時、政権が変わったことによる影響がこんなところにもでてくるのかと感じた。と同時に、過去のようなオレンジ色一色の奇麗なライトアップ（インド紙やメディアなどではよく ”dazzling light”（まばゆい光）と表現されている。）はもう見られないかもしれないと若干ショックを受けた。

私は取り分け軍事防衛に関心があってこの式典を知ったのではない。きっかけは覚えていないが、ただインドには非常に興味があり、インドについて色々調べているうちに偶然知ったのだと思う。式典は、インド国営放送 Doordarshan（ドゥールダル

シャン）の YouTube などインターネットによってライブ配信されており、日本でもネットで鑑賞することが可能である。また過去の動画（https://www.youtube.com/doordarshan/videos）も見ることができる。そして、私はここ数年、この Doordarshan によるライブ配信で式典を見ているうちに、インド現地でも見てみたいと思うようになった。しかも、年々少しずつ変化しつつある演奏内容やライトアップが大きく変わらないうちに―。

しかし、いざ現地で見るとなるとどうすればいいのか。まずは、周囲の身近なインド人の友人たちに尋ねてみたが、軍事儀式ということもあってこの式典を知る人はいなかった。大抵は、日本のニュースでも取り上げられることがあるインド共和国記念日メインの祝典で、海外の首脳をゲストとして招き、インド軍や各州のパフォーマンスが披露される大規模パレートと勘違いされるか、或いは、インド―パキスタンの国境で毎日行われている国境閉鎖式（Wagah-Attari border ceremony）のことかと聞き返された。また、式典を知っている人がいても、どうやって鑑賞することができるのかまではわからなかった。

インターネットでも調べてみることにした。この式典の参加方法について日本語の情報も見つからず、旅行サイトでこの式典を鑑賞したことがあるらしきインド人を発見したのでメールを送ってみたが、返事はなかった。更に、いろいろ調べていくうちに、大統領や首相など VIP が参列する本番は招待状がないと会場には入れないが、本番前日にフルドレスリハーサルが行われ、そのチケットが販売され、購入することで鑑賞できることがわかった。チケットは式典直前に指定された時間と場所で販売されるが、購入にはインドの身分証明が必要とのことであった。そうこうしているうちに、以前、東京のインドレストランで話したことをきっかけに知り合った在日本インド大使館に一等書記官として赴任され、現在は退職してインドに帰国されている Kripal Singh Bisht 氏より 2019 年に年始の挨拶メールをいただいた。その際、式典を鑑賞しにインド へ行くことを考えていると述べたところ、Bisht 氏はもちろんご存知で、私がインドに来るなら、式典のリハーサルチケットを手配してあげるよ、と思ってもみない大変有難い申し出を頂いた。こうして、2019 年 1 月、フルドレスリハーサルをインド現地で見ることが可能になったのである。実は、鑑賞する方法を調べているときにインド大使館の別の方にも聞く機会があり、聞いてみたのだが、複雑な手続きがいるような返答で結局どうすればいいのかわからなかった。自分自身も尋ねた時は、本番以外にリハーサルがあることは知らなかったので、今思えば、その時大使館の方は、招待状をもらって本番の日に鑑賞する方法についてお話しして下さったの

ではないかと思う。

4年振りのインド行き。出発の前日、飛行機JALの予約確認の際、手違いで座席が取れていなかったことがわかった。非常に焦ったが、何とかその場で予約し直しAIR INDIAで席を確保することができ、当初の予定通りリハーサル前日に無事インドに到着した。デリーの空港ではBisht氏が出迎えて下さり、その翌日、氏自らデリーの観光案内をして頂いた後、私を会場まで連れて行って下さった。胃腸が弱く、いつもインドで体調を崩してしまう私は、絶対にこの式典を見たかったため、リハーサルを見終わるまでは食事は最小限にしようと気をつけていた。しかし、Bisht氏から会場に向かう直前に食事をしようと言われ、会場近くの小さな食堂で食事をすることになった。そこでもあまり食べないようにしようと思っていたが、「これはどうですか？」と勧められ、断りきれず注文して下さったものを口にした。幸い体調を崩すことなく、食事を済ませ、会場に向かった。会場周辺は関係者や観客、また平日の夕方ということもあって仕事帰りの人々の往来でごった返し、車も非常に渋滞していた。そのため、途中で乗っていた車を降り、歩いて向かうことになった。氏のおかげで、スムーズに会場入り口に辿りつくことができた。リハーサルには、インドにいる私のインド人の友人も一緒に見る予定であったため、会場前で待ち合わせ。友人の分のチケットは私が持っていた。なお、このチケットの購入には先に述べた通り、インドの身分証明が必要だが、一人で購入できる枚数は2枚までと制限があり、Bisht氏はご令嬢にもご協力頂いて私たちの分を入手されたとのことであった。開演時間が迫ってきたが、友人が現れず電話をするもつながらず、連絡がとれない。しかも、Bisht氏はすでに何度も見たことがあるので、自分は会場の外で待っていると言われた。従って、友人の分のチケットは氏に託し、結局私だけが中に入ることになった。

いよいよ中に入れるとわくわくしながら、セキュリティーチェックのほうへ向かった。荷物は最小限にと聞いていたため、私は携帯電話、ハンカチ、ティッシュ、化粧ポーチだけを持って中に入った。警備の人からはチケットの提示は求められず、化粧ポーチの中身がチェックされ、目薬を見つけたとたん何も言わずに足元に捨てた。液体だから駄目だったのだろう。足元には他にもチェックでひっかかった品物が散乱していた。1つ目のセキュリティーチェックをくぐり抜け、2回目、3回目も問題なく無事通過した。最後4回目の会場目前のチェックで持っていた化粧ポーチ全部がひっかかった。ポーチを預けて中に入るのかと思いきや、預かれないと言われた。じゃあどうすればいいのかと尋ねると責任はもてないが、あそこにおいていきなさいと指さされた場所は、何の目印もないただの地

面の上であった。化粧道具も入っていたので、なくなったら翌日からはノーメークでインドを旅しなければならないと覚悟しながら、ポーチを地面の適当な場所に置いて中に入った。ちなみに携帯電話の持ち込みは全く自由で、電源もオフにする必要はなかった。

会場の座席には 20 インドルピー（約 30 円）と 50 インドルピー（約 75 円）の 2 種類がある。私の場合は、Bisht 氏が 50 インドルピーの席のチケットを用意して下さっていた。しかし指定席はなく、すべて自由席。従って、早く中に入った人から好きな席に座ることができる。私は会場正面の中央くらいにちょうど 1 つ空席を見つけたのでそこに座った。いよいよ大統領のボディガードの車列が入ってきて演奏が始まった。私は、リハーサルでも翌日の本番と全く同じ内容のパフォーマンスをしてくれることを願いながら鑑賞した。そして、実際に目の前で繰り広げられたものは、これまで画面上で見てきたものと同じであった。違ったのは、インド人の観客が周囲に座っているため、演奏中もおしゃべり好きなインド人の話し声があちらこちらから聞こえてくることだった。また、観客は座りながら音楽隊のパフォーマンスをスマートフォンで撮影しようとする人が多く、前方で座席を立つ人がいると後ろの人が注意し、注意を促された人も素直に従い腰を下ろしていた。数ある演奏の中で、先に述べた自分の好きな ”Abide with me” をマハトマ・ガンディー生誕 150 周年の年に生演奏で聞けたことは本当に感激で、忘れられないひと時となった。最後の ”Saare Jahan se Accha” の演奏とともに音楽隊が大統領官邸に向かって歩き始めると、観客もざわつき、席を立って自由に動き始めた。その場を立ち去ろうとする人もいたので、ひょっとしてリハーサルではライトアップはないのではないかと思い周囲にいるインド人に聞いてみたが、わからなかった。とりあえず、私も席を立って周辺を様子見しながら、ひとまず前方に移動しようとした時、後ろから誰かが肩をたたいた。振り返ると、さっきライトアップがあるかどうかを尋ねたインド人女性が「ライトアップはあるらしいよ」と、人をかき分けて私にわざわざ伝えてくれたのだった。それを聞き、期待しつつ最前列に移動した。現地の人々と今年はどんなライトアップになるのかとドキドキしながらその瞬間を待った。演奏が聞こえなくなり一瞬の静寂のあと、一斉に目の前の政庁舎がインド国旗の 3 色に染まり、ワーッという大きな歓声が上がった。しばらくして、建物を照らす色は、色とりどりのホーリー色に変わった。2019 年も前年同様 LED の電飾ではあったが、前年よりも美しくライトアップされ、タイミングもよかった。もちろん、画面で見るよりもはるかに素晴らしかった。

リハーサル終了後、一緒に見るはずであったインド人の友人と会場で合流するこ

とができた。友人は、結局 Bisht 氏と最後まで連絡が取れなかったのか、チケットなしで入ったとのことであった。「セキュリティーはチケットを全く確認しなかったよ」と笑顔で語っていた。また彼も初めてこの式典を見たとのことであった。終了直後は、会場内の奥まで入ることができたので、ホーリー色の電飾で照らされている政庁舎の付近まで近寄って建物を眺めたり、会場に残っていたインド海軍の人々と記念撮影をしてもらうなどして余韻を楽しむことができた。再び入口へ戻る際、セキュリティーチェックで持ち込み禁止となった化粧ポーチを置いた場所に行くと、ポーチは中身もそのまま無事であった。外でずっと待っていて下さった Bisht 氏からは、リハーサルは定刻通りに行われ、遅れてきた人はチケットを持っていても中に入れず、バリケードの向こうに 200 人くらいいたと聞いた。そして、翌日の本番をホテルのテレビで鑑賞し、リハーサルと全く同じであったことを確認しながらインドで式典を 2 回生で味わえたような気分であった。

このリハーサルを鑑賞した翌年、再びインドへ行った。経緯は省略するが、その際、在大阪神戸インド総領事館の Bharti Karla 氏のご協力のもと、Doordarshan のデリースタジオを訪問することができ、同放送局の報道記者 Sudhakar Das 氏の案内でスタジオを見学し、Beating Retreat Ceremony の放送を担当している女性アナウンサー Gouran Lal 氏にも会うことができた。Doordarshan は Beating Retreat だけでなく、インドの様々な国の公式行事をインターネットでライブ配信する。本誌発行の関西日印文化協会の会長である溝上富夫先生が 3 年前、パドマ・シュリー（蓮華勲章）の叙勲を受けられ、インドでの叙勲式に参列された様子も同放送局のライブ配信で見ることができた。日本のメディアでは取り上げられないインドの部分を知りたい人間にとっては有難いことだと思っている。従って機会があれば、一度訪れて見たかった。インドは知れば知るほど知らないことを思い知らされ、深くて複雑な国だと感じるが、それが面白いので興味は尽きない。またインドがなぜ好きなのかとよく聞かれるが、一言で表現することはできない。しいて言うなら、私にとってインドの魅力はインドの人々である。

なお、私は普通の会社員で、研究者でもない。また、このインドの式典について、正式な日本語による説明を探してみたが、見つからなかった。従って、ここで記述させて頂いたことは、自身の体験、インド紙、インド政府のウェブサイト (“knowindia” https://knowindia.gov.in/republic-day celebration/celebrations.php) や Doordarhsan の動画などの情報がもとになっていることをご了承頂きたい。

更にこの場を借りて、改めて式典の手配等をして下さった Bisht 氏を始め、Door-

darhsan との出会いの機会を作って下さった Bharti 氏、Doordarshan の方々、正月の連休明けにも関わらず、再び平日連休にリハーサルの鑑賞に送り出して下さった上、本誌への広告掲載も了承して下さった事務所の永田所長、仕事でインドが絡むと必ず私を同席させて下さる大田副所長、インドへの関心を深めるきっかけを作って下さった溝上先生に改めて心から感謝を申し上げさせて頂きたい。

最後に Gouran Lal 氏が式典の放送の中で、ライトアップした直後、過去に繰り返し述べていた下記のコメントを紹介して、本文を結ばせて頂く。（下記はご本人から頂いた原文そのままを掲載。）

“The air perfumed with sentiment and national pride.
The timeless melodies we heard, a bridge to the past.
The music embracing the moment ...
The magical moment that said ‘ Let there be light’
Let this radiance smile and illuminate the night
And in my architectural contours lies hope, outlined
For a bright and fair future for all to find”

式典開始時の光景

Beating Ceremnony のフルドレスリハーサルのチケット

式典終了後の記念写真

Doordarshan の方々と

インド総領事館での勤務を経験して

前インド総領事館通訳

武笠 千春

「大阪のインド総領事館で人を募集しているから、応募してみたら？」高校時代の恩師の紹介でお会いした、当時神戸大学で言語学を教えていらっしゃったインド人の先生に言われた一言。それから4、5か月ほど過ぎ新年を迎えしばらく経ったころ、私のもとに「面接を」という連絡が届きました。求人に応募したことも忘れかけた頃、急に来週大阪に来るようにという連絡を受け取ってからは瞬く間に話が進み、当時埼玉に住んでいた私ですが、その後ひと月ちょっとの間に3度も大阪まで行くことになりました。まぁいいか、とはるばる関西まで行き、しかもせっかくならと姫路城観光までしてから帰るような性格であったことが幸いしてか、そこから私とインドの長いお付き合いが始まりました。

2010年の4月、こうして私は急に大阪で暮らすことになりました。当時周りの友人にとって、私の行動は驚き以外のなにものでもなかったと思います。まず第一に、急に来週大阪に引っ越すという、そしてインド総領事館で働くという、みんなの顔にハテナが浮かんでいました。総領事館で働き始めたころの私は、インドについて何も知りませんでした。本当にたまたまいただいたご縁で始まった、そんな状態ではありましたが、日々の仕事を通してインドを愛する皆さんに圧倒されながらも支えていただき、とても楽しく充実した9年間を過ごすことができました。

大阪にある在大阪・神戸インド総領事館は、三重県から鹿児島県までの西日本を管轄地域にもっています。そんな総領事館の中で、私は、この関西日印文化協会の理事も務めていらっしゃった南波亘子さんの後任として、通訳兼総領事秘書として働いていました。といっても、規模としては決して大きくない総領事館で、ビザやパスポートなどの領事サービスと商務関係以外はほぼ全て任されるという、今振り返ってみてもかなり広範な業務を担当していました。そうした中で、日本におけるインドの窓口として、国の

機関や行政、経済団体や企業、大学・研究機関、文化や宗教、芸術分野などにかかわる様々な方々と一緒にお仕事をさせていただきました。日々インドにまつわる色々な分野のお話に触れ、こんなにもこの二つの国には多面的な深いつながりがあったのかと気づかされ心が震える機会が多くありました。働いていた９年の間に、４人の総領事とお仕事を一緒にさせていただき、その間お二人のインドの首相を日本でお迎えしました。日本とインドの間では、年次首脳会談が行われており、両国の首相が毎年交互にお互いの国を訪問されています。なかなか他の国や地域では考えられないペースで、お迎えする側としては大変な面もありつつ、国同士の関係としてはとても親密で特別な関係が築かれているのは非常に良いことだと思います。

なかでも、私が総領事館で働きだした頃と、後半の頃では、関西の扱いが大きく変化したと感じました。もちろん初期の頃も国際会議や視察といったインド政府関係者の来訪は頻繁にありましたし、国の大臣なども関西まで足を運ばれていました。ただそれが、ある頃から関西への訪問の数も規模も重要度も格段に大きくなり、かつ行政や関西の企業との関係構築といった、よりこの地域にフォーカスした訪問団が多くなったように感じます。現首相もすでに首脳会談時では２度関西にお越しになっています。（グジャラート州首相時代、また2019年のG20も含めると関西ご訪問歴は歴代首相最多かもしれませんね）また、現政権下では、インドの各州による外国企業に対する直接の誘致活動が奨励されたこともあり、多くの州から州首相を団長とした州政府・州内企業が一体となった官民合同の訪問団による関西企業に対するトップセールスも活発に行われるようになりました。関西の大企業はもちろん、強みである医薬品や、繊維産業、先端技術、ユニークな技術力をもつ中小企業など、この地域に対する注目が大きくなっているのが感じられました。また、ビジネス面だけではなく、地方政府間の交流もすすみ、インドの州と関西・西日本の府県との間での覚書の調印もすすみました。私が総領事館を去る時点で府県のレベルだけでも、兵庫県（グジャラート州）、和歌山県（マハーラーシュトラ州）、三重県（カルナータカ州）島根県・鳥取県（山陰として・ケーララ州）、広島県（タミルナードゥ州）、福岡県（デリー準州）が協定を結んでおり、それぞれインドの地方政府と関係を継続させていくこと、発展させていくことにおいて難しさを抱えながらも非常に粘り強く前向きに取り組まれており、日々頭が下がる思いでした。

また、政治・経済面での関係が深まるベースには、もともとのお互いに対す

る友好的な感情があると思います。インドはおなかが痛くなるから行きたくない、という方が未だに多いのも事実ですが、インドという国やインド人に対して敵対的な感情を持っている人は、あくまでも個人の感覚ですが、あまりいないように思います。インド人からみた日本や日本人にも同じことが言えると思います。また、この関西には神戸港開港の時代から住むインド人のコミュニティメンバーがおり、神戸・関西をホームと呼ぶ人懐こい温かい人たちです。お仕事ではもちろん、それ以外でも飲みに誘ってもらったりヨガを教わったり、たくさんかわいがっていただきました。

インドというと文化も人も日本とは全く異なる国と思われる方も多いのですが、意外と感覚や価値観など近い部分が多いと思います。その一方で、日常的にインド人と時間を過ごす中で、違いがおもしろいなと思うことも多くありました。例えば、一緒に働く前は、なんとなく勝手に大雑把なイメージを持っていたのですが（すみません）、実は日本人以上に細かい人が多く驚きました。それに自分のする仕事と自分がしない仕事の区別がはっきりしているなとも思います。また、ランチの時間は大切で、日本的に今日は仕事が忙しいから、とランチ時間を削るなんてことは論外です。何か急な頼まれごとがあってもご飯中だったら、出直すねとあっさり引き返します。それから、日本人以上に家族や体の健康面などに対してすごく気を使う印象もあります。総領事館で働き始めて少し経ったころ、初めて仕事を休むくらい体調を崩した時があったのですが、お休みの連絡を入れたところ、なんだかとても心配してくれたようで、わざわざ総領事が病院に行きなさいとドライバーさんを家まで送ってくれたことがありました。さらに、必要なものがあれば彼に買い出しに行ってもらうよう頼んだからメモを渡しなさい、とすごく親切にしてくれて驚きました。家族が病気になった時なども、やはり同僚のインド人が心底一緒に心配してくれました。そういうところは本当に情が深い人たちだなぁと思います。

そんな憎めないインドを愛する人たちは、やっぱり人懐っこい人が多く、インド人にも負けない魅力的な日本人たちとも、このお仕事では本当にたくさん関わるご縁をいただきました。とにかく突然物事が動き出すインドなので、関わった方々にはむしろかけたご迷惑の方が多いかもしれませんが、根気強く柔軟にお付き合いいただき本当に感謝しています。この「根気強さ」と「柔軟さ」は私自身９年間で鍛えられたなと思います。働き始めた当初は、日本とインドの間に入っても、どうしても日本人の感覚の立場から物事を考えてしまうことが多く、どっちの味方なのだと怒られることもありました。もしかしたら最後まで 100%

インドの味方にはなれていなかったかもしれませんが、インドの主張を伝える役割として意識を持つようになってからは、まずはインド側の意見を伝えて（それがたまに本当にびっくりするような意見だったりしましたが）、その後日本の慣習やルールや色々な事情を考慮してお互いに納得できる着地点を見つけることを心がけました。というか、インド人はとりあえず無理っぽいことも言ってみる、という傾向があるように思います。その意見が通ったらラッキー、ダメなら違うアイディアをまた提案するという。こうしたやりとりをしていると、実は突発の事態にも対応する瞬発力やプランＡがダメなら、Ｂ、Ｃ、Ｄと次々と考え出していく柔軟さと創造力はインドの強みで、日本も学ぶべきところだと感じます。

ただ、その力業ともいえる対応力があるが故なのか、まさに「終わりよければすべてよし」ということが多くありました。ある週末、すっかり仕事用と化した私の個人携帯に仕事の電話がかかってきました。それ自体は珍しいことではなく、また、「お好み焼き屋に来てるんだけど、今日はお肉食べないからベジにしてって店員に伝えて」とかかなと思いながらため息混じりに出ました。すると総領事が、これから京都にホテルを探しに行くから一緒に来るようにというのです。意味がわからない、ホテルなら月曜日に電話すれば良いのでは？というか、なぜホテルの部屋を探すのに現地に乗り込むのか。インド流？と悶々としながらも、家まで迎えに来るというので、週末なのに、と納得しきれないまま仕方なく支度を整えました。

まさか総領事がアポ取りなどしているはずもないので、京都までの車中で、とりあえずいくつかのホテルに電話をしました。お付き合いのある宿泊担当窓口は週末のせいか直通電話が繋がらなかったりで、フロントから繋いでもらったり、お休みなら誰か別の方に対応を、とそんなことをしているうちにあっという間に京都に着きました。

ホテルの方はもちろん英語ができるのですが、それでも大事な話だから通訳するようにとの要望だったので、ふむふむと聞きながら訳していく。すると来週首相が京都に来ることになったというのです。ホテルの人と同じようにビックリする私。それを先に言ってほしかった！そして、とりあえず細かいところはわからないが、来週から 100 部屋程、それに宴会場や会議室などなどほぼホテル丸ごと借り切るようなこれまた驚きの条件を並べていきました。来週、しかも常に満室状態の京都のホテルでそれはまたかなり無理なお願いをすることになったなと、内心胃が痛くなる思いでした。ただホテルにとっても一国の首相、しかもつい先日選挙で大勝利をおさめて世界中から注目を集める話題のモディ首相をお迎

えできるとなっては大ごとで、なんとかしてくれようとはしましたが、既に入っているお客さんを追い出すわけにもいかず、あるいはスイートルームの数が足りない、などその日はホテルをいくつかまわることになりました。そんな中一軒のホテルが何とかしますと言ってくれたのです。本当に奇跡だと思います。

それからは怒涛の毎日で、とにかく全てが終わった時にはへとへとでした。それまでも前任のマンモハン・シン首相が東京へいらっしゃる際には、サポート要員として東京へ行っていたので、首相の訪問がどのようなものか、というのは目にしていましたが、大阪で首相の訪問団を迎えるなんて初めての経験です。その前にインドの首相が大阪にいらっしゃったのは 2001 年と聞いていたので、なんとなく日本には 1 年おきにくるけれど、関西には来ないのだろうなと思っていました。

首相が来るとなると、まずは受け入れ国との調整のため儀典室の先遣隊が来日します。セキュリティチームも空港、移動ルート、会談会場などなど首相の導線を全てチェックして地元警察との入念な打ち合わせをするためやってきます。東京への訪問は隔年で決定事項のため下準備はすべて整っていたようですが、急遽関西が日程に組み込まれたため（しかも関西から日程スタートでさらに時間がない)、日本の外務省もインドの外務省も急ピッチで準備にあたりました。専属医がきて指定の病院の下見とドクターに挨拶、専用の救急車まで手配します (民間の救急車貸出しサービスがあるなんて驚きました)。その他にも訪問先や会談相手、宿泊先やハイヤー会社との調整はもちろん、税関からケータリング、ギフト等々まで、非常に多くのことをわからないままとにかくあちこち走り回った 1 週間でした。もうやりたくない、と心底思いましたがまた 2 年後にまさかの機会が訪れ、その時はさすがに 1 週間前に決まるなんてサプライズはありませんでしたが、準備期間があったらあったでやっぱり大変で、結局肝心な物事は直前に決まるので終わればぐったりに変わりありませんでした。

それでも貴重な経験であったのはもちろんで、例えば首相の車列の車の一台に同乗させてもらい、専用機が待つ関西空港まで移動するなんてもう一生経験しないことでしょう。高速を走る車列のスピードを落とすことなく、県境で兵庫県警から大阪府警へ見事に警備を交代する様子など疲れが吹き飛びました。あぁ、終わると車中でほっとしたのも束の間、訪問団に貸出したレンタル携帯を回収できてない！という電話が入り、結局空港について走り回るはめに。やっぱりもうこれが最後でいいや、と心から思いました。

たくさん大変な思いもしつつ、充実

した９年間を過ごしてきましたが、そもそも私自身プロの通訳としての経験も技術もなく、正直言葉の面では力不足なことも多くあり、通訳の仕事は本当に苦労しました。危機感から働き始めてから通訳学校に通ったほどです。特に最初の総領事にはその点で本当に感謝をしています。外交官としてだけでなく、作家としての顔もお持ちだった当時の総領事は日本でも有名な方で、さらにご本人の人柄もあり、西日本各地の様々なところから講演依頼がきていました。結果、私も通訳の機会が増え、経験の場をたくさん与えていただきました。しかもその方のお話は聞いていて本当におもしろい。なので、なんとかこのメッセージを聞いている人に伝えたい、わかってもらいたいと思い、話し方や表現などどうしたら聞きやすいだろうということを常々考えていました。プロの通訳者のように完全に正確な通訳はできないかもしれないけれど、メッセージが伝わる聞きやすい通訳をしようと思い、その後ずっと心がけるきっかけとなったのはその総領事と一緒にお仕事をさせていただいたからです。

また、歴代の総領事についてまわったおかげで、様々な分野の方々にお会いする機会に恵まれ、たくさんインドについての話を聞き、調べ、経験したことでその後の仕事に生かされたことはもちろん、インドに対する興味や愛着もどんどん大きくなっていきました。私にとってのインドの魅力は、その多様性です。Unity in Diversity という言葉がありますが、広大な国土に全く違う民族や言葉や文化が存在し、それぞれのアイデンティティを大切にしつつ「インド人」としての誇りももっているところはすごいなぁと心から思います。そして、仕事を通して、そんな不思議な魅力あふれるインドと日本との関係発展に、間接的にでも関われていることが何よりもやりがいと感じるようになっていきました。

関西もインドも、どちらも私にとっては異国の地でした。でもそのどちらも今では大好きと言えるのは、両方に共通する、なんでもこいという寛容さ、人懐こさに触れてきたからかもしれません。仕事の付き合いを超えて、仕事を辞めた今でも一緒にインドに旅行に行ったり、ヒンディー語を教えてもらったり、近況を報告してくれたり、ご飯に誘ってもらったり、日本人インド人関わらずそんな親しい友人がにたくさんできました。これからも関西とインドは私にとって特別な存在であり続けます。

モディ首相のお見送り時に、関空で政府専用機の前で撮影

共和国記念日レセプションにて（現大使が大阪にいらっしゃった際に通訳しているところ）

神戸のインディアメーラー

通訳風景（ボリウッド映画プロモーションのインタビュー）

総領事館前で撮ったもの（総領事館勤務最終日に記念撮影したものです）

国際ヨーガ DAY

帰任前のスワループ総領事と

YouTube でインド文化を 紹介しています

インド大使館 公式チャンネル

在大阪・神戸インド総領事館
公式チャンネル

是非ご覧ください！

Yoga；My way of life

Abundance Yoga Life Coach,
a member of Kansai Japan-India Cultural Society
Purvi Jhaveri

“My mind, body and soul...Long for more...More celebrations...More life...More connection...”

Born in Mumbai, India and raised in Kobe, Japan. I have been walking the path of yoga past 20 years. A cordial member of International Yoga Day and many other cultural activities all over Japan. From International Yoga Day to India Mela, I am an active member of the organizing committee and we were fortunate to perform on stage for and along with 1000s of people.

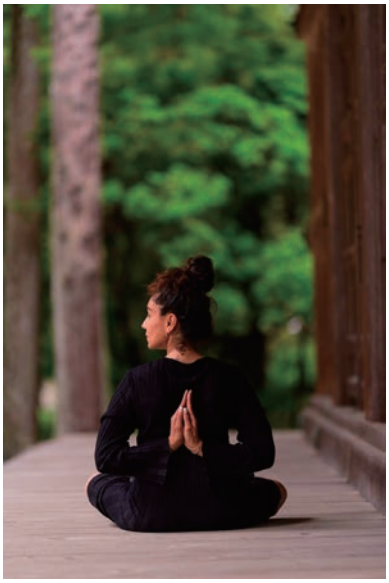
From my own experiences, I have learnt the importance and healing benefits of Yoga and Meditation. I wasn’t as healthy as I look right now, I was asthmatic and had ulcers. But by the grace of my yoga neeti, I was able to overcome the health issues. I practice and live yoga every day and now I want to offer the gift that transformed my life to others at Abundance Wellness Home.

There are many paths that lead to realization and awareness of oneself but the one for me was Yoga. My path of individualism was through breath, movement and meditation. I have overcome many of my fears. Studied, trained and received guidance in various spiritual and physical forms from India, Japan and Bali for over 20 years.

I believe, that yoga is for everyone and all of us has a body that can be moved in some manner, a mind that can be calmed to some extent and a spirit that can be encouraged. Wellness regime at Abundance is an art rather than a fitness program, a war to develop and refine oneself as a complete being. It is a path to discover the power that exists within you, a way of encouraging,

enlightening and promoting harmony in your own mind and body. I encourage freedom and expression here in japan as I believe there is a lot of freedom and liberation just in the movement. The purpose of life is to build dynamic energy and then learn how to be still with that energy too. I hope to expand my energy and offer my skills and techniques not only to this country but for people all around the world.

ABUNDANCE is all about making one feel abundant with what the universe has to offer. Here we offer an array of courses which are designed to recharge your energy, rejuvenate your body and mind and leave you feeling inspired, refreshed and peaceful. Be it Yoga, Mindfulness, Detox and Immunity Building, Bollywood Dance, a Lifestyle anything you are in mood for, we've got you covered. Here, you will move vigorously yet at your own pace, whether you are a beginner or an experienced yogi, young or old. I encourage every student to embrace their own beautifully unique expression of the practice in a safe and effective way.



福岡インド友好協会とは

福岡インド友好協会　会長

クマール・ダルメンドラ

福岡インド協会（IFA：Fukuoka India Friendship Association） は、2015年に設立した在福岡インド人が構成する非営利団体です。社会人および学生からなる30名ほどが中核となり、活動ごとに声をかけあい集まっております。私が来日した時、福岡にはインド人の組織だったコミュニティがありませんでした。福岡インド友好協会は、インド人がグループとして日本人と交流できる場を作ると同時に、インド人同士が日常においてスムーズにサポートしあえる場ともなっております。

地域住民との交流

団体の活動は日印友好および相互理解を目的とし、その活動は多岐にわたります。インドのイベント「ナマステ福岡」の主催、カレー教室の開催、地域の祭りへの参加、福岡市が開催する外国語教室でのヒンディ語講師、日本人を招待してのディワーリー開催など、多くの活動を通じて地域住民と交流しております。

ナマステ福岡

2016年より九州地域では最大規模となるインドのイベント「ナマステ福岡」を開催しております。このイベントは来日してからずっと抱いていた私の夢でした。各方面からのご協力を得て実現できたことを心から感謝しております。ボランティアスタッフはインド人と日本人から構成されており、年々参加者も増え、2019年には両国あわせて80名ほどのスタッフが従事いたしました。ステージはヨガやインド伝統芸能などの多彩な演目で構成され、福岡だけでなく全国から出店される飲食や雑貨の販売が好評を得ております。初回の2016年は一日のみの開催でしたが、2017年は外務省より日印友好交流年記念事業の認定を頂き、開催期間を二日間に延長しまし

た。続く 2018 年は在大阪・神戸インド総領事館より共催のご承諾を頂き、時間を一時間延長して開催いたしました。そして 2019 年は分別をしっかりと行うゴミブースを設置し、環境にも配慮した運営に高い評価を頂いております。2020 年は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で残念ながら開催を中止しましたが、2021 年は新たな試みとしてオンラインイベントを行いました。１日のみ２時間半の開催ではありましたが、観光案内、伝統芸能の披露、ヨガ講座、ヘナアートとサリーの着付け実演、インド在住日本人のトークコーナーなどを、インターネットを介して遠方の方々にもご覧いただけたことは大きな収穫となりました。「ナマステ福岡」は毎年４月、福岡市中心部にある天神中央公園にて開催して参りました。2022 年の春には再び、屋外会場にて開催できることを切に願っております。

ボランティア活動

近年は九州地域でも大きな災害が続いており、2016 年熊本地震の際はカレーの炊き出し、2018 年九州北部豪雨の際は瓦礫撤去作業を行いました。ボランティア作業に貢献できたことや、日本の災害対応を目の当たりにしたことは、私共にとっても大きな経験となっております。

インド政府観光局セミナー

九州地域、わけても福岡市は「アジアの玄関口」としてアジア地域との交流が深いエリアです。住民のインドへの関心が高いことも実感していることから、インド政府観光局によるセミナーを開催いたしました。　参加者からはご好評を頂き、旅先としてのインドを紹介できたことを嬉しく思っております。

[Ｎａｍａｓｔｅ　Ｊａｐａｎ　Ｆｅｓｔ]

福岡県はデリー準州と友好提携を結んでいます。かねてから福岡県のご後援もいただきインドを紹介するイベント「ナマステ福岡」を開催しておりましたが、2019 年２月デリーにおいても日本を紹介するイベント「Namaste Japan Fest」を開催いたしました。福岡に住み、九州各県に足を運び、この地域の良さを実感しているのですが、インドにおける知名度は高いとは言い難く、ぜひとも紹介をしたいと考えておりました。 多くの方々のご協力のおかげで開催が実現したことを大変嬉しく思っております。今後への課題も多く得ましたので、ひとつひとつ取り組みながらインドで日本を紹介する活動も充実させていきたいと考えております。

感染症対応の支援

2020 年に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、今もなおインドに甚大な被害をもたらしています。帰国がままならない中、現地から情報を入手し、日本からできる支援を考えました。これまでのところ、現地行政機関からの依頼で人工呼吸器を送ることのできる会社を仲介したり、緊急支援を行うべく寄付を募り、デリー州とウッタルプラデーシュ州の警察への N95 マスク送付およびデリー地域の生活困窮者への食材配布という形で支援を行うことができました。多くの日本の方々が関心を寄せてくださったことに感謝しております。引き続き可能な範囲で支援を行っていきたいと考えております。

これからの福岡インド友好協会

福岡インド友好協会はまだ若い団体です。しかしながら、振り返ってみると多くの在日インド人、そして協力をしてくださる日本人の皆さんのおかげで、様々な活動を行うことができました。これからも在日インド人の相互サポートを支えながら、多くの日本人の皆さんと交流をし、双方の国をつなげる活動を活発化させていきたいと考えております。世界では今も感染症との闘いが続いています。一刻もはやく安寧が訪れることを強く願いながら、私共ができることをやってきたいと思っております。今後とも福岡インド友好協会をどうぞよろしくお願いいたします。

LIXIL
ナマステ福岡2019

ナマステ福岡

MITSUBISHI ELECTRIC
11:33
中継 今熱い！福岡でインドイベント
LIVE ナマステ福岡2019 天神中央公園

タミルナードゥ州の地方都市での日本語教育の発展

日本語指導教師・コンサルタント

アショーク・シャンカル

南インドのタミルナードゥ州のカルールという小さな町で、日本語教育を通じて青年たちが日本で働くことや留学することに興味を持ってもらうように努力しています。自分が経験した素晴らしい日本を、この地域の青年にも体験してもらうようにすることが目的です。私はアンナ大学で電気と通信工学を勉強して、2002年12月インドの大手ソフトウェア会社ウィプロにシステム・エンジニアＳＥとして入社しました。2005年２月から４月まで会社から機会を頂き、偶然日本語を勉強しました。毎日午前９時から午後５時まで日本語の授業がありました。授業の前は日本について何も知りませんでしたが、日本語の勉強を始めてすぐに好きになりました。日本の文化、有名な場所やお祭りなどについてテンドゥルカル美智子先生に教えて頂き、日本について非常に興味が湧き、日本に行きたくなりました。やっと2005年10月８日来日して京都、京阪奈にあるオムロン研究所でブリッジＳＥとしてウィプロが実施していた複数の案件を管理するようになり、大変嬉しかったです。３ヶ月しか日本語を勉強しなかったのに日本語が話せるようになったことを見て、一緒に働いていた日本人の皆さんが驚きました。初日から会社や店などで日本人と話す時、分からない単語が出たら手帳に記入し、毎晩辞書で調べて学習しました。朝と晩はテレビで「はなまるマーケット」､「セーラー服と機関銃」など日本のテレビ番組やドラマを見て新しい言葉をたくさん習いました。週末は１週間で勉強した単語を必ず復習して、暗記できるように練習しました。多くの日本人の友人にも恵まれ、一緒に旅行したり、遊んだりしていて、日本語を使える機会が更に増えました。日本のビジネスマナーや日本人のお客様と取引する時の注意点などはマネージャの西山さんに詳しく教えて頂き、当時習った秘訣は今も役に立っています。日本語で正式なメールを書く時や日本のお客様向けにプレゼン資料などを作る時、同僚と友人の中小路さんに大変お世話になり、書き方、立

場、言葉のチョイスなどを指導して頂き、自然なコミュニケーションができるようになりました。来日した時、ブリッジＳＥだった私が営業部に移り、ホンダ製作所、富士通、沖電気、ソニネットワーク、ニコンなどの日本の有名なメーカーと取引をし、ビジネスの面でも経験を積んできました。

SSV 学校

2008 年 10 月帰国して以来、2009 年に故郷のカルールで私立学校 SRISANKARA VIDYALAYA・SSV を設立して経営してきました。当時 156 名の生徒から小学校としてスタートしたが、2021 年現在、高校を持つまでになりました。地域トップレベルの学校になり、2200 名の生徒が在席し、300 名のスタッフが働いています。帰国してから自分の日本語能力を生かして日本とビジネスをしたかったのですが、なかなかチャンスがなく、悔しかったです。更に偶然ですが、2016 年 1 月、故郷カルールにある M. KUMARASAMY COLLEGE OF ENGINEERING 工科大学の生徒に日本語を教える事になりました。SRI SANKARA JAPANESE LANGUAGE TRAINING AND CONSULTANCY・SSJLTC を設立して 29 名の生徒に 10 ヶ月日本語を教えました。

2016 年 10 月には 8 年ぶりに家族で日本旅行ができ、大変嬉しかったです。その時は静岡大学を訪問し、日本語を勉強すると ABP プログラムで静岡大学に進学できる事が分かりました。2016 年 11 月から弊校の高校生にも日本語を教え始めて、16 名の生徒が集まりました。高校生と共に将来の日本語の教師を育成する目的で、ヒンディー語の先生のジェヤンティさんも日本語の授業に参加するようにしました。高校で日本語を教えることを発表したところ、校長先生始め、教員、生徒の両親は余り興味がなくて非常に苦労しました。

2016 年 12 月の日本語能力 5 級試験には大学生 29 名が受験をし、8 名が合格しました。それらの学生は日本語能力が認められ、インドの大手ＩＴ会社タタ・コンサルタンシー・サービシス TCS に採用されました。日本語を勉強することによって就職ができるので、翌年の 2017 年は 66 名の大学生が日本語の授業に申し込みました。私が趣味として始めた日本語教育は本格的な事業になり始めました。2017 年 7 月、TCS 社に採用された学生のうち、

トップの二人、マニくんとジョンくんを私と一緒に日本語を教えるように招待しました。二人とも喜んで参加をしてくれ、毎日朝９時半から夕方４時まで上級の日本語を勉強し、４時半から６時まで大学で日本語を教えるようになりました。大学の授業が終わってからは、私と一緒に上級の会話や不明点を相談し、徐々に日本語力をアップしてきました。二人は朝から晩まで日本語だけでコミュニケーションし、日本語は流暢になりつつありました。それに加えて、日本語を教える方法を工夫し、ロールプレイ、クイズ、グループ活動、会話の練習など、日本語を楽しく勉強するように授業計画を作成してもらいました。

2018 年２月には静岡大学の ABP 説明会に招待され、SSV 学校の校長先生と副校長先生の３人で来日し、説明会に参加し、静岡大学と ABP の大学と大学院のプログラムについて詳しく理解をしました。当年 MKCE 大学卒業生のガウリプリヤさんは ABP マスタープログラムへの進学が決まりました。2018 年８月には、日本語教師をしていたマニくんとジョンくんが日本企業に採用され、来日することになりました。2018 年は、生徒の３名が来日できるようになり、とても嬉しく思いました。その結果、日本語を勉強すれば日本で就職か留学ができる、とのことは故郷のカルールでよく知られるようになりました。そしてマニくん、ジョンくんの後任として、2018 年の卒業生の５名が、日本語教師として当校に入りました。日本語を教えながら日本語能力が上がれば、日本で就職できると言う前提です。大学では 2017 年に 66 名だった日本語学習者数は、2018 年には 177 名になり、高校でも中学生 15 名が日本語の勉強を始めましたので、２年間で約 300 名が日本語を勉強することになり、日本語教育は有名になりました。2018 年、生徒が入社した日本企業から、日本語ができる新卒エンジニアを採用したいので、育成をしてほしいという依頼を受けました。毎年約 100 名を採用したいとのことだったので、近所の大学にアプローチをしました。日本では、日本語ができるインド人エンジニアのニーズが高いので、日本語を勉強すれば、日本で働く機会があると発表をし、日本語学習者を募集しました。その結果、コインバトールにある Kumaraguru College of Technology・KCT が興味を示したので、日本語教師を KCT に派遣することになり、2018 年 10 月から授業をスタートしました。KCT でも約 30 名が日本語の勉強を始め、カルールの隣の町でも日本語教育を展開しました。SSJLTC で日本語を勉強すれば、自然な日本語が話せるようになると共に、日本での就職又は留学ができるように指導されると言うことがよく知られ、生徒がますます日本語に興味を持ちました。

2019 年には大学生、高校生、中学生、

大学卒業生合わせて 500 名以上が日本語を勉強することになり、カルール周辺では日本語学習者が増加しました。それに加え、2019 年の 1 月から地元の芸術大学卒業生 8 名を選んで日本語を教えて、日本語教師の育成を始めました。コインバトールにある SRI ESHWAR COLLEGE OF ENGINEERING でも日本語授業を開始することになりました。この地域で発展している日本語教育を国際交流基金の有末先生に説明し、日本語能力試験・JLPT を実施したいと意思表明をしました。実施は個人ではなく教師会の方が良いと指導され、2019 年 3 月には、この地域の日本語教師を集め、南タミルナードゥ日本語教師会（JAPANESE LANGUAGE TEACHERS ASSOCIATION・JALTRA）を設立しました。Vimala Solomon 先生は副会長を、Kumar Palanisamy 先生は幹事及び会計を、私は会長を務めております。JLPT を実施することで、5 月から在チェンナイ総領事館と共に準備を始めました。

日本工業大学で弊校の生徒と大学生間の国際交流

日本工業大学の学長先生との集合写真

2019 年 6 月日本の科学技術振興機構・JST が提供している「さくらサイエンスプラン・SSP」を活用し、SSV の高校生 10 名が 1 週間、埼玉県宮代町にある日本工業大学を訪問しました。大学の石井様と鈴木様は出迎えから見送りまでずっと一緒に面倒を見てくださり、大変お世話になりました。画像処理、バーチャルリアリティ VR、ロボット設計、人工知能、機械設計・製造、材料科学、ナノテクノロジなど、幅広い分野での授業を受け、技術的な知識を高めました。筑波スペースセンターを訪問し、宇宙についても学びました。東京都庁ビルを訪問し、東京の煌びやかな街並みを観光しました。生徒は全員、少し日本語が話せましたので、インドの伝統的な歌や踊り、ヨガなどを演出し、大学の教員やスタッフと親しくなり、楽しみました。参加した学生には、一生忘れられない素晴らしい経験になりました。このプログラムに参加したことにより、日本へ留学したいという興味を持つようになりました。

2019年7月27日、カルールで「日本文化祭・Japan Cultural Fest」を行いました。在チェンナイ総領事館に依頼され、日本外務省の支援により実施することができました。このプログラムはカルールの町長、日本と取引している現地企業の経営者、学校や大学の理事長、大学生、高校生、会社員、経営者などを含めて2000名以上の来客で大成功でした。国際交流基金の南インドアドバイザーの有末先生がカルール、イロード、マドライ、セーラムで日本語学習者が増加していることはとても良いことなので、地方で日本語教育や日本の文化の展開に当たり、全力でサポートするとおっしゃいました。折り紙、水引、粘土の手作り、着物コーナーなどの作品が展示され、専門家による作り方のセッションもあり、参加した学生は日本の文化を味わい、楽しみました。カルールや近所の方にとっては、この日本文化祭は初めての経験で、これにより、日本の文化や日本語についての意識が高まりました。

カルールで「日本文化祭・Japan Cultural Fest」出展者と日本語学校の教師、生徒の集合写真

2019年12月には、日本語教師会・JALTRA主催により、セーラムで日本語能力試験を実施しました。856人が受験し、スムーズに行われました。インドの中では8番目のJLPT受験センターとなり、受験生の好評を得ました。セーラムよりもカルールの受験生や試験監督の数が多かったのと、位置的にも便利だったので2020年から日本語能力試験はカルールで実施することになりました。

当校の生徒を採用した日本企業数社は、彼らの日本語力、姿勢などを高く評価し、日本で働くインド人エンジニアを多く育成するようにと発注されました。エンジニア資格、日本語能力3級、そして技術力を持っている人材が求められました。機械、電気、電子、制御などの分野の新卒エンジニアも採用可能になりました。機械設計、システム開発での経験を2年以上持っている中途のエンジニアは人気が高く、積極的な採用が進みました。弊社紹介により、2020年3月までには85名のエンジニアが来日し、札幌から九州まで様々な場所にあるトップクラスの企業で勤めています。お客様からの評判も高く、人材育成事業は順調に進んでいましたが、新型コロナ感染拡大によって4月以降は採用も中止になり、非常に困難な状況になってしまいました。在留資格が降りたので、4月、5月入社予定のエンジニア25名はインドの仕事も退職し、渡航できる日を待つことになりました。しか

し、日本とインド両国共に、コロナの感染が収まりそうになかったので、7月時点で内定が取り消しになり、大変なことになりました。インドに残っていたエンジニアを救うため、日本のお客様からシステム開発のプロジェクトを受け、新たな事業を立ち上げました。将来の計画としては、大学卒業後、弊社のシステム開発プロジェクトに取り組み、開発経験と技術的な知識を獲得すると共に、日本語オンリーの職場で作業することにより、日本企業で働くためのスキルを身に付けることです。このモデルは魅力的な事業のため、数社がプロジェクトを発注し、エンジニアの育成を求めました。

2020年5月、SSV校のシュウェタさんの東大への進学が決まり、インドのCentral Board of Secondary Education の共通卒業試験を受ける諸高校の中から最初に東京大学に留学する高校生となりました。シュウェタさんの功績はインドのメディア・新聞、雑誌やテレビに記事として取り上げられました。同じ地域で日本語勉強を始める中学生と高校生がさらに増えましたが、コロナ感染拡大により、日本語の授業は全てオンラインで行うことになり、さらに可能性が広がりました。教室での授業の時は欠席が多く、遅刻していた生徒も、オンラインは便利だと、熱心に出席するようになりました。学校の授業の上に、日本語も勉強をしたことにより、長時間画面を見たため、目の疲れや様々な課題が出ました。それらの課題を解決し、さらにオンラインでも面白く教えることにより、生徒が楽しく勉強できる授業を計画しました。

2020年12月6日、カルールで日本語能力試験を実施しました。コロナ禍の中、インドでは唯一カルールだけがJLPTを実施しました。そのため、インド全国で日本語学習や国際交流基金においてカルールとJALTRAが有名になりました。コロナ禍での実施では感染対策に力を入れたため、国際交流基金の本部から高い評価を得ることができました。12月の下旬には、生徒2名が日本企業入社のため、来日できましたが、それ以来また渡航が禁止されています。今現在､厳しい状況の中、日本語教育と日本企業向けの人材育成を進めています。2021年4月、当校のマノージュ君が北海道大学のインテグレーテッド・サイエンス・プログラム・ISPに選定され、進学が決まりました。2年連続でSSVの高校生が日本に留学できるようになったのは言及する価値があると思います。これからも多くの中学生、高校生、大学生や会社員に日本語を教え、優秀な人材を育成し、日本の人材不足問題を解決することに一所懸命に努力します。それに加え、私のミッションでもある「技術と人材で日本とインドの橋渡し」を実践できると確信しています。

インドの新教育政策 2020
―特にその言語教育を巡って―

大阪外国語大学名誉教授・本会会長

溝上 富夫

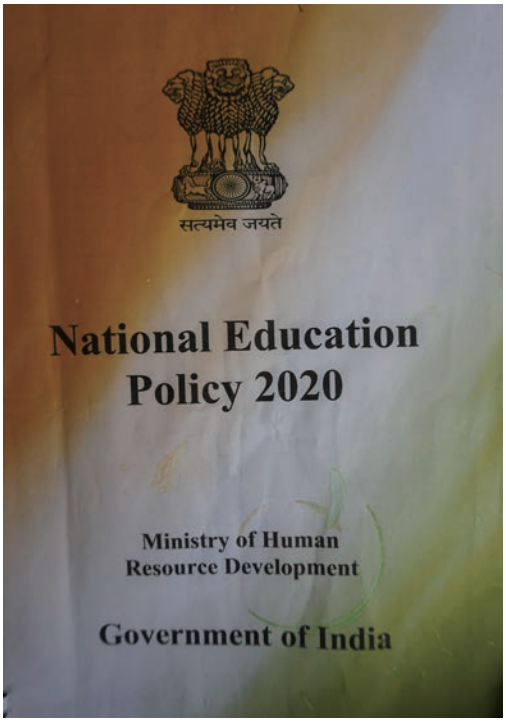
は　じ　め　に

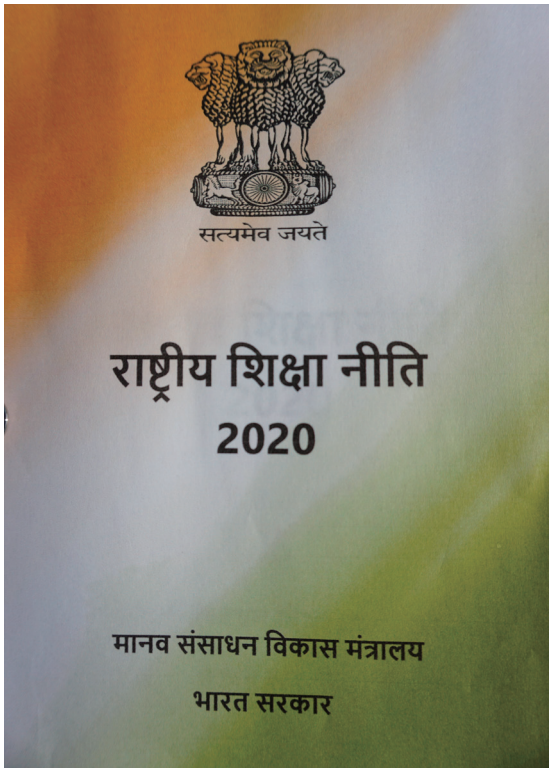
昨年（2020 年）インド政府（人材開発省）は、34 年ぶりの教育改革と言われる「国家教育政策 2020」を制定した。英語版が 65 ページ、ヒンディー語版が 107 ページからなる冊子としてネット上で公開されていて、教育界をはじめ、各界で高い関心を集めている。主要な改革点は、次の通りである。

（1）これまでの「10（6 歳～ 16 歳）＋ 2（16 歳～ 18 歳）」という学校教育の制度が幼児教育とも一体化させた「5 ＋ 3 ＋ 3 ＋ 4」という新制度に再編成すること。つまり、基礎教育 (Foundational) の 5 年（これを 3 年の幼児教育と小学校 1 ～ 2 年級の 2 つに分ける）＋予備教育 (Preparatory) の小学校 3 ～ 5 年級＋中学校教育（Middle）の 6 ～ 8 年級＋高等学校教育（Secondary）の 9 年級～ 12 年級という制度である。（2） 1 ～ 5 年級の授業を母語 / 地域語で行う。さらに可能なら 8 年級までさらにその後も続けるのが望ましい。（3）サンスクリット語教育を重視する。（4）暗記中心主義を理解力と思考力の養成重視に改める。（5）デジタル教育を重視する。（6）職業教育科目や学際的科目も学べる柔軟性のあるカリキュラムを作る。（7） 9 年級からセメスター制を採用する。（8）カレッジ以降の高等教育では、事情があって中退をしても、復学後にそれまでとった単位が有効とされるように Academic Bank of Credit (単位預託制度) を導入する。専攻科目を変更したり、他の大学に転学する際にも利用できる。（8）私立学校の授業料を政府が決める。（9）GDP の 1.6% しか教育費に使われていない予算を将来は 6 % にまで高める。(10) 人材開発省 (Ministry of Human Resource）という名称を以前の教育省（Ministry of Education）に改める、等々。

全体として、かなり意欲的であり、これらの中には、日本の教育改革と共通するものもあって参考になるが、ここでは、

多民族・多言語国家インドならではの言語教育について論じる。





英領時代の言語政策

その前に、英領時代の言語政策として、インド諸語を重視した政策と英語教育の導入という相反する２つの重要なできごとについて簡単に述べる。特に、後者は、独立後も現代に至るまで、教育現場のみならず、ほとんどあらゆる場面でインド社会に大きな影響を与えている。

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて起こった、いわゆる近代インドのルネサンス（ベンガル地方が中心だったので、ベンガルルネサンスともいわれる）の最初の外部的要因の一つは、イギリス人ならびにヨーロッパ人東洋学者の手によるサンスクリット文典研究の興隆だといわれる。特に有名なのは、ベンガル・アジア協会を創立し、「シャクンタラー」や「マヌ法典」を英語に訳した、裁判官であり言語学者でもあったサー・ウィリアムズ・ジョーンズである。また、彼が 1786 年にベンガル・アジア協会で行った演説の中で、「サンスクリット語は古典ギリシャ語よりも完璧であり、ラテン語よりも豊富であり、しかも両言語とは、語根や文法形態が偶然とは思えないほど、よく類似している」と語った部分が、のちに、ドイツで印欧語比較言語学という新しい学問分野の誕生と発展に繋がったこともよく知られている。英・独・仏を中心とする西洋の学者たちの研究成果がインドに輸入されて、インド人学者が自国の文

明を学んだことで、インド人の民族的覚醒を促したのである。

それとほぼ同時期に、イギリスの東インド会社に派遣された若いイギリス人書紀に実用的な語学教育を施すために、1800 年に、ベンガル総督のウェルズリーがカルカッタに設立したフォート・ウィリアムズ・カレッジの役割も重要である。そこで教えられていた言語は、ヒンドゥスターニー語・ベンガル語・アラビア語・ペルシャ語で、話すことを重視して、これらの言語で公開討論会も行われて評価の対象とされたという。ヒンドゥスターニー語というのは、一般には、現在のヒンディー語やウルドゥー語の共通基盤となる平易な口語体をさす。インド人が命名したものではなく、イギリス人が命名したもので、英領時代には、ヒンディー語やウルドゥー語という名称（もちろん存在していたが）よりも盛んに用いられていた。日本でも、1908 年創立の東京外国語学校（現東京外国語大学）や 1921 年創立の大阪外国語学校（現大阪大学外国語学部）という官立の両外国語学校時代は、第二次世界大戦の終戦までこの「ヒンドゥスターニー語」が教えられていた。文字はアラビア文字を使っていた。つまり、現在のヒンディー語よりは、ウルドゥー語により近かったということができる。口語体レベルでは、両言語間になんの違いもないものの、高級語彙や文字の違いから、英領インドでは、ヒンディー語＝ヒンドゥー教徒、ウルドゥー語＝イスラム教徒という、必ずしも正しくない概念あるいは偏見によって政治問題化することがあった。スバーシュチャンドラ・ボース率いるインド国民軍の共通語もこのヒンドゥスターニー語であった。フォート・ウィリアムズ・カレッジのヒンドゥスターニー語の英人教員の中で、特に大きな業績を残したのは、ジョン・ボルトウィック・ギルクリスと言う人で、A Grammar of the Hindoostaanee Language (1976) を始め、多くの語学書や辞書を出版したという。

独立後の両教徒間の対立を恐れたマハートマ・ガンディーは、両教徒にとって中立的なこのヒンドゥスターニー語を将来の統一インドの公用語とすべく、その普及に努めた。文字は、アラビア文字と、ヒンディー語表記に使うデーヴァナーガリー文字の両方の使用を認めた。しかし、ガンディーの思惑と異なって、インドとパキスタンが分離独立し、パキスタンがウルドゥー語を国語に採用し、インドがヒンディー語を公用語（国語ではない）と決定したため、ヒンドゥスターニー語という名称は事実上死語となった。（わずかに、ガンディーの思想を引き継いだ「ヒンドゥスターニー語普及協会」という団体がムンバイで活動を行ってはいるが、実際は、ヒンディー語の普及を行っている）我が国でも、戦後は上記の両外国語大学でも数年を経て、ヒン

ディー語専攻とウルドゥー語専攻に分かれて募集している。

なお、フォート・ウィリアム・カレッジでベンガル語が教えられたわけは、言うまでもなく、イギリス東インド会社の拠点でもあり、その後英領インドの首都（1912 年まで）であったカルカッタを擁するベンガル地方の言語であるからである。アラビア語・ペルシャ語はその文化的重要性から教えられたものと思われる。フォート・ウィリアム・カレッジはイギリスの若い官吏用の語学学校だったとはいえ、インド人学者によって、ヒンディー語学や文学の研究がなされたことが、今日のヒンディー語研究の基礎となっており、当時カルカッタはヒンディー語地域ではなかったにも関わらず、ヒンディー語研究の中心地であったのである。

プロテスタント伝道団の布教活動により、東インド会社は土着原住民の言語や習俗の習得を奨励したことも注目に値する。新約聖書の翻訳がベンガル語だけでなく、他の地方語や原住民の言語にもなされたことが、インド諸語の散文の発達に寄与した一面もあった。

また、インドの高級文官でもあり、言語学者でもあったジョージ・アブラハム・グリアソンが英領インド全土の役人を動員して 11 巻 19 冊にまとめ上げた「インド言語調査」（Linguistic Survey of India）もイギリス人によるインド言語の研究として画期的な偉業であった。

しかしながら、1828 年に総督ウィリアム・ベンティングが着任した頃、英領インド政庁から支出されている教育予算は土着教育のために用いられるべきか、それとも西欧教育に用いられるべきかを巡って、論争が起こった。1833 年に、インド人が高級文官任用への道が開かれると、西欧教育への要求が高まり、ベンティングの法律顧問として赴任したマコーレーが英語教育を力説した、有名な次の言葉により、教育に支出される予算はすべて英語教育のみに用いられることとなリ、上の論争に決着がついた。その言葉とは、「我々が最善を尽くすべきことは、我々と我々が統治する数百万人の間の通訳たるべき階層、すなわち、血と皮膚の色はインド人であるが、趣味や思想、道徳そして知性において英国人である階層を作ることである」というものである。これ以後、インドでは急速に英語教育が普及し、今日でも、知識人にとっては必須の言葉となっている。「心は英国人、体はインド人」という人間は、確かにかつては多数存在したが、今では、「身も心もインド人だが、表現だけがインド風英語で」という人間が一番多いと思われる。

独立後の言語事情と 3 言語方式

インドの独立は 1947 年だが、連邦制が発足して憲法が公布されたのは、2 年後の 1949 年 11 月であり、施行されたのが翌 1950 年 1 月 26 日だった。この憲法は世界一長く、日本なら法律の施行細目に当たるような細かいことまで規定されている。いろんな論争の末、独立後のインド連邦の公用語は憲法の第 343 条第 1 項で「デーヴァナーガリー文字によるヒンディー語」と規定された。正式の数字を「インド数字の国際的形態」つまり、アラビア数字または算用数字とした。そして、英語を「準公用語」とした。そして、1965 年にはヒンディー語を唯一の公用語とする、ということが決められていた。ところが、1965 年が近づくにつれ、ヒンディー語を強制されることを恐れたタミル・ナードゥ州の住民の間で激しい反ヒンディー語運動が起こった。この州はタミル語を話す住民が大多数を占める人たちで、インド・アーリア語族の古典語サンスクリットより古い文学をもつとされるタミル語と文化に強い誇りを持つ人達である。ヒンディー語をサンスクリットの末裔であり、北インド文化の代表とみなすタミル民族は、伝統的に反北インド・反サンスクリットの気運があり、マドラス州と呼ばれていた英領時代にも、1937 年から 1940 年にかけて反ヒンディー語運動が起こっている。ネルー初代首相は 1963 年に「公用語法」を制定して、1965 年以降も英語を公用語として認める決定をした。しかし、それでも抗議運動は沈静化せず、1965 年 1 月 26 日の共和国記念日が訪れる前日には、抗議運動が最高潮に達し、各地で暴動が起こり、70 名もの死者が出たと言われる。ネルー政権を引き継いだシャーストリー首相は 1967 年に、非ヒンディー語地域の州が望めば、英語の公用語としての使用を無期限に認めるという「改定公用語法」を定め、連邦政府がヒンディー語を州政府に対して強制すれば、州政府はそれを拒否する事ができるとまで妥協した。こうしてようやくタミル・ナードゥ州での反ヒンディー運動は一応の解決をみたが、一方憲法上の有利な立場を失った北インドのヒンディー支持者の失望感は深く、反動として北インド各地で反英語運動が起こった。しかし、店の看板を英語からヒンディー語に強制的に書き換えさせるという程度のもので、暴動というほどの過激な事態には行かず、また長期化はしなかった。反英語運動といっても、本当にどこまで本心からやっていたかは疑わしい。南インドの学生たちが、公務員試験にヒンディー語を必須にされては不利になると危惧したように、北インドの学生たちが英語を課せられては不利になると危惧したという側面もあった。しかし、英語教育から

は利益も享受しているので、タミル・ナードゥ州の反ヒンディー語運動ほどには盛り上がらなかったのは当然である。

ところで、ヒンディー語をインドの国語（National Language）と呼ぶ人が多いが、民族語という意味では正しいが、「国語」というのは、隣国のパキスタン（ウルドゥー語）やバングラデシュ（ベンガル語）と異なり、憲法上は存在しない。ただし、「連邦の唯一の公用語」であるから、それを拡大解釈して、事実上の国語と称することは必ずしも不当とも思われない。しかし、憲法上の地位は、ヒンディー語の方が英語より上位だが、現実には、英語が圧倒的に幅を効かせていることは言うまでもない。司法の場では、高等裁判所や最高裁判所の審理は英語を使用する（高裁では、そのヒンディー語や州の公用語の翻訳を法廷に提出するのは認められているが）というふうに、憲法でも、英語の優位がはっきりと明記されている。

22 の編と 395 の条項以外に、12 の附則（schedules）というのが設けられているのもインド憲法の特徴であり、その第 8 附則に於いて「ヒンディー語と英語をより豊かにするために必要な言語」として当初は、次の 14 の言語が指定された。

アッサーム語・ベンガル語・グジャラーティー語・ヒンディー語・カンナダ語・カシュミール語・マラーヤム語・マラーティー語・オリヤー語（現在はオディヤー語と改名）・パンジャービー語・サンスクリット語・タミル語・テルグー語・ウルドゥー語（ローマナイズした頭文字の ABC 順）

当時の紙幣の裏側の左には、これらの言語が（表面に大きく印刷されたヒンディー語を除く）この順にそれぞれの言語の文字でかなり大きく印刷されていた（右側には英語で）。その後 1967 年にシンディー語を、1992 年にコンカニー語・マニプル語（メイテイ語）・ネパール語の 3 言語を追加し、さらに 2003 年にボド語・ドーグリー語・マイティリー語・サンターリー語の 4 言語を追加して、現在 22 言語が第 8 附則で指定された言語である（ただし、紙幣にその文字が掲載されているのは、追加された 8 言語のうち、ネパール語とコンカニー語のみである。シンディー語のように自らのコミュニティーの中でさえ、アラビア文字をもとに作られたシンディー文字を使用するかヒンディーと同じデーヴァナーガリー文字を使用するかの決着がついていないという理由があるが、他の言語については、独自の文字を持っていながら紙幣に出ていない言語もあるので、その基準は分からない。ついでに、昔の紙幣には大きな文字で印刷されていたが、最近の紙幣は、裏面の左側に、かろうじて読める程度の小さな文字で印刷されているだけである。その理由もよくわからな

い。余りにも多くの言語で国が分裂しているかのような印象を少しでも薄めようという政治的配慮か、単なるデザインの問題かもしれない)。シンディー語とサンスクリット語以外は、使用地域を地図で示すことができる。大部分は州の公用語または準公用語に指定されているが、カシュミール語はカシュミール州の公用語ではなく、州の公用語はウルドゥーとなっている。この 第８附則言語には、更に、38 言語の追加が検討されているという。この中には、ヒンディー語の方言あるいは方言の中の方言とみなされているものだけで７つもある。不必要に言語の統一を妨げるものと反対意見も強い。今頃、英語の名前があがっているのも、その意図が分からない。英語が母語だと主張するアングロ・インディアンのコミュニティーの主張によるものかもしれない。あるいは、東北インドでは、マニプル州のように英語を公用語としている州があるので、そういう州は憲法上での明記も求めているのだろうか。しかし、英語ははっきりと「准公用語」と明記されているので、それで十分だと思うのだが。

本来、第８附則の言語は、ヒンディー語や英語のような公用語が他のインド諸語の語彙や表現力を採用して豊かな言語になるようにという目的で定められたものであるが、実際は各言語ならびにその使用者の権威付けに使われているように思われる。「憲法で指定された言語」というのは、「公用語」として政府から正式のお墨付きをもらったことを意味する。さらに、公務員試験をこれらの言語で受けることができるという実益もある。インドの州の編成はもともと 1956 年に、「言語州」の制度ができて以来、ほぼ、地域の有力な言語の分布を基準になされている。その時点で、14 州と６連邦直轄地に分けられていたが、その後大きな州を分割するというふうに再編成を重ね続けて、現在では、28 州８連邦直轄地にもなっている。第８附則の指定言語が増えつづける理由の背景には、州が増え続けてきた事情と一体である。いずれも、言語学者の意向よりも地域主義と自らの政治的基盤を強くしようとする政治家の意向に左右されるので、インドが民主主義制度を取り続ける限り、ポピュリズム政治が横行する限り、今後も州と第８附則に指定の言語数が増えていくことを阻止することはできないだろう。(なお、本題と直接関係ないことだが、インドの州の数 28 というのは EU 加盟国の数 27 とほぼ同じであり、EU の面積とインドの面積もほぼ同じ、公用語の数もほぼ同じという点は、興味あることである。EU をインドのような一つの国と見立てた場合、公用語の数もほぼ同じとなる。ただそれでも、人口だけは、依然としてインドが EU の 2.5 倍と圧倒的にまさる。EU で最大のドイツ語人口

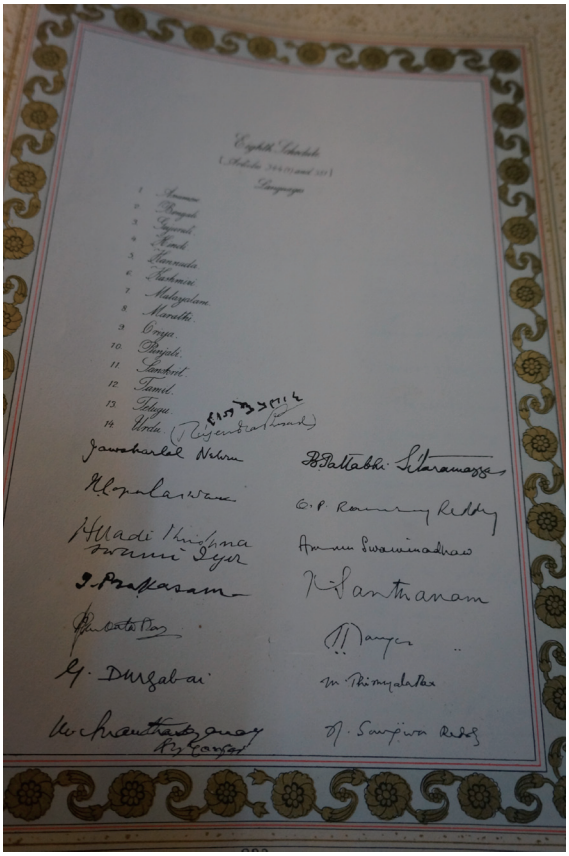
もインドへもってくれば、3 位のマラーティー語とほぼ同じである。）

さらに、インド国立アカデミーで認められた公用語というのがあって、これも別の意味で権威あるものと認められている。というのは、「全てのインド諸語の文学活動を推進しレベルを高めること」というのがこのアカデミー創立の目的であるからだ。「全ての」といっても何百とあるインドの言語を全て扱うわけにはいかないし、文字をもたない言語の方が多いからである。それらの言語で書かれた小説や詩が優秀と認められれば、毎年政府から受賞の対象となる。選ばれた言語は、第 8 附則に指定された 22 の言語に、英語とラージャスターニー語を加えた合計 24 言語である。むしろ、順序から言うと、まずこの文学アカデミーに認められることによって、第 8 附則に加える「正当性」を主張してきたきらいがある。

最後に、学校教育における言語政策で最も重要な役割を果たしている「3 言語方式（Three-language Formula）」について述べる。これは 1968 年に、国家教育委員会（別名は委員長の名前をとって、コーターリー委員会とも呼ばれる）によって発案・採用されたもので、初等教育と中等教育ではすべての生徒は 3 つの言語を学ぶべしとされた。すなわち、
①第一言語は、母語または地域語
②第二言語は、ヒンディー語を公用語とする州では、他の現代インド諸語または英語。非ヒンディー語地域では、ヒンディー語または英語。
③第三言語は、ヒンディー語地域では、第二言語で学ばなかった英語または現代インド諸語。非ヒンディー語地域でも、第二言語で学ばなかった英語または現代インド諸語。

しかしながら、全体としては、英語とヒンディー語が重視されているものの、例外があって、この政策通りに実施されているとは言い難い。「他のインド諸語」といった場合、中・北部のヒンディー語諸州では、それとは系統の違う南インド諸語を学ぶことを期待したものである。これには、上で述べた 1965 年の南インドにおける反ヒンディー語運動の影響もあると思われる。しかし、実際問題として、北インドの小中学校でタミル語を教えようにも簡単にタミル語の教師が見つからわけでもなく、仮にタミル語を学んでもその「実用性」はない。言葉は実用性だけで学ぶべきものではない。インドの統一性・一体感を獲得するには、南インドの言葉の一つぐらいは学ぶ必要があるとといたところで、一般の生徒にはピンと来ないだろう。かくして、ヒンディー語圏の生徒には、親しみのあるサンスクリットを学ぶほうがはるかに容易で実益があるというわけで、第三言語にサンスクリットを選んだのだ。厳密には「現代インド諸語」という規定に反するし、こ

の３言語方式をいわば「骨抜き」にしてしまったわけだ。南インドの人々にヒンディー語を強制する「仁義」もなくしてしまったと言ってよい。当然のことながら、タミル・ナードゥ州では、どこの学校でもヒンディー語が教えられていない。他に東北インドの小さなトリプラ州があるが、その理由は不明である。



「インド憲法の第８附則」の写本。ラージェンドラ・プラサード初代大統領とジャワハラール・ネルー初代首相の署名がある。（2017 年 11 月、グジャラート大学中央図書館にて。筆者写す）

言語と教育格差

ようやく本題に入ることにする。「国家教育政策 2020」でも、この「3 言語方式」は踏襲され、より明確に母語や地域語が重視されている。英語版の 11 ページ（ヒンディー語版では 18 ページ）の第 I 部「学校教育」第 4 章の 4.11 に「よく知られているように、小さな子どもたちが意味のある概念をより早く学び、理解することができるのは、自分の家庭で使う言葉 / 母語を通じてであり、通常は母語であり、地域のコミュニティーによって話される言語である。もっとも、多言語が話される家庭にあっては、他の家族の一員の話す家庭言語が、母語や地域語と異なるという事例も時としてあり得る。可能ならば、少なくとも 5 年級まで、しかしより望ましいのは、8 年級さらにその後も、家庭で使用する言語 / 地元の言語 / 地域言語で教えられることである。その後も、家庭 / 地元の言語を可能な限り、言語として継続的に教えるべきである。公立・私立の学校はどちらもこれを守らねばならない。理数科を含めたすべての科目において、より高度で質の高い教科書を家庭で話す諸言語や母語で入手できるようにするべきだ。また、子どもたちの話す言葉と授業で使う言語間にもし不一致があれば、それをなくすことを決めるために、すみやかにあらゆる努力がなされるものとする。家庭で話

す言葉や母語で書かれた教材が手に入らないような場合、教師と生徒間の会話の言葉も可能な限り、家庭で話す言葉とすべきである。生徒が家庭で話す言葉 / 母語が授業を受ける言葉と異なる場合、教師は 2 言語教育実践の材料を含む 2 言語によるアプローチを利用することが奨励される。あらゆる言語があらゆる生徒に、より高度な内容の教育がなされるべきである。ある言語を有効に学び教えるには、その言語を授業に使用する必要性はない」

しかし、他方では、「柔軟性をもって行われるべきで、どの州に対してもいかなる言語も強要されてはならない」（4.13）と慎重な表現が続いている。過去の言語対立の再現を避けたいとの思いがあるのだろう。

家庭で使用する言語 / 地元の言語 / 地域言語が異なる一例として、ムンバイに隣接するターネ県ウルハースナガル市に住む住民の例をあげよう。この町の大部分の住民は、1947 年のインド・パキスタンの分離独立の際、パキスタン領となったシンド州からインドへ移住してきたシンディー人とその子孫たちなので、彼らの家庭言語と母語はシンディー語で、地元の言語もシンディー語だが、地域言語はマラーティー語である。この町に他州からビジネスや出稼ぎ等の目的で、例えばビハール州から移住してきた人（少ないが）にとっては、家庭の言語と母語はヒンディーの方言で、地元の言語がシンディー語、地域言語がマラーティー語ということになる。シンディーの子孫でも 3 世代もたつと、徐々にシンディー語を使わなくなり、家庭でもヒンディー語を話すという家族も増えている。そうすると、母語イコール家庭言語でもなくなり、言語をめぐる状況は複雑となる。さらに、両親が異民族間結婚をしていれば「母語」だけでなく「父語」も存在し、家庭言語が英語ということもある。ほぼ、単一言語国の我が国では、家庭言語も母語も地元の言語も地域の言語もすべて日本語である。複雑なインドの言語事情を考慮して、このような慎重な書きぶりになったものと思われる。

ここで注意すべき点は、これまでの言語政策と異なって、ヒンディーを始めとするインド・アーリヤ語族に属する諸言語の名前は、サンスクリット語・オディヤー語・パーリ語・プラークリット語以外に一切述べられていないということである。サンスクリットの重要性は、4.17 で強調されており、この難解な言葉を楽しく学ぶために、「簡易標準サンスクリット（SSS）」を教えることを提唱しているが、具体的なイメージが沸かない。文法を変えてまで教えるとしたら邪道である。次の 4.18 において、サンスクリット以外に「極めて豊かな文学を持つ古典タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラーヤーラム語・オディヤー語以外に、パー

リ語・ペルシャ語・プラークリット語を未来の世代の幸福と繁栄のために保存すべきである」と書いてあるが、何故ヒンディー語を始めとするインド・アーリヤ語族に属する有力な言語名の名前がなく、ドラヴィダ語族に属する主要 4 言語の名前が挙がっているのか、また何故「古典語」なのか、なぜ外国語たるペルシャ語の名前が挙がっているのか、理解に苦しむ。言語をめぐる過去の対立を避けるためとしても、余りにも南インドに対して「忖度」しているばかりか、他の言語名の挙げ方が恣意的で、論理性を欠いており、美辞麗句が並んでいる割には作成者の知的レベルが疑われる項目だ。ついでに、中級レベルで学ぶことを奨励される外国語として、朝鮮語・日本語・タイ語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・ポルトガル語・ロシア語（4.20）とヘブライ語（22.6）が挙げられているが、誰でも、「何故ヘブライ語があって中国語がないの？」と疑問に思うだろう。インド人にとっては、中国語こそ英語に次いで学ぶべき最も重要な外国語ではないだろうか。まさか、かつての我が国が犯した「敵性言語」政策を取ろうとしているわけではなかろうに。

ところで、ここで論じたいのは、インド国内の教育格差についてであるが、もちろん家庭の経済格差によるものだが、言語の格差も関わっているという点である。しかもインド諸語間の水平的対立ではなく、英語とヒンディー（これから北インドの例を挙げるので、あえてヒンディーという）の垂直的対立である。たまたま、「国家教育政策 2020」のテキストの 4.11 で、「公立・私立の学校はどちらも……」という表現があったが、この公立・私立の違いは重要である。概して前者よりも後者のほうが、レベルが高いだけでなく施設もはるかに充実していて、教育環境にも恵まれている。日本でも一流大学に入学するには、私立の 6 年制一貫校が有利といわれるが、公立でもまけない学校はいっぱいある。基本的には、授業は日本語で行われ、教科内容もほぼ同じである。ところが、インドでは、公立校ではヒンディー語で、私立校では英語で学ぶ。英語「を」学ぶことと｛英語「で」学ぶこととは意味合いが違う。日本の学校での英語教育は、殆どが、「を」教育で行われる。文科省は大学に対して英語「で」授業を行なうことを奨励しているが、国際教養大学や立命館アジア太平洋大学（APU）等の大学では、ほとんどの授業（前者で 90％以上、後者で 80% 以上）が英語で行われている一方、旧帝大を中心とする国立大学は意外と少なく平均 10％ぐらいである。インドの私立校では低学年から英語「で」、公立校ではヒンディー語「で」学ぶ。この違いの影響は、一生を左右するほど大きい。単に英語「を」一科目として学ぶのと、語学を除く全科目を英語「で」学ぶので

は、身につく英語力が全然違う。インドのエリートの多くが英語を駆使して世界のIT業界で目覚ましい活躍をしているのは、英米の大学で学んだ者が多いからだけでなく、その前に、インドの小学校からすでに英語「で」教育を受けているからである。その小学校とは、もちろん私立である。ITの分野だけでなく、インド国内で高収入が期待できるあらゆる職業では、公務員も含めて英語の実践力が求められる。高収入が得られ、社会的地位の高いとされる職業につくには、子供の頃から高度な英語能力をつけなければならない、そのためには、私立の小学校に入学することが必須である。しかし、高い授業料を払える家庭は限られる。日本以上に経済格差が教育格差をもたらしている。子供の教育のためには親は借金してでも、私立学校に入学させようとして、過当競争が生まれている。なお、公立学校といっても一様ではなく, そこにも格差が存在する。設置者の大きさにより、国立・州立・県立・市立・村立とあり、右へ行くほどレベルが低くなると言われている。国立は「中央学校」(Central School, ヒンディー語では Kendriya Vidyalay）と呼ばれ、軍人や国家公務員の子弟のための学校である。日本では、公務員の子弟のための学校など考えられない（公務員宿舎でさえ批判の対象になるぐらいだから）が、インドは国土が広く、公務員には転勤が常態なのでこのような学校も必要とされるのである。

英語偏重主義の弊害

私が学生の頃、ヒンディー語が英語に代わって唯一の公用語になると定められた憲法が適用される1965年が近づいていた頃だったので、当時のヒンディー語教師には、学生の学習意欲を高めるために「まもなくヒンディーの時代が来る」と説く先生がおられた。一方、インド人の英語力を世代によって分析して、「独立以前にインドで育った人の英語は上手だが、独立後に生まれた若い世代になるほど、英語が下手になりつつある。逆に、ヒンディーは上手くなりつつある。このまま行けば、インドは日本のような国になるだろう」と楽観論を説く先生もおられた。しかし、独立75年目を迎えた現在のインドの言語状況を見ると、どちらも楽観的すぎて、現実には英語がますます蔓延る社会となっていることが分かる。エリートしか用いない「外国語」だと思っていたら、経済が高度成長し、ミドルクラスの所得が伸びるにつれ、もはや「外国語」でない英語への憧れは止めることのできない潮流となっている。それは、なによりも英語が就職に絶対必要だからである。（なお、もともとインドの大学で「外国語学部」またはそれに類する組織では、英語は「外国語」に含まれない。別の理由で、第二次世界大戦中、東京・大阪両官立外国語学校（当時の正

式名称は外事専門学校）では、「外国語」でないという理由で朝鮮語は教えられていなかった）

自分の子供を私立学校へ入学させることのできない父兄たちは、あろうことに、州政府（初等中等教育を担当するのは、原則的に州政府である）に、公立校で英語を媒体語（授業で使う言語）として、つまり英語「で」教育してほしいと訴えたのである。民主主義国たるインドは、こうした多数の父兄の要望には、ある程度応じざるを得ない。ポピュリズムは民主主義の負の側面である。実際に、ウッタルプラデーシュ州，ウッタラーカンド州、チャッティースガル州・マドゥヤプラデーシュ等では一部の公立校では、英語媒体に切り替えられたか、切り替える計画があるという。父兄はそれで、自分の子供が英語をマスターして出世してくれると喜んだかもしれないが、総括もせずに、表面上の「変化」だけで満足するのは非常に危険だ。まず、英語「で」、ヒンディー語以外の科目を教える資格のある教師はそう簡単にみつかるのだろうか。ちょっとした日常の英語ぐらい話せるインド人は小学校の先生もふくめていっぱいいる。そういう人に安易に依頼して父兄の要望に応じたケースも多いと聞く。そういう教師の「いい加減な」英語で学んだ生徒たちは、英語も不完全、不完全な英語で教えられた算数の知識も不完全という中途半端な結果が残るだけで、最悪の環境ということになる。また、両親が特に圧力をかけなくとも、例えば、ムンバイにあったいくつかの民族学校（例えば、タミル人子弟のためにタミル語で教えるタミル学校、グジャラーティー子弟のためのグジャラーティー学校、先ほど述べたウルハースナガル市のシンディー学校等）は、母語への関心の喪失のため、生徒の数が減少して行って、やむなく英語「で」の教育に切り替えることで、かろうじて存続しているという実情もある。これは、新教育政策の精神に真っ向から反するものである。そして何よりも、私立学校が英語「で」の教育から、英語「を」教育に切り替えることができるか、本当に授業料の格差もなくすことができれば、画期的なことである。

ここで、いかに英語の存在が、一般のインド人の意識あるいは無意識に深い影響を及ぼしているかの実例を小説や映画等から少し示そう。

インドの外交官で現外務次官補、ヴィカース・スワループ元在大阪神戸総領事は、映画「スラムドッグ＄ミリオネア」の原作Q＆A（日本語訳は「ぼくと1ルピーの神様」）の著者でもあり、大阪赴任の1年前の2008年に、長編推理小説『SIX SUSPECTS』を出版された（日本語訳は「6人の容疑者」）。この中に、貧しい青年が携帯電話を盗んだことによって、巨万の富とガールフレンドを手にして、彼女を一流ディスコに誘い出す

ことに成功するが、「金持ちは英語だけで話すから」と気張って英語で話しはじめたものの、後が続かず「僕はヒンディー語で話す方が好きだ」とおどおどしているというシーンがあるが、英語に対するヒンディー語の地位を雄弁に物語っている。また、ボリウッド映画に Hindi Medium という、インドのお受験風景を 面白おかしく描いた評判の映画があるが、映画とはいえ、我が子をどんな犠牲を払ってでも私立学校（当然英語「で」教育する学校）に入学させようとするも上手く行かない両親のせつない実態が実にリアルに描かれている。妻が夫に訴える次のセリフは、決してフィクションとは思われない現実味を帯びている。「（娘が）公立学校に行ったら、何も学べないわ。誰かに英語で話しかけられたら、萎縮してしまって、適応できなくなるわ。社会で孤独になり、うつ病になるわ」「この国では、英語は単なる言葉ではなく、階級なのよ、階級！この階級に入り込むには、良い学校に入れる以外に、何の方法もないわ。私達が（公立学校で）してきた我慢をあの娘にさせたくないわ！」実際、その上流階級になるために、この夫婦は高級住宅街に引っ越す。そこでの社交界では、趣味までもが上品であることが求められる。

当然、インド国内での主要な学会・研究会などの討論は、英語で行われる事が多い。それは当然のことと認識されており、特に異義を唱える人は少ない。

私は 2020 年 12 月 15 日に、プネー市にある MIT World Peace University で開催された National Teachers' Congress の開会式にゲストとしてオンライン出席した際、挨拶の中で次のようにヒンディー語で述べた。この教員会議のテーマはまさに、「新教育政策」をめぐるものだった。

「ここで、私が皆さん方に根本的な疑問を投げかける不遜をお許しください。皆さん方は、この会で " 当然のごとく " 英語で話されていますが、私の根本的な疑問は、何故そうなのかと言うことです。インドの教育に関して、英語で論じることを " 当然のことと " 考える一握りのエリートの人々が、この会の媒体言語がヒンディー語やマラーティー語ででも可能だったと一度も考えなかったのは何故ですか。皆さん方の 90％以上の人たちは、マハートマ・ガンディー翁の崇拝者であり、ガンディー主義の信奉者であられるでしょう。だとすると、ガンディー翁の次の言葉をどうして忘れられたのですか。" もし、私の手に独裁者の権力があれば、外国語を介して与えられる教育をやめさせるか、あらゆる教師や教授たちにこの言語を直ちに変えさせるか、あるいは彼らを解雇するだろう " と。もし、みなさん方が本当に、「国家教育政策 2020」の 4 章の 15 項に述べられていることー " インドの諸言語は、世界

で最も豊かで、科学的で、美しく、かつ最も表現力に富んだ言語のひとつであり……”を信じて、インドの諸言語の優越性を誇りに思われるのなら、何故、英語を使う必要性があるのでしょう。言行不一致ではないでしょうか。私の考えでは、この最大の原因は、インド人の無意識に深く根ざした ”Angrezjyat“（英国または英語崇拝主義）です。”Angrezi ”（英語）と ”Angrezjyat“（英語崇拝主義）を区別する必要があります。英語は誰もが学ばなければならない重要な国際語ですが、”Angrezjyat” は、英国または英語の栄光と権威を最高とみなし、その言語と文化に服従するという忌むべき心的傾向をいいます。独立後 73 年にもなるにも関わらず、大部分のインド人はこの英語崇拝主義の犠牲者となっています。しかもそれは、イギリス人がもたらしたものというより、インド人自身が背負い込んだものと思います……」

この厳しい指摘を聞かれた、主催者 MIT 総長のヴィシュヴァナート・カラード氏からは、ヒンディー語で賛辞を賜ったが、もちろん大会は英語で続けられた。私はいくつかの部会にも出席して熱心な討論を聞いたが、中でも「母語による教育」部会のなかで、ある地元プネーの人と思われる参加者が、「いよいよ母語で教育しなければならないそうで、緊張しますね」と述べていたことが印象に残った。発言を求められた私は、「毎日家で話しておられるマラーティー語で授業することが、英語で行うよりも緊張するとは、私にとっては真逆で、ちょっと理解不可能です。母語で行うほうがずっと容易なはずで、子供にとっても容易に科目の理解ができるはずです」と答えた。初等教育で英語を強要することは、子供にとって大きな負担で、英語の苦手な子供の IQ が低いということはない。全体の成績は優秀なのに、英語の成績だけで落第させられて自殺をしたという中等教育の生徒の悲劇もしばしば報じられる。

さて、これほど重視され、崇拝さえされる英語を実際にどれほどのインド人が使いこなせているのだろうか。これには諸説が有り、India Human Development Survey によると、男女差・年齢者・学歴・カースト・居住地（都市か農村か）によっても異なるが、総じておよそ 2 割のインド人が英語を話せるとのことである。しかし、ペンシルバニア大学のスレンドラ・ガンビール名誉教授の自らのインドにおける調査や米国に移住したインド人の第一世代との接触、インド人学生への教育体験に基づくと、正確な文法規則に従って正しい英語を操ることのできるインド人は、人口のわずか 1 パーセント程度と推測されている（2021 年 3 月 7 日のオンライン・セミナーにて）。1 パーセントといっても 1300 万人もいるのはすごいとも言えるし、何だ、この程度か、という評価もあろう。

英語重視は自国語軽視につながる。一例として、電車やバス等の乗り物や公共の掲示物に書かれたヒンディー語の綴り字の間違いが目立つし、それを指摘して訂正しようとする者も誰もいない。右の上の写真は、デリー市内のメトロのサーケート駅構内で見かけた工事中を知らせる公示標で、「修理中につき、ご迷惑をおかけします」と書かれているが、右下から２つ目の文字は正しいヒンディー語の文字ではない。毎日何十万人という人がここを通行しているはずだが、だれも素知らぬ顔で通り過ぎて行く。もちろん書いた職人の上に、教育を受けた上司がいるはずだが、監督責任は多分問われないだろう。英語なら放置するだろうか。その下の写真は、ヒンディー映画のなかでも見られるヒンディー文字の誤りの例である。アーミル・カーン主演の「Chase 3」という、シカゴを舞台とする痛快アクション・ドラマの中で、融資を銀行に拒否されたため倒産したサーカス団の団長が自殺をするが、息子が成長して、復讐のために、その銀行に強盗に押し入って大量の現金を奪うシーンがある。その時、犯人は自分の出自がインド系であることを知らせるため（因みに、そのサーカス団の名前は Great Indian Circus）、わざとヒンディー語で「銀行家ども、地獄でくたばれ！」と書いた挑発文を現場に残すが、そのヒンディー語に存在しない母音文字があるのだ。意図的に間違えて書いたとは思えない。日常的にヒンディー語を使用していないので、間違とさえ気がついてないのだろう。プロデューサーの責任だ。

（2014 年 12 月デリーにて筆者写す）

最後に、著名なジャーナリストで、アフガン問題が専門の国際政治学者でもあるヴェード・プラタープ・ヴァイディク氏の、９月 14 日の「ヒンディー・デー」についての論評（インターネットに投稿）を紹介しよう。氏は、学生時代、ジャワーハルラール・ネルー大学へ Ph.D 論文をはじめてヒンディー語で書いて提出したところ、受理されなかったことで、大学当局に抗議したところ、退学処分を受けた。そこで国会に直説訴えて、後に

首相となるアタル・ビハーリー・ヴァージュペイー議員等の有力政治家の賛同を得て、大学当局の決定を撤回させ、ヒンディー語で書くことを認めさせたという経歴を持つ気骨のあるジャーナリストである。

「1947 年 9 月 14 日は、制憲議会がヒンディー語を公用語とすると決定した日なので、毎年 9 月 14 日はヒンディーの日として祝われるが、皆さんはヒンディー語が実際にインドの公用語となっているかどうか考えられたことがありますか。もし、ヒンディー語が公用語であったならば、少なくともインドの公務はヒンディー語で行われていただろう。しかし、今日では、公務はおろか家事すらもヒンディー語で行われていない。英国の支配下にあったときは、それでもヒンディー語の地位は高かった。しかし、今日のヒンディー語の権利といえば、不可触民やダリト程度である。国会のどんな法律もヒンディー語で制定されないし、最高裁判所のどんな判決や討論もヒンディー語で行われない。政府の公務は英語で行われている。どの大学も英語が必修である。ほとんどの大学では、英語で授業が行われている。鹿の背中に草が載せられように、小さな子供たちにも英語を背負わされている。子供たちは両親にもこの頃は、マンミー・ダディーと呼ぶようになり、お父さん・お母さんという語彙は消えてしまった。「…. さん」という文字が彼らの呼称から退場している。言葉から得られるサンスカール（洗練さ）は無くなろうとしている。ヒンディー語の新聞やテレビのチャンネルは、英語の語彙の重みで片足が動けなくなってしまっている。毎年試験に落第する何千万人という子供たちの大多数は英語で失敗している。インドの市場で輝いている英語の看板を見ていると、インドは未だに英国の支配下にあるように思われる。銀行に行って見ると分かるように、ほとんどすべての預金者は英語で署名をしている。名前がヒンディー語なのに、何故サインだけ英語でするのだろう。人のを真似るのなら、全部真似るべきだ。自分の名前もチャーチルやジョンソンにしないのか。物真似も中途半端だ。ヒンディー語がいつの日か公用語となるかどうかは分からない。しかし、民衆の言語であり続けることは非常に重要である。我々の政治家が高級官僚の下働きを止めたときこそ、ヒンディー語は公用語となるだろう。我々の政治家は選挙とお金のことに錯綜している。彼らには、行政を行う余裕はまるでないのだ。自分の言葉を用いずして、我が国に真の民主主義をもたらすことはあり得ない。世界の強国や豊かな国ではどこでも、外国語を使うのは外国貿易・外交と研究だけである。しかしインドでは、どんな重要な仕事でも、それをしたり依頼しようと思えば、ヒンディー語では出来ない。だから、ヒン

ディーの日は、形式に過ぎなくなっているのだ」

おわりに

教育学者で、元デリー大学教授のクリシュナ・クマール氏は、この新教育政策の全体的評価を下すにはまだ時期尚早だが、多くの変革はあまり期待できないとの冷静な見解を述べられた（筆者への私信）。順調にゆけば、2022 年から実行される事になっているが、コロナ新ウィルスの蔓延により、大学進学先を決める重要な 12 年級の今年度末全国共通テストが実施されずに延期となっている。このような重要な懸案事項が解決されないうちは、具体的改革に踏み切るのは無理だろう。また、初等教育での授業言語を英語から母語や地域語へシフトするという、従来の固定化した制度からすると大きな変化であるが、よく読むと、「可能ならば」「できるだけ」というような、はじめから改革を諦めている口実ともとれる語句が並んでいる。本当にやる気なら、余計な語句だと思われる。しかし、一方では、英語教育の牙城と思われていた IIT（インド工科大学）等で、ヒンディー語のみならず、主要な地域語（マラーティー語・タミル語・テルグ語・カンナダ語・グジャラーティー語・マラヤーラム語・ベンガル語・アッサーム語・パンジャービー語・オディヤー語）での授業が選択制だが開始されたというのは、朗報である。BJP 政権の政策には、ヒンドゥー色が強すぎるといういろいろな批判があるが、徐々に英語偏重から民族語へのシフトを図ろうとする政策は、私個人としては、歓迎すべきことと考える。モーディー首相自身が常に、海外を含めどこでもヒンディー語で話しているのに、ヒンディー語を話す一般市民が二級市民的とみられがちという現実は、独立国として健全なことではない。したがって、ヒンディー語が国連の 7 番目の公用語になる日は、まだまだ遠い。

参考文献

井筒俊彦　1952.「ヒンドゥスターニー語」『世界言語概説（上巻）』研究社。

板垣與一　1962.『アジアの民族主義と経済発展―東南アジア近代化の起点―』東洋経済新報社。

溝上富夫　1984.「多言語社会の文化的諸相」近藤治編『インド世界―その歴史と文化』第 7 章　184 － 193 頁・世界思想社。

鈴木義里　2001.『あふれる言語、あふれる文字　インドの言語政策』 右文書院。

榎木薗鉄也　2007.「インドの言語政策と言語状況―言語ナショナリズムと英語の拡大―」山本忠行・河原俊昭（編）『世界の言語政策　第二集　多言語社会に備えて』第 7 章　151-

178 頁 くろしお出版。
浜渦哲雄　2009.『イギリス東インド会社―軍隊・官僚・総督』 中央公論新社。
Vikas Swarup　2009. Six Suspects A Black Swan Book, UK
榎木薗鉄也　2012.『インド英語のリスニング（CD 付）』 研究社
Azam,M.,Chin.,&Prakash、N. 2013. “The Returns to English-language skills in India” Economic Development and Cultural Change,61(2),
pp.335-367
萬宮健策　2015.「言語問題とアイデンティティ」 粟屋利江・井坂里穂・井上貴子（編）『現代インド 5　周縁からの声』 第 11 章　277-296 頁　東京大学出版会
榎木薗鉄也　2016.『インド英語のツボー必ず聞き取れる 5 つのコツー』アルク
赤井ひさ子　2016.「インドの初等教員養成：質的検討の試み」広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第 19 巻第 1 号　89 ～ 100 頁。
倉橋愛　2016.「大英帝国の「外国語大学」：Fort William College の創設から廃止まで」大阪大学博士論文　https://doi.org/10.18910/61834
倉橋愛　2017.「フォート・ウィリアム・カレッジの学籍制度」『比較文化研究』127,23-32 頁
倉橋愛　2018.「19 世紀初頭のインド派遣書紀教育―フォート・ウィリアム・カレッジにおける試験と公開討論会―」『南アジア研究』30 号、36-52 頁
Ministry of Human Resource Development, Government of India　2020.
National Education Policy 2020
मानव संसाधन विकास मंत्रालय, भारत सरकार 2020. *राष्ट्रीय शिक्षा नीति 2020*
松岡環・高倉嘉男　2021.『新たなるインド映画の世界』 PICK UP PRESS
本名信行・SHARMA Anamika 2021.『（音声 DL 付）日本人のためのインド英語入門　ことば・文化・習慣を知る』三修社

三上敦史さんを悼む

溝上富夫（会長）

5月11日に二度目の入院治療もむなしくお亡くなりになられた本会副会長の三上敦史大阪学院大学名誉教授は、筆者と同じく大阪外国語大学のインド語学科に1961年に入学した同級生であり、以来60年間も、専門は異なっても、同じインドを対象とする研究者として親しくしてきた間柄だけに、実に寂しく思います。三上さんは定時制高校の教師をしながら、大阪大学大学院で、経済学で博士号を取得した苦学生で、ご専門はインドの財閥です。三上さんが1993年に出版された『インド財閥経営史研究』は363ページにも及ぶ大著であり、韓国語にも翻訳されているのは、国際的にも高く評価された業績である証明です。52才頃のまさに油の乗り切った頃の業績です。温厚な人柄から、学生だけでなく大学の同僚からも絶大な信望を集め、長年、大阪学院大学の学生部長を務められました。教え子に高橋尚子がいると常々誇りに語っておられました。

大阪外国語大学でも長年、非常勤講師として出講されました。柏原市という遠方にお住まいながらも、当協会の仕事も一生懸命手伝っていただきました。前号・前々号とも、優れた論文を寄稿していただいています。今回も、ほぼ原稿を完成されながらも、本誌発行を目の前にして不帰の人になられたのは、私達にとってのみならず。ご本人にとっても心残りだっただろうと思われます。

三上さん、いろいろとお世話になりました。60年間の思い出は尽きません。安らかに、お眠りください。

モガリ真奈美（理事）

関西日印文化協会の副会長に就任されてから理事会でお会いするくらいでしたが、いつも「応援していますよ」と声をかけてくださったり、メールの返信に添えてくださってとても励みになっていました。2020年の協会の文化事業「I LOVE INDIA」で、三上敦史氏講演会「今こそマハトマ・ガンディー！～混迷の時代へのメッセージ～」を企画していましたが、例年通りに行えなかったことが本当に残念です。是非とも拝聴させていただきたかったのですが、三上さんが伝えようとされていたマハトマ・ガンディーについてとそのメッセージに今こそ！関心を持つことを教えていただいたように思います。ありがとうございました。

小磯 学（理事）

三上先生に最後にお会いしたのは、コロナ禍が続くなかでの関西日印文化協会理事会のZoom画面の中でした。やや痩せられて手術後の経過が思わしくないとおっしゃっておられてはいたものの、お顔は明るくお元気そうだったので、訃報には愕然としてしまいました……。

インド財閥研究の泰斗として先生のお名前は知っておりましたが、先生に初めて直接お会いできたのは、縁あって関東から関西に移り住むようになり本協会に参加させて頂いた時のことでした。お洒落でダンディーでとても物腰が柔らかな方で、大研究者とのイメージギャップを感じたのを覚えています。ただそのお仕事の内容から推察するならば、その胸の内にはインドへの熱く燃える想いが漲っておられたのだろうと思います。

その後もお会いするのは理事会の限られた時間だけでしたが、その秘めた熱い想いをもっと語って頂けばよかったと、悔やまれてなりません。後悔先に立たず…。

心よりご冥福をお祈り致します。

三住慈櫻（理事）

三上先生には、お会いするたびに親しく歓談していただきました。あるイベントの準備をしていたとき、”何か手伝うことはありませんか”と声をかけてくださいました。そのときの柔和な笑顔が目に浮かびます。誰に対しても優しく温かいお人柄にとても感動いたしました。きっと先生の聖霊はインドの天地に馳せ、次なる生への旅立ちに備えエネルギーを充填されていることでしょう。

三上先生、本当にありがとうございました。

中崎和代（理事）

三上副会長の突然の訃報にビックリ致しました。関西日印文化協会のイベントでは、三上先生は何時もご苦労様、と笑顔で優しいお言葉を頂き、何か暖かいものを感じました。インドクラブでのI LOVE INDIA 2019では、娘、孫達に直接いろいろとお話して頂き嬉しく思っておりました。ZOOMでの理事会が最後で、とっても淋しいです。謹んでご冥福をお祈り致します。

奥埜梨恵（会員）

三上先生は、私にとって理想の研究者であり、先生であり、最高のメンターでした。ある講演会に参加した時、三上先生が私に気づき、声をかけて下さいました。三上先生は、大学を跨いで多くの学生を指導されておられたにもかかわらず、ひとりひとりの顔を覚えておられたのです。その時、私は書き上げた論文を雑誌に投稿しようか迷っており、そのことを相談すると、三上先生は、「出したら良いじゃないですか！それでダメだったとしても、どうなりますか？失うものは、何もないですよ！」と、私の挑戦を応援して下さったのです。先生の言葉に背中を押されて投函した論文は、無事に掲載されました。それから、「失うものは、何もない」は、私の「お守りの言葉」になりました。悩むことがあれば三上先生の言葉を思い出し、勇気を振り絞りました。私の新たな挑戦を三上先生にお伝えすると、「失うものは何もないのですから！」と、あの日と同じ言葉で、笑って送り出して下さいました。

もう三上先生の慈愛あふれる温顔に接することができないのかと思うと、胸が締め付けられます。これからも、先生の優しくも力強い「お守りの言葉」を大切にして、悔いのない道を歩んでいきたいと思います。

発展の一途をたどるインド経済を語る上で、三上先生の研究成果は欠かせないものとなりました。これからも、多くの人々が三上先生の研究を通じて、その緻密で丁寧な分析と、にじみ出るお人柄の良さに触れることでしょう。

三上先生、本当にありがとうございました。

インドの歴代大統領

代	大統領	就任日	退任日
1	ラージェーンドラ・プラサード Rajendra Prasad	1950年1月26日	1962年5月13日
2	サルヴパッリー・ラーダークリシュナン Sarvepalli Radhakrishnan	1962年5月13日	1967年5月13日
3	ザーキル・フセイン Zakir Hussein	1967年5月13日	1969年5月3日
	ヴァラーハギリ・ヴェーンカタ・ギリ（代理） Varahagiri Venkata Giri	1969年5月3日	1969年7月20日
	ムハンマド・ヒダーヤトゥッラー（代理） Mohammad Hidayatullah	1969年7月20日	1969年8月24日
4	ヴァラーハギリ・ヴェーンカタ・ギリ Varahagiri Venkata Giri	1969年8月24日	1974年8月24日
5	ファフルッディーン・アリー・アフマド Fakhruddin Ali Ahmed	1974年8月24日	1977年2月11日
	バサッパ・ダーナッパ・ジャッティ（代理） Basappa Danappa Jatti	1977年2月11日	1977年7月25日
6	ニーラム・サンジーヴァ・レッディ Neelam Sanjiva Reddy	1977年7月25日	1982年7月25日
7	ギャーニー・ザイル・シン Giani Zail Singh	1982年7月25日	1987年7月25日
8	ラーマスワーミ・ヴェーンカタラーマン Ramaswamy Venkataraman	1987年7月25日	1992年7月25日
9	シャンカルダヤール・シャルマー Shankar Dayal Sharma	1992年7月25日	1997年7月25日
10	コチェリル・ラーマン・ナラヤナン Kocheril Raman Narayanan	1997年7月25日	2002年7月25日
11	アブドゥル・カラーム Abdul Kalam	2002年7月25日	2007年7月25日
12	プラティバー・パーティル Pratibha Devisingh Patil	2007年7月25日	2012年7月25日
13	プラナブ・ムケルジー Pranab Mukherji	2012年7月25日	2017年7月25日
14	ラーム・ナート・コーヴィンド Ram Nath Kovind	2017年7月25日	現　職

（Wikipediaより）

インドの歴代首相

	首相名	就任日	退任日	所属政党
1	ジャワハルラール・ネルー	1947年８月15日	1964年５月27日	インド国民会議
2	グルザーリーラール・ナンダー	1964年５月27日	1964年６月9日	インド国民会議
3	ラール・バハードゥル・シャーストリー	1964年６月9日	1966年１月11日	インド国民会議
4	グルザーリーラール・ナンダー	1966年１月11日	1966年１月24日	インド国民会議
5	インディラ・ガンディー	1966年1月24日	1977年５月24日	インド国民会議
6	モラルジー・デーサーイー	1977年５月24日	1979年７月28日	ジャナタ党
7	チョードリー・チャラン・シン	1979年７月28日	1980年１月14日	ジャナタ党
8	インディラ・ガンディー	1980年１月14日	1984年10月31日	インド国民会議
9	ラジーヴ・ガンディー	1984年10月31日	1989年12月２日	インド国民会議
10	ヴィシュワナート・プラタープ・シン	1989年12月２日	1990年11月10日	ジャナタ・ダル
11	チャンドラ・シェーカル	1990年11月10日	1991年６月21日	ジャナタ・ダル
12	ナラシンハ・ラーオ	1991年６月21日	1996年５月16日	インド国民会議
13	アタル・ビハーリー・ヴァージペーイー	1996年５月16日	1996年６月１日	インド人民党
14	デーヴェー・ガウダ	1996年６月１日	1997年４月21日	ジャナタ・ダル
15	インドラ・クマール・グジュラール	1997年４月21日	1998年５月19日	ジャナタ・ダル
16	アタル・ビハーリー・ヴァージペーイー	1998年５月19日	2004年５月22日	インド人民党
17	マンモハン・シン	2004年５月22日	2014年5月26日	インド国民会議
18	ナレンドラ・モディ	2014年５月26日	現　職	インド人民党

（Wikipediaより）

関西日印文化協会　役員名簿

顧　　問	黒澤　一晃	神戸松蔭女子学院大学名誉教授（元学長）
	矢野　道雄	京都産業大学名誉教授
	Bhaven Jhaveri	インドクラブ会長
	Ram Kalani	インド商業会議所会頭
	Johnny Lalwani	インディアン・ソーシャル・ソサエティ会長
会　　長	溝上　富夫	大阪外国語大学名誉教授
副 会 長	徳田　一彦	神戸ユネスコ協会副会長
理　　事	山田　芳信	神戸芸術文化会議
	三住　重雄	サードステーションジャパン代表
	中崎　和代	北野国際センター所長
	モガリ真奈美	マルガユニティー主宰
	佐藤　典久	神戸北野天満神社宮司
	小磯　学	関西国際大学　国際コミュニケーション学部教授
	磯貝　富夫	日印関係アドバイザー　MIT World Peace University 講師
監　　査	井上　義雄	音羽電機工業(株)元部長
	畠山　郁朗	都市銀行元外国為替課長TRINCKs経済金融部会長

公的機関　役員・所在地等

駐日インド大使館

〒102-0074　東京都千代田区九段南２丁目２-11
電話 03-3262-2391~97　　Fax 03-3234-4866
E-mail: amboffice.tokyo@mea.gov.in
大使 HE Sanjay Kumar Verma閣下、主席公使(DCM) Shri Mayank Joshi
ヴィヴエカーナンダ文化センター長　Prof. Siddharth Singh
秘書 / 通訳　土屋徳子氏(Senior Interpreter), 中村修子氏(Social Secretary)

在大阪・神戸インド総領事館

〒541-0056　大阪市中央区久太郎町１丁目９-26 ルーシッドスクウェア船場10階
電話 06-6261-7299　FAX 06-6261-7021
E-mail: cgindia@gol.com
総領事 Shri Nikhilesh Giri
領事 Shri Sanjeev Jain
副領事 Shri Vikash Kumar
領事館補 Shri Rohit Grover, Ms.Bharti Kalra
日本人職員　通訳：古市、商務：竹林・高橋、総務：久保、領事部：金井（敬称略）

在日本印度商業会議所

〒541-0057 大阪市中央区北久太郎町１丁目２-1 オウセンティック船場ビル　702号
電話 06-6261-1741　FAX06-6264-1605
E-mail: info@icc-japan.org　URL: https://icc-japan.org/
会頭 Mr.Ram Kalani, 副会頭 Mr.Paramjit Chadha,
秘書 Mr.Shitoru Roy, 会計 Mr.B.Panda　他各役員

関西日印文化協会　会則

平成26年５月30日

（名称および事務所）
第１条　本会は『関西日印文化協会』と称し、事務所を神戸市内に置く。

（目的）
第２条　本会は、日印両国の文化交流を図り、相互理解と友好親善に寄与する事を目的とする。

（事業）
第３条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
（１）講演会、音楽会、舞踊会、セミナー等の開催。
（２）会報、出版物の発行。
（３）その他、本会の目的達成に必要な事業。

（会員）
第４条　本会の主旨に賛同し入会を希望する個人・団体は会員２名以上の推薦と理事会の承認により、本会の会員になることができる。

（役員）
第５条　本会に次の役員を置く。
会長　　１名
副会長　２名
理事　　５名以上
監事　　２名
２、理事、監事は総会において選出する。
３、会長、副会長は、理事の互選により選任する。

（役員の任期）
第６条　１、役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
２、補欠により就任した役員の任期は前任者の残存期間とする。

（役員の担当業務）
第７条　１、会長は本会を代表し会務を統括する。
２、副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を代行する。
３、理事は、理事会を構成し、事業を執行する。
４、監事は、事業の執行状況並びに会計の監査をする。

（顧問）
第８条　会長は、理事会の推薦により、顧問を委嘱することができる。

（会議）
第９条　１、会議は総会および理事会とする
　　２、総会及び理事会は、会長が招集し、会議の議長は会長が行なう。

（総会）
第10条　１、総会は定時総会と臨時総会とする。
　　２、定時総会は、毎年１回、５月に開催し、予算・決算、その他重要事項を審議する。
　　３、臨時総会は、会長が必要と認めた場合、又は、理事の２分の１以上から請求があった場合に開催しなければならない。
　　４、総会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

（理事会）
第11条　理事会は次の事項を審議する。
　　（１）総会に提出する議案。
　　（２）総会の議決した事項の執行。
　　（３）その他総会の議決を要しない会務の執行。
　　理事会の開催及び議事は、第10条第３項及び第４項の規定を準用する。

（会費）
第12条　１、本会の会費は、個人会員・年額5000円、団体会員・年額１万円、
　　賛助会員・年額３万円とする。
　　２、本会の財源は会費のほか寄付金、事業収入、その他の収入をもって充てる。

（会計年度）
第13条　本会の会計年度は、毎年４月１日から翌年３月31日までとする。

（事務局）
第14条　１、本会に事務局長及び書記を置き、会務を処理する。
　　２、事務局長は、理事の中から選任する。

（退会）
第15条　会員が次の各号の１に該当するときは、理事会の決議により退会を認めることができる。
　　（１）退会の意思を表明した場合。
　　（２）会費を１年以上滞納したとき。
　　（３）本会の目的趣旨に反し、又は著しく信用を傷つける行為のあったとき。

（細則）
第16条　この会の運営についての細則は、理事会の議を経て定める。

WITH BEST WISHES

FROM

UNIVERSAL PEARL CORPORATION
(Pradip L. Jhaveri, President)

ASIA to JAPAN

すでに200名以上
インド人学生の
日本企業への採用支援実績

株式会社 ASIA to JAPAN
（アジアトゥジャパン）
https://www.asiatojapan.com

〒101-0063
東京都千代田区神田淡路町1-23-4 VICOLO1階
mail: info@asiatojapan.com
TEL: 03-5579-2139
担当：赤羽根（あかばね）

インドオフィス
AtoJ Labs India Pvt. Ltd.
A-5, Geet Govind Bldg, Dr. Herekar Park,
Near Kamla Nehru Park,
Bhandarkar Road,Pune - 411004

2020年 IITプレースメントで
日本企業に70名の採用を支援

●プレースメント採用サポート実績校●
マドラス/ デリー/ ボンベイ/
ハイデラバード / カラグプル/ カンプール/
ルールキー / インドール / グワハティー/
ダンバード/ マンディ

毎月,日本で面接会を実施
アジア太平洋地区の主要大学
50校以上から学生を集客

毎月学生を集客し面接会を実施
（現在はオンライン開催）
日本にいながら、
外国人学生との面接が可能です。
弊社独自のシステムにより、
事前選考など全てオンラインで行えます。

有名企業,スタートアップなど
ご利用企業実績150社以上

三菱電機 / 東日本旅客鉄道 / パナソニック
/ 本田技術研究所 / コニカミノルタ /
ヤマハ発動機 / デンソー / 花王 / クボタ /
ハウス食品 / 積水化学工業 / AGC /
楽天 / チームラボ / マネーフォワード /
三菱パワー /ENEOS / 横河電機 /
島津製作所 / 堀場製作所 / YKK ほか
※順不同。敬称略

Rogress

ROGRESS BOEKI CO., LTD.

President : Shitoru Roy *Since 1993*

South Oike 1F, 345 Enpukuji-cho, Muromachi-dori
Oike Sagaru, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8175 Japan
Tel : 075-950-1105 Fax : 075-950-1106
E-mail : boeki@rogress.com
Web site : http://rogress.com

Business Line : Export : Industrial and Textile Machinery and Parts, Water Treatment Plant.
: Import : Solar PV Modules, Solar PV Mounting Rack,
Solar System Accessories, Leather, Jute Yarn and other Jute Products.
: Consultancy Services.

CONGRATULATIONS ON THE 75th INDEPENDENCE DAY

OF INDIA & HARMONIOUS INDIA-JAPAN RELATIONS

Best Compliments from

ALWAYS INSIST ON JM PRODUCTS FOR LOVELY MERCHANDISES

Elem Enterprises inc.

Manufacturers' Representatives, Exporters & Importers

Kobe Head Office:
Sannomiya Venture Bldg. 226
Hamabe-Dori 4-chome 1-23
Chuo-Ku, Kobe 651-0083
Tel: +81-78-2528600
Fax: +81-78-2528616

Osaka Office:
Osakaya Honmachi Bldg. 511
Azuchi-machi 1-chome 4-5
Chuo-Ku, Osaka 541-0052
Tel: +81-6-62613551
Fax: +81-6-62661136

http://www.elem.net – info@elem.net

BEST WISHES ON THE 75TH ANNIVERSARY OF INDIAN
INDEPENDENCE & INDO-JAPAN RELATIONS

DEEJAY SHOKAI LTD.

Sanko Bldg, No206 3-9, Minami-Honmachi 1-chome, Chuo-ku, Osaka 541-0054
Tel: 06-6264-0875 Fax:06-6264-0868
E-mail: djshokai@eagle.ocn.ne.jp
Textile Manufacturers, Exporters.

SOLUDA Ltd.

EXPORTER OF PLASTIC,CHEMICAL & RUBBER PRODUCTS
SOLUDA LTD.
SOLUDA BLDG.1F,6-2-13 AZUMA-DORI,CHUO-KU,KOBE
651-0076,JAPAN
TELEPHONE:078(261)3345 FAX:078(261)3323
E-MAIL:mrsoluda@yahoo.com

インド・ブッダガヤ大塔模写
釈迦塔建立 25メートル

兵庫県唯一の成田山分院

西脇 成田山
〔成田山法輪寺〕

西脇市小坂町 電話 0795 (22) 3912番

D.V.D. LTD.

Office : L.T.C. Bldg., 6F, Suite 602, 4-1-8, Isobe-dori, Chuo-ku, Kobe 651-0084
Tel : (078) 232－1920, (078) 232－1921
Fax : (078) 232－1925
E-mail : dvd@dvdnet.co.jp
Business Line : Japan-India Business

VK IMPEX LIMITED

Office : Sanomiya Venture Bldg., 8th Floor, Roon No. 811,
1-23, Hamabe-dori 4-Chome, Chuo-ku, Kobe, 651-0083
Office Tel. : (078)222-6731(Direct) (078)222-4351/2
P.O. Box : Port P.O.Box 171, Kobe 651-0191
Fax : (078)222-5125
Mobile Phone : 090-8986-9626 Mr. Vishnu Motowani 090-1446-1250 Mr. Kishore Motowani
Business Line : Export of Electronics, Sundries & Textiles

Motowani V.	-Director	Res.tel	(078)882-7529
Motowani K.	-Director	〃	(078)882-7241

JANKI (JAPAN) LTD.

Office : Maya Bldg. No. 2, 4th Floor 2-5, Minami-Honmachi 1-chome, Chuo-ku, Osaka 541-0054
Office Tel. : (06)6264-3050/1
P.O. Box : Higashi 664, Osaka 540-8697
Fax : (06)6264-4440
Mobile Phone : 090-1131-0675 (B.K. Goenka) 090-1904-4177 (V.K. Goenka)
E-mail : jankijpn@gol.com Home Page : http://www2.gol.com/users/jankijpn
Business Line : Exporter of Textiles, Machines, Compressors and Parts, Generators, Earth Moving Equipments, Electronic Goods, Photographic & X-Ray Goods, Medical Items, Health Care Equipments and Sundry Goods

B.K. Goenka.	-Managing Director	Res.tel.	(078)242-2082
V.K. Goenka	-Director	〃	(078)242-2082

インド仏心寺を支援する会連絡所
《神戸市災害時緊急避難場所指定》
《神戸市伝統的建造物指定》

浄福寺

（浄土宗 医王山 薬師院）

〒650-0002 神戸市中央区北野町4丁目11-19
TEL 078(221)3052 FAX 078(241)5198
住職 浅野 正運
ホームページ http://busshinji.in

■聞かれています テレホン辻説法（順不同）
●曹洞宗心の電話 0120-508-740
●モダン寺テレホン法話 078-341-8546
●須磨寺テレホン法話 078-732-5800
●浄土宗テレホン法話 06-6771-7768
●健康情報テレホンサービス 0120-979-451 http://www.hhk.jp/
■テレホン相談室（仏事・信仰・人生相談）
●月曜日～金曜日 PM2:00～5:00
TEL (06)6245-5110（宗派別）

GMA *Make Opportunities across borders*

Global Marketing Association 株式会社

日本インド間マーケティング、事業展開、新ビジネス開発
人材事業　　英文校正・翻訳・出版事業

http:// www.global-marketing.co.jp

awano@global-marketing.co.jp
TEL: 050-3368-8082 / FAX: 075-320-2055

KOSHII(JAPAN)LTD.
HIGASHI P.O.BOX NO:61
OSAKA 540-8690, JAPAN.

CELEBRATING 30 -YEARS- ANNIVERSARY

TEL: (06) 6260-0567
FAX: (06) 6260-0568

「日印文化−インド共和国第７５回独立記念特集号２０２１」
発刊おめでとうございます

KATAYAMA YOGA STUDIO
片山ヨガスタジオ
since 1972

片山ヨガ研究所
片山ヨガスタジオ　代表　片山　憲明

ORDER GROCERY ONLINE

SARTAJ®
THE HOUSE OF QUALITY PRODUCT

Scan QR Code
To visit
our website

Sartaj Foods,
Osaka-fu, Ikeda-shi,
Koda 2-10-23
info@sartajfoods.jp
072-751-1976
www.sartajfoods.jp
072-751-1975
sartaj_foods_official
sartajfood

ALL INDIAN SPICES
AND OTHER INDIAN GROCERY
PRODUCTS ARE
AVAILABLE AT SARTAJ.

永田特許事務所

所長 弁理士 永田 元昭　　副所長 弁理士 大田 英司

弁理士 西村 弘　　弁理士 北村 吉章

特別顧問 弁理士 永田 良昭

〒530-0017 大阪市北区角田町 2 番 15 号シログチビル 7 階
TEL(06)6372-0709 FAX(06)6376-1567
URL https://www.nagatatokkyo.net/
E-mail: webmail@nagatatokkyo.net

～祈り・祝福・神々の舞～　南インド古典舞踊

モガリ 真奈美　マルガユニティー主宰

＝ 舞踊公演、イベント出演、講師、教室 ＝

◉出演依頼、教室などのお問い合わせ
marga-m@nifty.com　090 8535 4130
http://manami-f.com

インドのイベント、デザインは ナマステワークス！

インドに関するイベント・製作物はナマステワークスにご相談ください。フライヤーなどのデザイン、ホームページ制作、イベント設営、ボリウッドDJパーティなど様々な企画に柔軟に対応いたします。
インド総領事館や関西日印文化協会など様々なインド関係クライアントよりご信頼を頂いています。

インド憲法の成立展（高野山）

モディ首相講演会ステージ（2019）

インドの文化と人々写真展（2021）

ライブ配信イベント

TEL.**090-3055-2214**　Email **hy@yskw.com**

インド共和国独立第75回記念特集号　広告賛助協賛一覧

広　告

播州成田山法輪寺
浄福寺
片山ヨガ研究所
サス・サンワ 株式会社
SHERWOOD & TIFFANY(JAPAN) LTD.
公益財団法人 兵庫県芸術文化協会
兵庫県立芸術文化センター
キシンチャンド･チェララム･ジャパン株式会社
コオシジャパン株式会社
Global Marketing Association 株式会社
株式会社 ログレス貿易
株式会社 SARTAJ
株式会社 ASIA to JAPAM
永田特許事務所
IMPERIAL SOLUTIONS LIMITED
インドレストラン ミラ
SOLUDA LTD.
DEEJAY SHOKAI LTD.
JANKI(JAPAN) LTD.
D.V.D. LTD.
VK IMPEX LIMITED
UNIVERSAL PEARL CORPORATION
Elem Enterprises inc
マルガユニティー
ナマステワークス

（順不同）

賛　助

溝上　富夫
三住　重雄
中崎　和代
佐藤　典久
モガリ真奈美
小原　純子
辻　恵子
高橋　至
安藤　幸彦
奥埜　梨恵
笹倉　明徳
Pradip Jhaveri
川瀬　陽子
長尾　五幸
石崎　利加
村上　知広
AFC 森木　俊雄
Satyen Bandopadhaya

（順不同）

編集後記

執筆者の皆様方から提供いただいた写真は、どれも非常にユニークなもので、日常的には目にすることができない貴重なものばかりです。ぜひ、カラーのまま紹介したかったのですが、残念ながらコストの関係でモノクロにせざるを得ませんでした。しかし、本協会のホームページで公開するPDFバージョンではカラーのままお楽しみ頂けます。

本年11月19日～21日に、プネー市で開かれる“Konnichiwa Pune 2021”（NPO法人Indo-Japan Business Council主催、在ムンバイ日本総領事館後援）には、本会から筆者を含む3人がゲスト出演することになっています。プネー市はインドにおける日印文化交流の一大拠点で、日本語の学習人口もインドで最大と言われています。このような意義あるイベントに参加することは本会の目的にぴったり合致します。具体的内容はその頃にホームページでご案内いたします。

本書が刊行できたのは、ご多忙の中を寄稿いただいた執筆者の皆様方の熱意と、コロナ禍の不況にも関わらず、広告を出していただいた企業や団体、さらに、賛助金をいただきました個人の皆様のご厚意のおかげです。改めて厚くお礼を申し上げます。

溝上富夫

本出版物は、公益財団法人兵庫県国際交流協会より、令和3年度民間国際交流事業助成金（兵国協第275号－９）の交付を受けたものである事を記し、ここに感謝の意を表明いたします。

訃報　本会顧問　相馬達雄氏（弁護士）は2019年12月に永眠されました。生前には、本会のために何度も浄財を寄付頂くなど大変お世話になりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

日印文化
インド共和国独立第75回記念特集号

発行日　2021年（令和3年）11月1日 [Kansainichiinⓒ2021. all rights reserved]
編集発行人　溝上富夫
発行所　関西日印文化協会　〒650-0002 神戸市中央区北野町３丁目12 電話078-221-2139
北野国際センター内
制作協力　夢叶舎　電話090-8168-9299

＊本誌に掲載致します論文・エッセー等は、寄稿者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

SHERWOOD & TIFFANY (JAPAN) LTD.

EXPORTERS & IMPORTERS OF NAME BRAND

JSK BLDG., 3-5
MINAMI-HONMACHI, 1-CHOME,
CHUO-KU, OSAKA 541-0054
JAPAN

HIGASHI P.O.BOX 660
OSAKA 540-8696, JAPAN

TEL : 06-6261-4281
OFF FAX : 06-6261-4280

Your favorite Indian channels over the INTERNET!!

HUMTUM TV

Foz Zee TV Enquiries please call
Tel : 06-6261-4288
Keitai : 090-3829-8422
E-mail : prakash@humtumtv.com

Note Please call us for any other Indian Based channels also.

Kishinchand Chellaram
キシンチャンドチェララムジャパン株式会社 Japan Ltd.

WE ARE A 100 YEARS OLD SUCCESSFUL AND TRUSTED COMPANY IN JAPAN

Being highly professional property investment and management company, we take great pride in taking care of the needs of our tenants by maintaining our properties up to date, secure and clean with timely renovations and proactive management.

By acquiring new properties, we aim to expand our portfolio and business to new heights in coming years.

www.kcjpn.com
Tel: 078-261-2281 • Fax: 078-261-2283

Chellaram Foundation
www.ChellaramFoundation.com

"If you are passionate about a cause which fits with our objectives, tell us how — together — we can make a difference"

— Lal Chellaram

Chellaram Foundation is the initiative of Mr. Lal Chellaram, following in a tradition established by his father and grandfather.

Charity projects supported by Chellaram Foundation are broad-ranging which we classify under the following areas as our **"7 Directions":**

Our Charities

Chellaram Charities | Chellaram Hospital Diabetes Care & Multispeciality